

愛知学院大学

教養部紀要

第66巻 第2・3合併号

論文

近藤 浩：Hard Times における reasoning animals について	(1)
柴田 哲雄：汪兆銘伝のための覚書き	(13)
清水 義和：サミュエル・ベケットと北村想に於ける詩劇	(65)
田中 泰賢：フィリップ・ホーランの詩	(83)
田中 泰賢：アメリカからのメッセージ ——ロアルド・ホフマンとフィリップ・ホーランの詩——	(97)
菅原 研州：有安道人『弾僧侶妻帯論』と有安老人『対客一話』について ——付録『対客一話』翻刻資料——	(132)
研究業績 (2018年1月～12月)	(133)
第66巻総目次	(143)

2019

愛知学院大学教養部

Hard Times における reasoning animals について¹⁾

近 藤 浩

序

本小論のタイトルは、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812–70) の *Hard Times* (1854) の冒頭部分から着想を得たものである。そこには、架空の商業都市コークタウン (Coketown) の権威者トマス・グラッドグラインド氏 (Mr. Thomas Gradgrind) が、自ら設立した学校の教室で、来訪者に向けて語る演説がある。

「さて、私が求めるものは、事実です。ここにいる男女の子供たちに事実以外のことを教えてはなりません。事実のみが人生に必要なものなのです。他のものは何も植えつけてはならないし、他のものはすべて根絶やしにしなければなりません。理性的な思考をする動物の心は事実に基づいてのみ涵養することができるのです。他のものが彼らにとって役に立つことはないでしょう。これは私が我が子らを養育するのに用いた原則であり、ここにいる子供たちを養育するために用いる原則です。事実に固執せよ、ですよ。」(1)²⁾(下線は筆者による加筆)

この引用の中で、グラッドグラインド氏は事実主義に基づく教育の重要性を訴えている。いかにも問題がありそうな教育方法だが、何よりも筆者の興味を引いたのは下線を付した部分である。その部分は原文では“the minds of reasoning animals”となっている。この reasoning という行為自体は、人間に備わる徳目の一つであると思われるのだが、それに animals という語が続くとなると、かつて日本人が「エコノミック・アニマル」と呼ばれたときのように、reasoning

を行う人間が揶揄されているのは明らかである。そこで、ディケンズが *reasoning animals* という表現を用いて読者に伝えようとしていることを探してみたい。

1

あらかじめ確認しておきたいのは、ディケンズ作品において、理性的に考えるという行為、すなわち *reasoning* が、主要登場人物に必要な不可欠な行為であるという点である。

最初の長編作品 *The Pickwick Papers* (1836-7) において、ウィンクル氏 (Mr. Winkle) は、サミュエル・ピクウィック氏 (Mr. Samuel Pickwick) から、息子ナサニエル (Nathaniel Winkle) が自分に無断で結婚したことを告げられた際、怒りや悲しみを露わにすることを避け、時を置いて自分の目で息子の妻アラベラ (Arabella) の人柄を確かめた上で、息子の結婚を許してやるのである³⁾。

これに続く作品 *Oliver Twist* (1837) では、ブラウンロー氏 (Mr. Brownlow) の *reasoning* が物語の推進力となる。この裕福な老人は掏摸に間違われた少年オリヴァー・トゥイスト (Oliver Twist) を見て、次のように言う。「どうもあの子の顔には何か……何か私の心に触れ、私の興味を引きつけるものがある。この子が無実だという可能性があるのではないか？ この子は誰かに似ている。——はて……ああ！ どこでこの子に似た顔を見たのだろうか？」(OT, 70) ブラウンロー氏は、この疑問を起点として、オリヴァーが亡くなった自分の親友の子供であるという事実にとどり着くのだが、もしブラウンロー氏が自分の直感の理由を冷静に追及しなければ、物語のハッピーエンディングはなかったわけである。

また、ディケンズの円熟期の作品 *David Copperfield* (1849-50) において、主人公デイヴィッド・コパフィールド (David Copperfield) は前妻ドーラ (Dora) を病気で亡くした後、アグネス・ウィックフィールド (Agnes Wickfield) を自分の再婚相手として考えてはいけない理由を理性的に考察している。その場面に⁴⁾、物語の文脈を補って、デイヴィッドの考えを解説すると次のようになる。自分 (デイヴィッド) はアグネスを選ばず、ドーラと結婚した。それでも、アグネスは自分を兄弟のように愛してくれている。今さら自分勝手な理由でアグネスの自分に対する愛を乱してはならないし、そんなことをすれば、アグネスの愛情を失うかもしれない。だからそれをしないのが自分の義務である。また自分は自分の道を切り開き、自分が無性に欲しかったものは手に入れたのだから、手の届かないものがあつたとしても文句を言う資格はないし、耐え忍ばなければならない、そのことも年相応に確信している。以上がアグネスに関するデイヴィッドの *reasoning* である。自分の気持を抑え、理性的に考えることができるデイヴィッドであればこそ、最終的にアグネスの愛を得ることができるのである。

2

では、なぜ *Hard Times* において reasoning という行為が揶揄されるのかを考えてみたい。それには、まずグラッドグラインド氏の信念を知ることが必要になる。

グラッドグラインド氏は、自称「現実主義者」(3) であり「事実と計算を重んじる男」(3) であり、娘ルイーザ (Louisa) と息子トム (Tom) だけでなく、学校の子供たちにも、事実と計算に基づいて考えることを要求し、空想することを禁じている。彼にとって、空想はノンセンスの同意語であるからだ。そして「家族の理性の涵養」(18) に身を捧げてきた彼が子供たちに与える極めつけの教訓は、「驚くなかれ。」(49) というものである。

[この言葉のなかにこそ] 恥を忍んで感情や愛情を育むことなく理性を涵養する機械的技術と神秘的源泉があった。驚くなかれ。足し算、引き算、掛け算、割り算によって、なんとかしてあらゆることを解決せよ、そして決して驚いてはならぬ。(49)

「驚くなかれ。」は原文では “Never wonder.” である。「不思議に思ってはならぬ。」と訳してもよい。この教訓は、すべての問題を計算に基づいて迷うことなく冷静に解決するのに必要な心構えを表すものである。

グラッドグラインド氏が子供たちにこれほどのことを要求する理由は、次の引用中に示されている。

あらゆることは代金を支払ってなされるべきだというのがグラッドグラインド哲学の基本原則であった。誰もどんな理由があろうと、売買行為抜きで、誰かに何かを与えたり援助をしたりしてはならなかった。感謝の念は廃されるべきで、その念から生まれる美德など存在するべきでなかった。誕生から死に至るまで、人間の生存中の歩みは1インチ刻み、すべて勘定台越しの契約であるべきだった。そしてもし私たちがそのやり方で天国にたどり着けないのなら、そこは政治経済の場所ではなかったし、私たちはそこに何の用もなかったのだ。(288-9)

グラッドグラインド氏は引退した金物卸業者であり、上記の考えは商売を通して培われたものと考えられる。彼は決して不親切な人間ではない。父親に去られた少女シシー・ジュープ (Sissy Jupe) を自宅に引き取ったのがその証拠である。研究者ジョセフ・ゴールドが言うように「彼は悪い男というよりもむしろ考え違いをしている男だということである。実際、彼は常

に人間の運命を改善しようとしてきたのである……。」(Gold, 200) 彼はこれまでの50年ほどの人生の中で、感情や愛情がビジネスの妨げになることを学び、その教訓を自分の子供たちや学校の児童らに知恵として学ばせているということである。

先の引用中に示されるビジネスのあり方は、多少の誇張はあるにしても、*Hard Times* が執筆された1850年代の状況を映すものと考えられる。1851年にはロンドンのハイドパークで万国産業製作品大博覧会が開催され、大英帝国は、その博覧会を通じて、自国の経済の繁栄と商業の卓越ぶりを国内外に誇った。エイザ・ブリッグズ著『ヴィクトリア朝の人々』によると、博覧会の目的は「全人類の発展が到達した現段階を正しく検証し、その生々しい描写を与えること……およびそこから今後あらゆる国民が一層の努力を行使することのできる新たな出発点を提示すること」(ブリッグズ, 22)であった⁵⁾。それゆえ、博覧会以降も、英国人はビジネスにおいて一層の成果を求められたはずである。そんな社会情勢の中で、実際にグラッドグラインド氏の哲学に見られるような人間味のないビジネスが営まれていたと見るべきである。その現状に対処するために、空想や感情を排した事実と計算に基づく思考が求められたのであり、子供たちにも将来に備えてその思考法を教え込む必要があったのである。

3

こうした思考法を修得すると、“the minds of reasoning animals”を身につけることになる。この表現の中で「心」を示す語として mind が用いられていることが、かなり重要である。一般によく知られているとおり、mind は理性の宿る心、heart は感情の宿る心を表す。この mind と heart に関連して、グラッドグラインド氏は次の引用のように言っている。これは物語の後半で、彼が娘ルーザに自分の教育法の誤りを突きつけられて衝撃を受けた日の翌朝に、彼女に向かって述べる言葉である。

「こう考える者もいる」と彼は、まだためらいがちに言葉を続けた、「Head の知恵もあれば、Heart の知恵もあるのだと。私はそのように考えてこなかった。しかし、すでに言ったように、今私は自分に疑いを抱いている。私は head だけで十分だと考えてきた。それだけでは十分でなかったかもしれない。今日という日の朝、どうしてそれで十分だと言えるだろうか！ 万が一そのもう一方の種類知恵こそ私がおろそかにしたものであり、今必要とされている本能だと言うなら、ルーザ——」(223)

「Head の知恵」は、理性の宿る mind において生み出されるものである。グラッドグラインド

氏に上に引用した言葉を言わせることによって、ディケンズは、グラッドグラインド氏の思考法が head と heart を分断するための手段であることを示しているのである。

4

では、mind のみで行う reasoning とはどのようなものかを考えてみよう。そのためには、グラッドグラインド氏が自分の年齢に近いジョサイア・バウンダビー氏 (Mr. Josiah Bounderby) を娘のルーザに結婚相手として薦める場面を見るのが良いように思われる。バウンダビー氏は、コークタウンにおいてグラッドグラインド氏と肩を並べるもう一人の権威者で、商人であり、工場主であり、銀行家でもある。グラッドグラインド氏は娘に「お前は衝動的ではないし、ロマンチックでもないし、理性と計算という力強く感情に左右されない見地から全てのことを考察することに慣れている。」(96) と述べたうえで、結婚の提案を単なる事実として考えるようにと娘に助言し、次のように言葉を続ける。

「さて、この場合の事実は何か？ お前の年齢は、おおよその数値で言うと、20歳だ。バウンダビー氏はおおよそ50歳。二人には年齢の点で、多少の不釣り合いがあるが、資産と社会的地位の点では不釣り合いはない。それどころか、すばらしく釣り合っている。すると、こんな問題が持ち上がってくる。この一つの不釣り合いは、今回のような結婚の障害として機能するほどのものか？ この問題を考える際には、これまでに入手できた数値として、イングランドとウェールズにおける結婚の統計を考慮に入れることが大切になる。その数値を参照すると、これらの地域における結婚は、非常に年齢差のある男女の間で行われているケースが多いことがわかるし、このような結婚契約を結ぶ当事者のうちで年長者になるのは、こうした事例の4分の3以上の場合において、花婿の方なのだ。この法則が広く行き渡っていることを示すものとして、インドの英国領の地元住民の間でも、中国のかなりの地域でも、タタール地方のカルマナック族の間でも、旅行者によってこれまでに我々に提供された最善の計算方法を用いると、同様の結果が出てくるという事実は、注目に値する。それゆえに、私が言及した年齢の不釣り合いは、不釣り合いでなくなったのも同然で、(実質的には) 消え去ったようなものだ。」(98-9)

上の引用からわかるように、事実（ここでは統計の数値）だけを根拠にした思考法が、mind のみで行う reasoning の特徴である。この思考法が最良のものだと信じるグラッドグラインド氏は、花婿が花嫁よりかなり年上である場合が多いという事実を指摘すれば娘を説得できる、

と本気で思っているのだ。彼の目には、憎んでさえいる男を夫に迎えなければならないという娘にとっての辛い現実は映らない。その一方で、彼は、花婿の年齢は花嫁の父親に近い場合が多いという事実までは示せていないことに気づきもしない。彼の説得の仕方を見る限り、mindのみで行う reasoning は、都合のよい事実だけを根拠にした視野の狭い思考を生むとすることができる。

さらにグラッドグラインド氏は自分の思考法に基づき、結婚から愛情という要素を取り除こうとする。ルイーザから「お父さん……私がバウンダビーさんを愛しているとお思いですか？」(97)、「お父さん……私にバウンダビーさんを愛するように頼んでいるのですか？」(97)、「お父さん……バウンダビーさんは私に愛してほしいと頼んでいるのですか？」(98)、と矢継ぎ早に三つの質問を突きつけられた際に、グラッドグラインド氏は困惑して返答に窮してしまう。そして彼は愛情という表現は不適切であるとし、それらの質問に代えて、「バウンダビー氏は私に結婚してほしいと頼みましたか？」(99)、「私は彼と結婚しましょうか？」(99)と問うように指示するのである。これはグラッドグラインド流の reasoning では愛情や感情の問題を処理できないということを示している。

また、この結婚話の場面において、ディケンズは、グラッドグラインド式の heart を切り捨てて mind だけを働かせて行う reasoning が、他人を説得できないことを示している。ルイーザは最終的に父親からの結婚の提案を受け入れるが、それは彼女が父親の reasoning に押し切られたからではない。喜びを見つけられない人生において、彼女は自分の一生がはかないものと感じるようになっており、「[私の人生]が続く間は、私にできるわずかなこと、私がするのにふさわしいわずかなことをしたいと思うでしょう。かまうものですか。」(100)と言い放つ。そして彼女は結婚を承諾するのだが、これは、バウンダビー氏の銀行に勤める弟トムの役に立てることだけを願っての決断なのである。彼女はトムのことを「私の生涯のありったけのささやかな優しさの対象」(217)と言っている。彼女は弟のため、heart の力で強引に自分の mind を説得したのである。事実と合理性だけに基づく reasoning は、人間の heart を動かさないのである。

5

「謙遜の暴君 (the Bully of humility)」(14) という異名を持つバウンダビー氏は、その点を意識している人物ではないだろうか。というのも、彼は事実と合理性に驚きという要素を加えて他人を納得させようとするからである。バウンダビー氏は事実主義者として、自らの立身出世物語を驚愕の念を込めて語るのだが、その始まりは、以下のようである。

「わしは靴の片方すら履いちゃいなかった。ストッキングなんて、そんなものがあることすら知らなかった。日中はドブの中、夜は豚小屋で過ごす。そうやってわしは10才の誕生日を過ごしたんだ。ドブはわしにとって目新しいものじゃなかった、なぜってわしはドブで生まれたんだから。」(15)

上の引用の後で、バウンダビー氏は、母親に捨てられ、飲んだくれの祖母から逃げ出し、あちこちで邪魔者扱いされながらも誰にも頼らず現在の地位まで成り上がった歴史を語り、こう結ぶ。「……あなたは [コークタウンのジョサイア・バウンダビー] に煮えたぎる料理用あぶらを飲ませることはできるかもしれん、だがこの男にそいつの人生の事実を隠蔽させることなど絶対にできませんぞ。」(16) しかし、事実は真実と異なる。彼が刻苦精励して工場経営者の地位を得たことは確かだが、彼は愛情深い母親や親切な親方の世話になっていたのである。研究者松村昌家は、バウンダビー氏が自分を卑しい生い立ちの記の主人公としている理由を次のように述べている。「……バウンダビーは、想像し得る限りの最底辺から這い上がった経歴を想定することによって、コークタウンの労働者たちの貧困からくる不満と、毎日の単調な労働生活からの解放の要求を退ける戦術に、それを役立たせているのである。」(松村, 184-5) 筆者はこの意見に賛成である。バウンダビー氏が意図的に驚きを他人の説得に用いているのは間違いない。

彼が驚きを重視する証拠は他にもある。彼の銀行が何者かの襲撃を受けた際、彼は必要以上に騒ぎ立てる。グラッドグラインド氏によってコークタウンに送り込まれたジェイムズ・ハートハウス氏 (Mr. James Harthouse) から奪われた金額を尋ねられた際に、バウンダビー氏はいらいらしながら「せいぜい150ポンド」(181) だが重要なのは「銀行が襲われたという事実」(181) だと答え、仮定法過去完了を用いて「だがいいですか。[盗まれた金額は] 2万ポンドになっていたかもしれないのですぞ。」(181) と続け、被害額は2万ポンドの2倍だったかもしれないとまで言う。このことは、彼が事実と異なるろうとも現実の出来事には驚きという脚色が必要だと考えていることを示している。

バウンダビー氏は、驚きを用いて他人の heart を揺さぶり、動かされた heart の影響力をもって mind における思考を左右しようとする。つまり、彼は、reasoning には heart の助力が不可欠であることを熟知しているのである。しかしながら、彼の驚きの用い方は、悪意あるマインド・コントロールに通じるものである。また、「驚くなかれ。」という教訓がコークタウン全体に響き渡る「基調 (the key-note)」(49) であり、バウンダビー氏がその教訓を支持する立場にあることを考慮すると、彼の行為は背徳的な印象を残してしまうことになる。

6

バウンダビー氏の驚きの活用の仕方は容認されるべきものではない。彼の立身出世物語を彩る偽りは、彼の母親ペグラー夫人 (Mrs. Pegler) が語る愛の真実によって暴かれ、「ヴィーナスよりも賞賛されるべき商業界の驚き (a commercial wonder more admirable than Venus)」(246) と称えられたバウンダビー氏は、「セルフ・メイド・マン (a self-made man)」(246) から「セルフ・メイドのいかさま師 (self-made Humbug)」(263) へと成り下がることになる。これはディケンズがバウンダビー氏に与えた罰である。

バウンダビー氏は使い方を間違えたわけだが、ディケンズは驚きが人の heart を動かすのに不可欠であると信じている。サーカス団を率いるスリアリー氏 (Mr. Sleary) は、演目を通じて観客に驚きを提供するがごとく、グラッドグラインド氏に驚くべき犬の話語る。シシーの父親の犬メリーレッグズ (Merrylegs) が、他の犬たちに道を尋ねながらスリアリー氏の居場所を探しだし、たどり着いたサーカスのリングで「自分が知っている子供を探しているかのように」(292) 団員の子供たちを一人一人見て回った後、スリアリー氏の前で最期の芸を見せて死んでしまう、という話である。犬はシシーの父親が亡くなったことと、その父親が最期の時まで娘を愛していたことを伝えるために、命を削って旅してきた。スリアリー氏はこの話を基にして、世の中には愛というものがあること、そしてその愛は、犬をスリアリー氏の所までたどり着かせたような、説明のできない力を発揮することを説く。話を聞いたグラッドグラインド氏の様子は次のように描かれる。「グラッドグラインド氏は窓の外を見つめ、何の返事もしなかった。」(293) 彼の沈黙は、彼がスリアリー氏の説論に納得したことを示している⁶⁾。犬の感動的な物語が、彼の heart を動かし、彼の mind の中で事実と合理性では説明できないものの存在を認めさせたのである。

7

実はグラッドグラインド氏は無意識のうちにシシーの heart を動かしたことがある。彼はシシーに彼女を引き取って教育しようという申し出をするが、その際、彼女に自分の家庭とも言うべきサーカス団との付き合いを絶つという厳しい条件を突きつける。そして彼は彼女の決心を聞く前に、次の忠告を与える。「自分自身の心のうちがよくわかっているか確かめなさい! (Be sure you know your own mind!)」(38) 彼女の決心の後押しとなるのは、彼女の父親が娘の教育を望んでいた節があるという、グラッドグラインド氏からの情報である。彼女は父親を愛するがゆえにグラッドグラインド氏の申し出を承諾するのである。この場面はグラッドグライ

ンド氏が他人の heart を動かして、mind における reasoning を導いた唯一の例である。

ディケンズは、上の場面の後、heart を重んじるシシーの言動を通して、グランドグラインド式のものとは別の reasoning があることを示していく。グランドグラインド氏はシシーを自宅に引き取り、彼女に事実主義に基づく教育を受けさせるのだが、彼女が事実と計算に基づく思考を身につけることはない。その現実を見て、グランドグラインド氏は、彼女の幼い頃の環境が「理性に基づいて思考する力 (reasoning powers)」(91) の発達にとって好ましくなかったのだと結論する。しかし、そんな彼女の言葉がルイーザを救うことになるのである。ルイーザが、バウンダビー氏との愛のない結婚生活とハートハウス氏の駆け落ちの誘いに苦しみ、感情を制御できなくなって自宅へ戻り、気を失って父親の足下に倒れた日の翌朝、シシーはルイーザの傍らへ行き、ルイーザの求める何かになりたいと訴え、そうなれるよう努力させてほしいと頼む。その後が続くのが次の引用である。

「父があなたを差し向けてそう頼むように言ったのね。」

「いいえ」とシシーは答えた。「旦那様は私に部屋に入ってもよいとおっしゃいましたが、今朝は部屋から私をお出しになりました——あるいは、いずれにしても——」彼女は躊躇して言葉を切った。

「いずれにしても、の続きは？」とルイーザは、探るような目でシシーを見て、言った。

「私は離れているのが一番良いと思ったのです、と申しますも、私がここにいることがあなたのお気に召すことなのかよくわからなかったのです。」

「私はいつもあなたのことをそんなに嫌っていたかしら？」

「そうでないことを祈ります。というのも、私はいつもあなたのことが大好きでしたし、あなたにそのことを知ってもらいたいと願っていましたから。でもあなたが家を出られる少し前から、あなたの私に対する態度は少し変わりました。そのことを不思議に思ったというではありません。あなたはとても多くのことをご存知で、私はほとんど何も知らないのですから。それに他のご友人の方々ともお付き合いをされていたのですから、あなたの態度が変わるのは、いろいろな点において当然のことです。そのことで、私が不平をいうことはありませんし、傷ついたこともありません。」

シシーが控えめに急いでそう言ったとき、彼女の顔の赤みが増した。ルイーザはそんな愛情のこもった偽りを理解した。そしてシシーの heart がルイーザを強く打った。(225)

この引用から、ルイーザの理性的で淡々とした質問に、シシーが愛情を込めて答えていることがわかる。この後、シシーが、自分がルイーザの力になれるかどうか試させてほしいと言う

と、ルーザはシシーの本気度を試すように Yes-No 式の質問をする。ルーザは、自分は本当は高慢で、頑固で、怒りっぽくて、正しい判断ができない人間だが、それでも自分を拒絶しないかと問う。また彼女は、自分は分別がなく、シシーが思うほど博学でなく、最も簡単な真理から学び始める必要があり、平和とか満足とかのあらゆる良いものに導いてくれる案内人を必要としている人間だが、それでも自分を拒絶しないかとも問う。どちらの質問にもシシーは、きっぱり No と返事をする。この一連のやり取りは、シシーが自らの愛情あるいは heart を用いて、ルーザの理性あるいは mind を解きほぐそうとしていることを示しているのだ。そして、それに成功したからこそ、シシーはルーザの「心の闇に差す一条の美しい光」(225) になれるのだし、二人の間に次のやり取りが交わされるのである。ここは原文のまま引用したい。

‘Forgive me, pity me, help me! Have compassion on my great need, and let me lay this head of mine upon a loving heart!’

‘O lay it here!’ cried Sissy. ‘Lay it here, my dear.’ (226)

この引用は、シシーの心すなわち loving heart が、悩めるルーザの理性すなわち head に寄り添ったことを示し、ルーザが人間らしい思考の仕方を取り戻すきっかけを与えられたことを表しているのである。

結論

最後に、ここまで述べたことから、ディケンズの reasoning animals についての考えをまとめてみたい。reasoning animals は時代の要請から生まれたもので、ビジネスを行うには適しているのかもしれないが、理性のみを重んじる彼らの思考法は人に幸福をもたらさないし、真に他者を説得できるものではない。「Head の知恵」を生み出すには「Heart の知恵」の助けが必要であり、mind と heart を分離することはできない。これらの真実を、reasoning animals は reasoning human beings に戻るために学ばなければならない。こうしたメッセージを、ディケンズは、同時代に生きるグラッドグランド氏のような考えを持つ人々に伝えたかったのである。

注

- 1) 本稿は2017年12月2日にホテル・キャッスルプラザ（名古屋市中村区）に於て開催された第54回片平会冬期研究会での口頭発表に加筆・修正をしたものである。
- 2) テキストは *The Oxford Illustrated Dickens* を使用した。引用箇所はページ数で記すが、*Hard Times* 以外の作品の場合は、以下のように作品の略号を付す。

PP = *The Pickwick Papers* (1836-7)

OT = *Oliver Twist* (1837)

DC = *David Copperfield* (1849-50)

- 3) 息子の駆け落ち結婚を知ったウィンクル氏の反応と行動については、第50章の後半部分 (PP, 708-12) と第56章の後半部分 (PP, 790-4) を参照。
- 4) デイヴィッドが以下のように内省する場面を指す。

My duty to Agnes, who loved me with a love which, if I disquieted, I wronged most selfishly and poorly, and could never restore; my matured assurance that I, who had worked out my own destiny, and won what I had impetuously set my heart on, had no right to murmur and must bear; comprised what I felt and what I had learned. (DC, 857)

- 5) エイザ・ブリッグズ著、村岡健次・河村貞枝訳『ヴィクトリア朝の人びと』（ミネルヴァ書房）からの引用である。原典では、以下の英文において double quotes で囲まれた部分に当たる。

Its purpose was “to present a true test and living picture of the point of development at which the whole of mankind has arrived ... and a new starting point, from which all nations will be able to direct their further exertions.” (Briggs, 15-6)

- 6) この点については、Gold が次のように詳しく説明している。下記の英文中に含まれる *Hard Times* からの引用箇所 (double quotes で囲まれた部分) は、すべてテキストの291ページからのものである。

Gradgrind’s final silence is testimony to his submission to forces and mysteries far beyond his pathetic definitions, for just before this he has persistently applied empty labels of “instinct” and “scent” to explain the dog’s behaviour, to all of which Sleary answered “I’m bleth if I know what to call it.” (Gold, 204)

引用文献

- Briggs, Asa. *Victorian People*. 1955. U of Chicago P. Chicago: 1972. (『ヴィクトリア朝の人びと』、村岡健次／河村貞枝訳、京都：ミネルヴァ書房、1988.)
- Dickens, Charles. *The Oxford Illustrated Dickens, David Copperfield*. 1948. New York: Oxford UP, 1987.
- . *The Oxford Illustrated Dickens, Hard Times*. 1955. New York: Oxford UP, 1987.
- . *The Oxford Illustrated Dickens, Oliver Twist*. 1949. New York: Oxford UP, 1987.
- . *The Oxford Illustrated Dickens, The Pickwick Papers*. 1948. New York: Oxford UP, 1987.
- Gold, Joseph. *Charles Dickens: Radical Moralists*. Toronto: The Copp Clark Publishing Company, 1972.
- 松村昌家、『ディケンズの小説とその時代』、東京：研究社、1989。

参考文献

- Leavis, F. R., and Leavis, Q. D. *Dickens the Novelist*. London: Chatto & Windus, 1970.
- Thurley, Geoffrey. *The Dickens Myth*. New York: St. Martin’s Press, 1976.

汪兆銘伝のための覚書き

柴 田 哲 雄

はじめに

汪兆銘は、日中戦争時に親日政権を樹立した政治家としてよく知られているが、今日、日中両国では対照的な評価が下されている。日本では今なお一部の人々の間で、中国の愛国者にして親日家として、根強い人気を誇っているのに対して、中国では「漢奸」、すなわち売国奴として唾棄されてきた。

汪兆銘は、戦争末期の1944年3月に名古屋帝国大学医学部附属病院に入院し、11月10日に享年61で死去した。汪兆銘は最期の日々をどのような思いで過ごしていたのだろうか。それについては、汪兆銘の専属看護医だった太田元次の「看護メモ」から垣間見ることができる。例えば、死去から9日前の11月1日付けの「看護メモ」を以下に引用することにしよう。

11月1日

月がわり、汪夫人の憂色は消えない。

高熱続き、汪先生は連日、危険な状態である。睡眠もとれないのだろう。

鎮痛剤も、ききめなし。

「先生、私は治らねばならぬのです。先生。」

齋藤先生に、汪先生の最後の願い。声かすれ、生气なし。汪夫人、齋藤先生の白衣にとりすがる。

「一度、中国へ。」

沈黙続く。

脈とりの斎藤先生、黒川先生。連日、危機が続いている。汪先生、私に、
「日本は敗れます。中国が心配です。」

秘書、程西遠、私の両手をきつく握る。汪兆銘が苦痛の息の中から亡くなった同志の名前を呼ばれる。私、沈黙。唇かむ。

革命に散った人たちが脳裏にちらつくのである（小野稔，1988，104-105頁）。

汪兆銘は「日本は敗れます」と見通していた以上、死後、少なくとも母国の中国では、自ら
が売国奴として歴史に汚名を残すことを明確に見通していただろう。エピローグで詳述する
が、汪兆銘が救国者として中国史上に名を刻む条件とは、日本の勝利と中国の敗北以外にな
かったからである。汪兆銘は「日本は敗れます」に続けて「中国が心配です」と口にしていた
が、具体的に中国のどのようなことを心配していたかは、上記の引用からだけでは不明であ
る。ただ汪兆銘が、汪を信頼して親日政権への参加に踏み切った人々の戦後の処遇について心
配していたことはまちがいないだろう。実際のところ、親日政権の要人、例えば、汪兆銘の古
くからの側近であり、政権内では汪に次ぐナンバー2の地位にあった陳公博、蒋介石の側近
だったにもかかわらず、汪を信頼してついてきたナンバー3の周仏海らは戦後、政治生命を
失っただけでなく、いわゆる漢奸裁判にかけられて、死刑などの重罪を科されている。

また「汪兆銘が苦痛の息の中から亡くなった同志の名前を呼ばれる」とあるが、「亡くなっ
た同志」とは辛亥「革命に散った人たち」を指している。汪兆銘が生死の間をさまよい、もう
ろうとした意識の状態でも、「亡くなった同志」の名を口走ったのは、若い頃と変わらず自ら
を革命家と見なしていたからだろう。妻の陳璧君には常々「亡くなった同志」が眠る広州の白
雲山麓の共同墓地に、自らの亡骸を埋葬してほしいと頼んでいたのである。

汪兆銘は果たしてどのような思いで、「亡くなった同志」の名を口走ったのだろうか。一般
に革命家は、革命のためには生命の犠牲さえ厭わない分、死後の名声に固執するものである。
すなわち死後には、革命烈士として遇されることを求めるのである。「亡くなった同志」は生
前の望み通りに、革命烈士として遇されてきた。汪兆銘は、徹底抗戦を唱える蒋介石と袂を分
ち、親日的な政治行動に踏み切った時点で、生前はもとより死後も、革命烈士とは対照的な
売国奴として遇されることを、内心半ば覚悟していたことだろう。

しかし汪兆銘は、「亡くなった同志」だけは自らを理解してくれると信じていたのではなか
らうか。最晩年の6年弱の親日的な政治行動が、重大な誤りだと評価されるのは仕方ないとし
よう。にもかかわらず、それ以前の革命への貢献、換言すれば、有史以来の専制政体を打倒し

て、曲がりなりにも民主化の実現を目指してきたという貢献は、誤りをはるかにしのいでいるという自負がある。「亡くなった同志」はまさにそうした貢献のために苦楽を共にしてきた仲間ではないか。

もっとも、汪兆銘には一抹の不安もあったにちがいない。死後の世界で、果たして「亡くなった同志」は生前と同様に自らを仲間として再び迎え入れてくれるのだろうか。「亡くなった同志」もまた自らを売国奴と見なして、席を同じくすることを恥じるのではなかろうか。汪兆銘が断末魔にあって、「亡くなった同志」に向かって、まさか君たちまで私のことを売国奴扱いするつもりではあるまい、などと言おうとして、その名を口走ったと推測するのは、果たして穿ち過ぎだろうか。

汪兆銘の最期の日々の思いはともかくとして、ある政治家について論じる際、その人物の最晩年の政治行動にのみ基づいて、評価を下すというのは、確かに公平とは言い難いだろう。例えば、毛沢東の場合、共産党の公式見解では、最晩年のおよそ10年は、文化大革命という大混乱を引き起こしたことから、重大な誤りを犯したとされたが、それ以前は、中国革命に対して多大な貢献を行ってきたとされている。そして総体的には、貢献が誤りよりもはるかにしのいでいると評価されている。

汪兆銘についても、最晩年の親日的な政治行動にばかり注目するのではなく、それ以前の民主化に対する貢献にもスポットライトを当ててしかるべきではないだろうか。何と云っても、汪兆銘は20世紀前半の中華民国政府において指導的地位にありながら、蒋介石に対抗して、民主化を果敢に唱えてきた人物なのである。民主化は20世紀のみならず、21世紀の今日になっても、中国の最大の課題であり続けているが、そうしたことに鑑みても、民主化を軸にして、汪兆銘の半生を描き直すことには、それなりに意義があると言えるだろう。本稿は、汪兆銘が激動の20世紀前半の時代に革命を志して、民主化の旗振り役になりながらも、満州事変後に、救国のために民主化の旗を降ろすまでの軌跡を中心に描いていくことにする。

I. 生誕から辛亥革命前後まで：民主化への目覚め

生誕と両親

汪兆銘は1883年5月に広東省番禺県で生まれた。汪兆銘の生誕前後における中国内外の情勢について一瞥しておこう。当時、少数民族・女真族の王朝の清朝は、成立からすでに250年以上の歳月を経っていたが、西欧列強の侵略によって、属国や辺境の領土を次々に奪われ、帝国の解体過程に入っていた。汪兆銘の生誕の二年前にあたる81年には、ロシアとの間でイリ条約が締結され、清朝は中央アジアのザイサン湖東部をロシアに割譲することを余儀なくされ

た。続いて生誕の翌年の84年から85年にかけて、清仏戦争が勃発したが、清朝は敗北を喫して、属国のベトナムをフランスに奪われるに至った。一方、当時、清朝内部では、李鴻章や曾國藩ら漢族の官僚が中心となって、帝国の危機を打開するために、洋務運動を繰り広げていた。すなわち中体西用論（中国の伝統思想・学問・制度を本体とし、枝葉にあたる西欧の科学・技術を導入しようとする考え方）に基づいて、西欧の軍隊組織や機械工業の導入を図ろうとしていたのである。

さて、汪兆銘が生を享けたのは、清朝の衰退と軌を一にするように没落した読書人（学問を積み、科挙を受けて官僚・政治家・学者になった者）の家庭であった。元来、汪兆銘の父方の家系は、祖父の代まで浙江省山陰県に本籍があり、墳墓もあった。曾祖父や祖父は官途に就いていた。

一方、汪兆銘の父・省斉は官途に就くことなく、一族の一人が広東省で知県事をしていたことから、これに頼って同省に移住し、商売を営んでいた。汪兆銘によれば、父親は成人後に、浙江省から移住してきたことから、「広東語を聴き取ることはできても、話すことができなかった」（「自述」1頁）。父親は広東人のコミュニティに入ることができず、さぞかし異郷にあって、疎外感を抱いたにちがいない。父親は同郷の盧夫人との間で一男三女をもうけ、盧夫人が亡くなると、広東省出身の呉夫人を娶り、三男三女をもうけた。汪兆銘は最後の十番目の子であり、出生時にはすでに父親は60歳を過ぎていた。汪兆銘の生家は経済的に豊かではなかったことから、父親は70歳近くになるまで、お金を稼いで一家を養わなければならなかった。

父親は商売人であったものの、読書人の家系の出身者だけあって学識があり、幼い汪兆銘の教育にも自ら当たった。父親は70歳を過ぎた頃には、目や耳がやや不自由になったものの、汪兆銘が書塾から帰宅すると、必ず読書や書道などを課した。例えば、汪兆銘に「王陽明の『伝習録』などの書籍を二、三頁にわたって大きな声で朗読させて、それに耳を傾けていた」。「白く塗った木版に10センチ大の字を書き取らせていた」。「陶淵明や陸游の詩の二、三首を、後ろ手に組んでじっくりと黙読させ、暗唱できるようになるまで続けさせた」（同上1頁）。こうした父親の教育は死の直前まで休むことなく行なわれた。

汪兆銘は後年、卓越した文才と書によって名を馳せるようになるが、幼年期の父親の教育によって、その基礎が固められたのである。また杉森久人が指摘するように、汪兆銘が孫文に追随して、革命家としての人生を歩むようになったのは、特に幼少期における王陽明の『伝習録』の感化が大きかったとあってよいだろう（杉森久人、1998、9-10頁）。というのは、陽明学は知行合一、すなわち知識と行為の一体化を唱え、知は実践を伴ってはじめて真の知になると説いているが、ここから独特の革命思想が生まれているからである。後述するように、汪兆

銘が来日後に敬仰した西郷隆盛なども陽明学の影響を深く受けている。

一方、汪兆銘は母親については、父親以上に深い愛情を抱いていたようである。汪兆銘は十代前半で、母親を亡くし、その翌年に父親を亡くしているが、母親は当時まだ四十代前半の若さであった。汪兆銘は母親を慕うあまり、後年、少年時代の自らの姿と当時の母親のそれとを絵に描かせるまでになる。汪兆銘はその絵に付した一文で、以下のように述べている。

右図は、兆銘の子ども時代、母の言い付けに従っている情景である。時に兆銘は9歳、朝には必ず中庭で字を習い、母が横で見ているのが常となっていた。秋の朝は爽やかで、芙蓉の花が美しく咲き誇り、藤の蔭が壁をはっていたのは、今を隔てること三十年前の光景である。思い出すたびに、その光景が目には浮かぶようである。当時、父は70歳、母は40歳であった（『汪精衛先生伝』9頁）。

その絵は、汪兆銘にとって、少年時代の至福のひとつであった母親とのやり取りを写し取ったものであるが、当時、無邪気な少年に過ぎなかった汪とは裏腹に、母親は苦勞が絶えなかった。汪兆銘は続けて当時の母親について、以下のように述べている。

……母の生涯を見舞った困難を知る者がどれだけいようか。母は鶏鳴とともに起床し、上は老いた父に仕え、下は幼少の者たちを慈しんできた。家事を切り盛りし、米や塩といった細々としたことをも、しっかりと把握しており、夜半になっても床につかぬことはしょっちゅうであった。（中略）四季の佳節の折には（中略）母は（筆者注：纏足故に）そろそろと歩きながら、屋根を仰ぎ、そっとため息をついて、長持ちの中を探して着物を取り出すと、女中に渡して質入れさせ、そのお金で果物や餅を買わせていた。だが親しい友人が来ると、たちまち言葉に笑いを含んで、しっかりとうちとけ、憂いなどないように見せていた（中略）母が生んだ男児は三人で、苦勞は甚だ大きく、男児が成長すればするほど、母は命を削ることとなり、とうとう天寿を全うすることができなかった（同上9-10頁）。

汪兆銘の母親は、伝統的な家族制度の中で犠牲を強いられたばかりか、家計上の細々とした気遣いが絶えなかったことから、わりと早くに生涯を終えざるを得なかった。汪兆銘のこうした母親に対する思慕と同情の念は、やがて伝統的な家族制度、とりわけその婚姻制度を否定して、恋愛結婚を是とする価値観に結実することになる。汪兆銘は後年、父親代わりとなった長兄が定めた許嫁との婚約を解消して、革命の同志となった陳璧君と大恋愛の末に、結婚するに

至るのである。

日本留学

汪兆銘は父親の死後、遺産などろくになかったことから、若くして苦勞を重ねることになる。汪兆銘は父親の死後、長兄を頼って生活せざるを得なくなったが、自立を早々に迫られていたことから、十代後半になるや「子曰先生」、すなわち書塾の教師になるなどして、自活するようになった。しかもその頃、同腹の兄二人を相次いで亡くしたことから、二人の兄嫁と一人の姪の面倒までみざるを得なくなった。汪兆銘はこのように十代後半にして、一家の生計を担うという苦勞を重ねた故であろうか、幼少期の生活全般を顧みて、「貧しく、悲しく、痛ましいものであった」と回想している（「自述」1頁）。

汪兆銘にとって、経済的に厳しい青少年期を送ったことに伴う最も大きな代償とは、近代的な系統だった教育を受けられなかったことである。汪兆銘は「私の一生は、一般的な学識に欠けており（中略）これは慚愧の至りである」と述べている（同上2頁）。汪兆銘は近代的な系統だった教育の欠如を嘆いていたが、1904年、20歳を超えた時に、その欠如をいささかなりとも埋める大きなチャンスをつかんだ。官費留学生に選定されて、日本に派遣されることになったのである。

当時、清朝では朝野を問わず、日本留学ブームが起こっていた。日本留学ブームの背景について見ることにしよう。1894年から95年にかけての日清戦争で、清朝はよもやの敗北を喫した。日清戦争の敗北を契機に、列強諸国はこれまでのように清朝の属国や辺境の領土を狙うだけでなく、主要地域にも植民地化を企図して進出するようになり、中国分割の危機が叫ばれるようになった。

一方、清朝内部では、日本が富国強兵に成功した要因を、康有為や梁啓超らが分析して、洋務運動に代わって、変法自強策を唱えるようになった。変法自強策は光緒帝の目に留まって、98年に実施に移されることになる（戊戌の変法）。変法自強策とは、明治維新に倣った改革、すなわち立憲君主制の確立、並びに科挙の廃止、近代的な学校制度の設置などを指すものである。もっとも変法自強策は、100日ほどで西太后を中心とする保守派によって潰され、失敗に終わった（戊戌の政変）。そして光緒帝は幽閉され、康有為や梁啓超らは日本への亡命を余儀なくされた。

1899年から1900年にかけて、白蓮教系の秘密結社にして、義和拳という独自の武術を誇る義和団が山東省で決起し、「扶清滅洋（清朝を助けて西欧列強を滅ぼす）」というスローガンを掲げて、北京の列国公使館区域を包圍攻撃するに及んだ。その際、西太后が牛耳る清朝政府は義和団の行動を支持して、列強諸国に宣戦布告をした挙句、惨敗を喫した。01年に北京議定

書が成立して、列強諸国による植民地化が加速し、中国分割の危機がいつそう深化したものの、米国政府が門戸開放政策（中国の領土保全と門戸開放、商業上の機会均等を目指す政策）をとって、列強諸国を牽制したおかげで、辛うじて清朝は命脈を保つことができた。さすがに事態がここまで悪化すると、西太后ら保守派も危機感を覚えて、かつて自ら葬り去った変法自強策を事実上採用するに至り、実施に向けて動き出した。日本留学ブームはその一環としてにわかにかつて起こったのである。

汪兆銘が1904年9月に来日して、進学した先は法政大学の速成科であった。清朝政府が留学生の派遣先として、法政大学を選択したのは、抜本的な政治改革を推進する人材を数多必要としていたからにはほかならない。当時、法政大学はフランス法を中心とする法律の教育を専門的に行なっていた学校だったのである。速成科は中国人留学生のために特設されたものであり、授業は通訳を介して行なわれていた。そうしたこともあって、汪兆銘は「日本語ができなかったにもかかわらず、講義は完全に理解することができた」。また教科書についても「大半が文語体だったおかげで、1、2ヶ月勉強しさえすれば、おおよその意味を理解することができるようになり、学習に際して全く支障がなかった」（『汪精衛先生伝』16頁）。

汪兆銘が来日したのは、ちょうど日露戦争が勃発した年に当たっていた。汪兆銘は1905年の元日について、後年、故国を離れて初めて迎えた元日であったばかりでなく、「戦争の雰囲気」に包み込まれた元日でもあったことから、「印象が特別に深かった」と回想している。当時、日本全国が旅順の攻防戦の行方に注目しており、今日、明日にでも陥落するのではないかと期待に胸を膨らませていた。汪兆銘によれば、法政大学でも「たとえ授業中であっても、窓外から号外を売り歩いている鈴の音が聞こえると、教授は講義を中止し、号外を買いに行かせた」。汪兆銘は「日本国民の熱烈な愛国心は、若い私の胸中を非常に燃え立たせた」と述懐している（同上15-16頁）。さぞかし汪兆銘の中国への愛国心も刺激を受けて、大いに鼓舞されたことだろう。

速成科の修業年限は1年半であり、汪兆銘は1906年6月に300余名中2番の好成績で卒業した。本来ならば、汪兆銘は卒業と同時に帰国して、官途に就くべきであったが、さらなる知識欲に駆られていたことに加えて、後述するように、孫文に付き従って革命活動に従事するようになっていたことから、法政大学の専科に進学することとした。もっとも専科に進学する費用は、私費で賄わなければならなかったが、『法規大全』などの日本の書籍を翻訳することによって、官費の倍近くの所得を得ることができ、「友人をも助けることができるようになった」（「自述」2頁）。

汪兆銘は、当時の民法や国際私法の大家である梅謙次郎、富井政章、山田三良らの講義を熱心に聴講して、学業に励んでいたが、最も大きな影響を受けたのは、憲法学の講義だった。後

年になって、憲法学の学習が革命思想を育んだ経緯について、以下のように回想している。

私は中国国内で歴史の勉強をしていた際には、遼・金・元による中国への侵略に対して、憤慨で胸がいっぱいになったものである。清に対しても、当然のことながら同様の気持ちを抱いていたが、ただ「君臣の義」とやらの縛られていた。法政大学に留学するに至って、憲法学の学習を通して、国家の観念や主権在民の観念を得ると、かつてのいわゆる「君臣の義」とやらは一掃されてしまった。固有の民族思想がむくむくと沸き起こり、新たに得た民権思想と合わさったことで、革命への傾斜が決定的になった（同上2頁）。

また汪兆銘は大学の講義を聴講するだけでなく、明治維新の歴史に興味を抱き、特に西郷隆盛と勝海舟に惹かれて、この二人に関する書籍を読み漁っていた。汪兆銘は以下のように述べている。

……その頃、私に最も影響を与えていたのは、日本の偉人、西郷隆盛と勝海舟の両名であった。この両名がいなければ、江戸の無血開城は言うに及ばず、明治維新も成就しなかっただろうと考えていた。私は神田一帯の書店に行くたびに、この二人の偉人に関する書籍を必ずや探し集めるのであった。日曜日に上野公園に行くと、いつも心ゆくまで西郷の銅像を眺めたものである（『汪精衛先生伝』16頁）。

前述したように、汪兆銘は幼少期に父親から陽明学の薫陶を受けていたが、西郷が陽明学から深く影響を受けていたことも、西郷に惹かれる要因の一つになったことであろう。

中国同盟会への参加

汪兆銘が日本に留学していた前後、清朝の在野では、列強諸国による分割の危機の打開を目指して、二つの思想集団が生まれ、それぞれの日中国人留学生の間で支持を広げていた。一つは、康有為や梁啓超らを中心とする「保皇派」であり、清朝の存続を前提として、明治維新に倣った立憲君主制の確立を目指していた。もう一つは、孫文や黄興らを中心とする「革命派」であり、清朝を打倒して、米国のような共和制の確立を目指していた。

もともと、革命派は元来一枚岩ではなく、指導者の出身地ごとに党派が結成されており、大きく三つの党派があった。広東省出身の孫文によって1894年に結成された興中会、湖南省出身の黄興や宋教仁らによって1903年に結成された華興会、浙江省出身の蔡元培や章炳麟らによって1904年に結成された光復会である。このうち興中会と華興会は、それぞれ広東省と湖

南省で、相互の連携を欠いたまま、武装蜂起を繰り返していた。

1905年になると、日露戦争における日本の勝利と、「血の日曜日」事件を発端とする第1次ロシア革命の影響の下で、在日中国人留学生の間では、革命の気運が高まり、ひいては革命勢力の結集を求める声も大きくなった。折しも孫文が来日することとなり、これを機に、宮崎滔天の奔走もあって、興中会、華興会、光復会の大同団結が図られ、ついに同年8月に東京で中国同盟会が結成されることとなる。中国同盟会の結成を機に、在日中国人留学生の間では、革命派が保皇派を圧倒するようになった。

中国同盟会は、発足時の加盟者が300余名に上り、孫文と黄興がそれぞれ正・副会長に就任した。中国同盟会は発足に当たって、「驅除韃虜、恢復中華、創立民国、平均地権（清朝を建てた女真族を追い払い、中華を回復し、民国を創立し、土地の所有権を平等にする）」の四大綱領を掲げる。四大綱領は、孫文がかねてから唱えていた三民主義を具体化したものである。このうち「驅除韃虜、恢復中華」は民族主義を、「創立民国」は民権主義を、「平均地権」は民生主義を、それぞれ具体的に示したものにほかならない。

汪兆銘は前述したように、もとより憲法学の学習を通して、革命に傾斜していた。そうしたこともあって、孫文の来日歓迎と孫文・黄興の提携祝賀の大会が1905年8月に開催されると、同郷の胡漢民や朱執信とともに駆けつけた。汪兆銘は中国同盟会の結成大会にも参加し、孫文の演説を聴いて、かねてから孫に対して抱いていた信頼の念を確固たるものにしていく。汪兆銘の言を借りるのならば、「『この人だ！』という信念はついにわたくしの生涯を決したのである」。また孫文も、革命活動に携わったばかりの若年の汪兆銘に対して、厚い信頼を寄せ、中国同盟会評議部の議長に抜擢し、後には執行部の書記長を兼ねさせることにした。汪兆銘は「白面（筆者注：年が若く、経験が浅いこと）の青年を抜擢された孫先生の知己恩愛を一生忘れることはできない」と述べている（『汪精衛自叙伝』15、17頁）。

1905年11月には、中国同盟会の機関誌『民報』が発行されることになった。『民報』を舞台に、汪兆銘も文才を如何なく発揮することになる。汪兆銘はその際、兆銘という本名ではなく、精衛という字（成人男子が実名以外につけた名）で寄稿した。精衛とは、夏を司る炎帝の娘が東海で溺死して、鳥に生まれ変わった際の名である。精衛という鳥は、溺死を恨みとして、常に西山の木石をくわえて東海を埋めようとしたとされる。汪兆銘は革命を、西山の木石で東海を埋めるように成功を期し難い事業であることを自覚した上で、「革命の礎石としていや捨石となるのが、わたくしの理想であり雅号に精衛とつけた所以である」と述べている（同上21頁）。

さて、『民報』の発行部数が4、5万部に上り、ひそかに中国国内に持ち込まれて、大きな影響力を及ぼすようになると、同紙に健筆をふるっていた汪兆銘の名も広く知られるようになっていく。

た。当時、汪兆銘の長兄は両広総督・岑春煊の軍司令部で勤務していたが、汪の名は岑の耳にも入るようになった。「ある日、岑春煊が酒に酔って、長兄に私を差し出すように強く要求した。差し出さなければ、大変なことになるとのことだった」（「自述」2頁）。中国の歴代の王朝は、一人が罪を犯すと、その九族も同じく咎めるという法を定めてきただけに、長兄はさぞかし焦燥感に駆られたことだろう。

また前述したように、当時、長兄は父親代わりとして、汪兆銘の許嫁を決めていた。許嫁となったのは、長兄の同僚にして、友人でもある劉子蕃という人物の妹であった。汪兆銘は長兄の手紙から、こうした顛末を知るに及んで、「家庭の罪人」という名で、以下のような絶縁状をしたためている。

……事すでに発覚した以上、謹んで自ら宗族関係を断つことで、累が及ぶのを避けたく存じます。一族には子弟が多いので、どうしてこの私一人を惜しむ必要がありますでしょうか。たとえ国のために血を流そうとも、この志ばかりは死しても朽ちることはありません。ただ寡婦となった兄嫁と、父親を喪った姪に対してだけは、よく慰めてやって下さい。さもないと、死んでも死にきれないでしょう。これは罪人がいちいち言明する類のことではありませんが、劉氏の御令嬢と交わした婚約については、罪人が宗族関係を断ったからには、この婚約関係もしたがって断たれるべきでしょう。よって今日限りで婚約の解消を請う次第です（同上2頁）。

汪兆銘はこうして家族と絶縁状態になったが、辛亥革命が勃発すると、「家庭の罪人」という立場は一変して、故郷へ錦を飾る立場になった。辛亥革命の翌年の1912年に、汪兆銘は、革命の同志でもあり、大恋愛の末に結婚に至った陳璧君を伴って、故郷に戻り、家族との再会を果たした。

しかし汪兆銘は、元許嫁が婚約の解消に反対しており、自らの帰郷時にも未婚であることを聞きつけるに及んだ。汪兆銘は「まさに古人が言うように『私は伯仁を殺していなくても、伯仁は私のために死んだ（筆者注：他人の死に対してなにかしかの責任を負っている）』ということだと考え、胸が詰まる思いがした」。当時の社会環境の下では、婚約を解消された女性は縁起が悪いと見なされ、生涯未婚で終わり、家族からさえも厄介者扱いされてしまうことが、多々あったのである。それだけに、その後、元許嫁が無事に結婚したということを知ると、「ようやく心落ち着けるようになった」（同上2頁）。

前述したように、汪兆銘は、母親に対する思慕と同情の念から、伝統的な婚姻制度を否定するに至った。さらに元許嫁に対するこうした罪責感からも、そうした制度を一掃しようという

意志を新たにしたにちがいない。陳璧君との恋愛結婚の実践は、汪兆銘にとって、まさにそれ自体が革命の実践でもあったのだと言えよう。

民主主義論

『民報』で展開された汪兆銘の民主主義論の一端を紹介することにしよう。ここで注意すべき点は、汪兆銘は当時、梁啓超らの保皇派を相手に盛んに論戦を繰り広げて、革命を正当化していたが、そうした論戦の過程で、民主主義論をも唱えていたということである。

梁啓超は当時、立憲君主制を唱えていたが、その確立はあくまでも遠い将来のことだとして、当面のところはその準備段階としての「開明専制」、すなわち英邁な皇帝による独裁政治を唱えていた。梁啓超に言わせれば、革命派が目指す共和制など論外以外の何物でもなかった。というのは「数百年間も専制政体の下で育まれてきた人民は、自治の習慣に乏しく、共同体の公益を理解せずに、ただ個人主義に基づいて私事を営むことしか知らない」からである。梁啓超は、共和制が実現されれば、結果的にいたずらに混乱を招くばかりとなり、やがて「民主専制政体」が確立されるにちがいないと予測している。「民主専制政体」とは、人民が安定と引き換えに、「政治上の自由を一人の手に委ねる」ことによって成立する政治体制にほかならない（「開明専制論」11頁）。

なお、こうした梁啓超の予測は見事に的中したとあってよいだろう。共産党が国民党との内戦で勝利を取めた20世紀半ば以降、人民は曲がりなりにも安定を享受するようになったものの、安定と引き換えに「政治上の自由を一人の手に委ねる」ことを強いられてきた。その「一人」とはほかならぬ毛沢東であり、鄧小平である。鄧小平の死後には、人民は「一人」ならぬ政治局常務委員の「数人」に「政治上の自由」を委ねることになったが、昨今また習近平「一人」にそれを委ねつつある。

話を元に戻すことにしよう。汪兆銘は梁啓超の所論に対する反論として、どのような民主主義論を展開していたのだろうか。例えば、おおよそ以下のように述べている。

……自由・平等・博愛の三者は人類の普遍性に根差したものである。人種によってその併せ受ける量の多寡があるに過ぎない。梁啓超は独断的に、我が国民には有史以来全く自由・平等・博愛の思想がなかったと述べる。しかしそれは、春秋時代から戦国時代に至るまでに、我が国民の精神が消耗され尽くしたからにほかならない。本来、我が国民にも自由・平等・博愛の精神が備わっているのである。民権や立憲はこの精神に基づく制度である。それ故に我が国民も必ずやこうした制度を確立することができるだろう（「駁新民叢報最近之非革命論」29頁）。

こうした汪兆銘の民主主義論は、論理構成の点で、ルソーの人民主権説の影響を受けていたと言えるだろう。ルソーが人類の自然状態における自由・平等を立論の出発点としていたように、汪兆銘もまた人類の普遍性に根差す自由・平等・博愛を出発点としていたのである。

もっとも、当時の汪兆銘が梁啓超らを論破するために、ルソーの人民主権説のみならず、それとは全くパラダイムが異なる様々な学説をも縦横に引用していたことには注意を要する。例えば、梁啓超がボルンハックや穂積八束の国家客体説（君権絶対主義の立場に立つ理論）に依拠すれば、汪兆銘はそれと対立するイェリネックや美濃部達吉の国家法人説（君主を主権者ではなく、国家法人の代表機関とする理論）に基づいて、反論するといった具合である。要するに、当時、汪兆銘は日本語の文献を介して、民主主義を志向する西欧の様々な思潮から影響を受けていたといっていよう。

II. アナーキズムの影響

摂政王・載灃の暗殺の企て

『民報』は発刊から一年を迎える頃には、華僑社会だけでなく、中国国内にも大きな影響を及ぼすようになった。その結果、中国国内の中国同盟会の加盟者は1万人余りに達し、失敗に終わったものの、同会の結成後初となる武装蜂起を引き起こすまでになる。こうした事態を受けて、清朝政府は日本政府に対して、中国同盟会関係者の追放を強く要求するようになった。当時、日本政府は日露戦争の終結直後ただだけに、清朝との関係を悪化させることを望まず、要求を受け容れることにした。こうして『民報』は停刊処分を受け、中国同盟会関係者は新たな活動拠点として、華僑が多い東南アジアを選択することになる。汪兆銘も06年に香港を経て、東南アジアへと向かい、各地を転々とするようになった。

中国同盟会はその後、しばらく苦境に立たされる。孫文は、中国同盟会の成立から、1911年の辛亥革命の勃発に至るまでの数年間、海外から武器弾薬を購入しては、前出の武装蜂起を含めて、湖南省や広東省で計10度にわたって武装蜂起を試みていた。しかしいずれも鎮圧されて、失敗に終わっていたのである。

武装蜂起が失敗に終わっても、孫文自身は決して意気阻喪することなく、次の武装蜂起を計画・指導したり、華僑から軍資金を集めたりするために、東南アジアと欧米と中国との間を奔走していた。また汪兆銘も決して意気阻喪することなく、孫文の命に従って東南アジアに留まり、革命の宣伝に携わったり、華僑から軍資金を募ったりしていた。汪兆銘が生涯の伴侶となる陳璧君と知り合うのはちょうどその頃である。陳璧君は現在のマレーシアのペナンに在住する富裕な華僑の子女であった。

もつとも、度重なる武装蜂起の失敗は、中国同盟会を内外から揺るがすに至る。外部からは、梁啓超らの保皇派が、孫文や汪兆銘らを「遠距離革命家」呼ばわりしていた。すなわち、孫文や汪兆銘らの指導者は、下々の人々を騙して、武装蜂起に決起させ、いたずらに死に追いやりながらも、自分たちは豪華な大邸宅で優雅に暮らしていると言い立てたのである。一方、内部からは、光復会派の章炳麟らが、孫文を公然と非難するようになり、分裂の傾向と士気の低下が顕著になっていた。清朝政府は中国同盟会をめぐるこうした情勢の推移を見逃すことなく、1908年になると国会開設など立憲政体への移行を約束するようになり、革命派の切り崩しを図るようになる。

汪兆銘は、再び中国同盟会の団結を固め、士気を高めるためには、自ら率先垂範して、清朝政府の要人を暗殺するしかないと思いつめるようになった。そしてついに志を同じくする黄復生、喻紀雲、陳璧君らとともに暗殺計画にとりかかる。一方、孫文や黄興らは汪兆銘の暗殺計画を知るや、即座に反対し、思いとどまるように何度も諭した。特に胡漢民は無二の友人であっただけに、「暗殺が革命の前途を阻む」とまで述べて、何とか翻意させようとしている（『汪精衛先生伝』51頁）。以下に汪兆銘が胡漢民に宛てた手紙の一節を引用することにしよう。

……このこと（筆者注：要人の暗殺）が我が党の活力を損なうと述べられておりますが、その論拠は薄弱です。（中略）暗殺について言うと、三名ほどの熱血な同志の生命を犠牲にするだけであります。どうして活力を損なうことになるのでしょうか。もしこの数名の生命をさえ惜しむのならば、革命団体をわざわざ組織するには及ばないでしょう。例えば、ご飯を炊くには、薪を燃やさなければなりません。薪が燃え尽きると、ご飯は炊き上がるわけですが、もし薪を惜しむのならば、どのようにしてご飯は炊き上がるのでしょうか。（中略）兄には小生を愛する故に、無理を通して真心からではないことを述べられないようお願い申し上げます（同上53-54頁）。

ご飯の炊き上がった状態が革命の成就だとすると、薪を燃やすことは要人の暗殺にほかならない。上記の手紙の一節からも明らかなように、汪兆銘の暗殺への決意はたいへん固いものであった。

もつとも、孫文や胡漢民にいわせれば、薪を燃やすことの中には、要人の暗殺だけではなく、武装蜂起をも含めてしかるべきであった。なぜ汪兆銘は様々な反対の声に耳を閉ざしてまで、暗殺にこだわったのだろうか。その点に関して、李志毓は、汪兆銘が当時、アナーキズムの影響を受けていたからだと指摘している。アナーキズムとは、国家権力など全ての政治的権力を否定し、個人の自由を絶対化する思想である。当時、ロシアのアナーキスト・グループは

バクーニンの思想を奉じて、テロリズムによる直接行動主義を重視する傾向を有していたが、それは汪兆銘をも含む中国の革命派の青年にも大きな影響を及ぼしていたのである（李志毓，2014，10頁）。

汪兆銘は1910年2月、同志とともに北京に潜入して、要人の暗殺の機会をうかがうようになった。暗殺のターゲットとして複数の皇族をリストアップしていたが、紆余曲折を経て、最終的に皇帝・溥儀の父親であり、摂政王でもあった載灃に絞り込んだ。汪兆銘らは、北京の街の一角に写真屋の看板を掲げて、爆弾の製造に努めるかたわら、載灃の参内ルートを調べ上げて、爆弾を埋設する場所を検討した。そして爆弾の開発に成功すると、載灃が通行する銀錠橋の下に爆弾を埋設することにし、橋の付近にあった家屋を間借りして活動拠点とした。汪兆銘らは深夜に爆弾を埋めたり、発火のための電線を通したりしようとしていたが、作業がなかなか進まず、三日目の深夜に入ったところで、ついに近所の男性から作業の様子を目撃されるに至った。こうして暗殺計画は、軍警当局の探知するところとなり、未遂に終わる。

獄窓

汪兆銘らはなんとか現場から逃げおおせることができた。すぐに逮捕される心配がなかったことから、汪兆銘と黄復生の両者は北京に留まって事態を見守ることにした。一方、陳璧君や喻紀雲らは北京を離れて、次の暗殺計画の準備にとりかかることにした。しかし爆弾の部品から足が付き、1910年3月になるとついに写真屋に兵卒らが踏み込んできて、汪兆銘と黄復生の両者は逮捕されてしまう。

汪兆銘は遠からず死刑が科される境遇に陥った。しかし汪兆銘はもとより刑死を覚悟していたことから、黄復生をかばおうとしこそすれ、減刑の嘆願など一切行なわなかった。供述書においても、当時清朝が実現を図ろうとしていた「立憲君主制について言うと、それによって救国の目的を達成するなど不可能である」と述べるなどして、平素の信念を毅然と表明している（『汪精衛先生伝』62-63頁）。

汪兆銘は載灃の暗殺に失敗したが、それでも所期の目的の一つである中国同盟会の士気を高めることには成功したと言える。例えば、パリで発行されていた中国同盟会の機関誌『新世紀週刊』には、以下のような汪兆銘の刑死を悼む一文が掲載されている。

知らせがやって来て、小生もまた耳にしたが、はからずもそれは汪先生に関することであつた。（中略）小生は汪先生の後につき従つて死に就くわけではなく、ただ主張するばかりで、恥を覚える次第である。ああ、かの人は容貌が柔和であり、莊重にして純粹であつたが、ついに凶刃に倒れてしまった。顔を覆つて号泣するばかりで、言葉にすること

などできようか！（同上68頁）

当時、清朝の民政部尚書であった肅親王が、事件の処理の責任を担っていたが、死刑を主張する載澧を説き伏せて、汪兆銘らを終身監禁の処分とすることにした。汪兆銘らを刑死させれば、再び士気が高揚した革命家たちを冒険的行動に駆り立てることになり、ひいては立憲君主制の確立によって革命派の切り崩しを図るという目論見が潰えることになると考えたからである。

また、肅親王は清朝政府の中では開明派に属しており、汪兆銘の供述書に心を動かされたことも寛大な処分を決断する動機になったと言えるだろう。肅親王は、優れた人物と見込んだ汪兆銘らを、なんとか自らの力で清朝の支持者に「転向」させようと考えたのである。そのために肅親王は自ら頻繁に獄中の汪兆銘らのもとを訪れるようになる。汪兆銘は後年、肅親王とのやりとりを以下のように回想している。

私の生命を救ったのは肅親王である。肅親王は私に革命への決意を捨てさせるために様々な方法を用いた。ある時には、私を死刑執行場まで連れて行き、革命への決意を翻すように迫った。肅親王はしょっちゅう牢獄に足を運んでは、私と天下の大事や詩歌について議論を交わした。（中略）私はこの頃のことを思い返すたびに、肅親王という清朝末期の偉大な政治家について思いを致すのである（同上74頁）。

このように汪兆銘もまた敵ながら、肅親王を尊敬してやまなかったのである。もっとも肅親王の訪問を頻繁に受けたからといって、汪兆銘らの獄中生活が過酷なものであることには変わりがなかった。汪兆銘は特に貧相な食生活に悩まされたようであり、以下のように回想している。

……当時の北京の監獄は、囚人の待遇を改善して日がまだ浅く、かつてに比べればかなり人道的になっていたものの、私の足には依然として足枷がはめられていた。毎日二食が供されたが、古米で腐っていて、脂肪質などがとうに抜け落ち、黄みがかった玄米が一椀、大根の塩漬けが一皿、スープが一杯であり、五日に一度豆腐が食べられた。これでもかつてよりはるかにましになっていたのである。しかし当時の私は血気盛んな青年であったことから、終始腹をすかせてひもじい思いをしていた。肉が食べられるのは一年に三回だけであり、端午と中秋と元日であったが、特に元日には一人につき一斤の肉が配給された。獄中で迎えた正月の際には、一切を忘れて、肉をむさぼり食べた（同上74頁）。

汪兆銘の終身禁固の刑が定まると、早速救出に向けた動きが始まる。汪兆銘が死刑を免れたとはいえ、過酷な獄中生活を生涯にわたって送らねばならないことから、絶望感に駆られて自殺する危険性があったからである。特に陳璧君が熱心に動いており、親族から多額の金銭を工面した上、北京まで赴いた。そして逮捕の危険を冒してまでして、獄吏を通して手紙を汪兆銘のもとに届けている。汪兆銘は手紙を受け取ると、詩を賦して陳璧君に送ることとしたが、その際の情景について以下のように記している。

私が北京の獄中であって、厳冬の風雪のために夜になっても寝付けなかった時のことである。獄吏が私を軽くたたいて、一片の紙切れを見せてくれた。その紙切れはしわくちゃに折りたたんであり、文字を判別することができなかったが、灯火に近付けて念入りに見ると、なんと陳璧君の筆跡であった。獄吏は私の耳元に口を寄せて、この紙片は転々と人手を渡って届けられたものであると言い、返事を書くように促した。私は返事を書こうとしたものの、露見を恐れて、にわかには何と書いてよいものやら分からなかった。(中略) 陳璧君の手紙には(筆者注：逮捕と刑死を覚悟して)「死を忍ぶことしばしの間」云々と書いてあったが、彼女が北京に留まれば、禍を招きかねないことを慮って、詩の中で立ち去るように厳しく促した。陳璧君の直筆の手紙を手元に留めておくことはできなかったが、捨てるには忍び難かったので、飲み下すことにした(同上82頁)。

陳璧君からの手紙は、まさに汪兆銘にとって、絶望の闇に差し込む一条の光のように映ったことだろう。汪兆銘はそれから数か月後に突如釈放されるが、その後、ともに試練を乗り越えた陳璧君と婚礼を挙げて、生涯の伴侶とするに至る。

汪兆銘が釈放されたのは、辛亥革命の勃発のためである。1911年4月に黄興の指導の下、広州で武装蜂起が行われた。清朝政府軍の反撃によって失敗に終わったものの、これが事実上、革命の狼煙を上げることとなる。同年5月に財政難に陥った清朝政府が、民営であった鉄道を国有化して、これを担保に四国借款団(ドイツ・徳華銀行、フランス・インドシナ銀行、イギリス・香港上海銀行、アメリカ・モルガン商会などにより構成)から多額の融資を受けようとしたことに対して、湖南、湖北、広東、四川の各省で広範な反対運動が起こり、特に四川省では大規模な武装闘争に発展した。同年10月に入ると、四川省の武装闘争の鎮圧のために、湖北省駐在の清朝政府軍に動員命令が下った。しかし、当地の軍の内部で密かにオルグ工作を進めていた革命派が、ついに武昌で蜂起に踏み切ったところ、革命の波はたちまち南方を中心に全国の諸省に波及する。清朝政府は、遅きに失した感があったものの、革命派を手懐けて事態を収拾するために、獄中にあった革命家を全て釈放することにした。こうして汪兆銘らは同

年の秋に、ほぼ一年半ぶりに娑婆に出られることになったのである¹⁾。

孫文と袁世凱の提携

武昌での武装蜂起は、3か月足らずの間に、南京を首都とする中華民国の成立にまで行き着いた。1912年1月1日のことである。一方、孫文は武昌での武装蜂起の一報を米国滞在中に知った。しかしすぐさま帰国せず渡英して、交渉の末に四国借款団から清朝政府への融資の中止の決定を引き出し、清朝政府が革命派に反撃する際に必要となる財源を断ち切ることに成功した。孫文はこうした成果を手土産に、1911年末に帰国して、臨時大總統に選出される。

なお、孫文の臨時大總統就任宣言書は、汪兆銘の代筆によるものである。汪兆銘によれば、孫文は宣言書を一字一句たりとも改めようとしなかったが、それは汪兆銘にとって「全く意外な喜びであった」。また汪兆銘によれば、宣言書における「文明国の尽くすべき義務を尽くして、文明国の享受すべき権利を享受する」という一節は、法政大学の「山田三良先生が国際私法の講義の時『諸君はしきりと治外法権撤廃、領事裁判の廃止を叫ぶが、列国にこれを要求する前にまず、国際社会の一員としての義務を尽くさなくてはいけない』といわれた言葉を拝借し」たとのことである（『汪兆銘自叙伝』54頁）。

さて、中華民国が成立し、革命派は全国18省中14省を掌握していたものの、戦力不足から清朝政府を打倒するまでには至らなかった。一方、清朝政府の方も、革命派に反撃するに当たって、忠誠心が定かではない袁世凱に再出馬を請う事態にまで追い詰められていた。袁世凱は、日清戦争の敗北後、軍の近代的改革の推進を通して、北洋軍閥の巨頭となった。なおこの時の袁世凱の配下の部将が、中華民国時代に軍閥となる。その後、袁世凱は直隸総督兼北洋大臣となり、権勢を極めたが、女真族の高官から嫉視されて、失脚を余儀なくされていた。しかし辛亥革命の勃発によって、革命派との内戦が差し迫ると、再出馬を請われ、1911年11月に内閣総理大臣となり、軍事と政治の実権を握った。

中華民国政府と清朝政府の南北対立は膠着状態に陥っていたが、ここで事態打開のための奇策が浮上する。袁世凱が、まだ幼子であった宣統帝を退位させることと引き換えに、孫文に代わって大總統に就任するというものである。汪兆銘はこの奇策の実現のために奔走した一人である。汪兆銘は出獄後、袁世凱の腹心・楊度と国事共済会を組織し、孫文の代理として、袁世凱側と秘密裏に協議を重ねていたのである。こうした汪兆銘の暗躍もあって、孫文と袁世凱との間で密約は合意に達した。袁世凱の圧力の下で、宣統帝が1912年2月に退位の詔書を宣布すると、その直後に密約に従って、孫文が臨時大總統辞職を表明し、続いて3月に袁世凱が臨時大總統に就任した。

辛亥革命の挫折

革命派は、袁世凱に大總統のポストを譲渡しても、元来清朝の要人であった袁を信用せず、その独裁化を警戒していた。そこで首都の決定に当たって、袁世凱の影響力が強い北京ではなく、革命派の影響力が強い南京を選択していた。しかし袁世凱は、配下の兵士到北京や天津で暴動を起こさせ、治安回復まで北京を離れるわけにはいかないという口実の下に、南京行きを拒否するに至った。革命派は妥協を余儀なくされ、1912年4月に北京への首都の再移転を受諾する。

革命派は、首都の決定については妥協を余儀なくされたものの、袁世凱の独裁化を防止する切り札として、憲法草案ともいべき「中華民国臨時約法」を制定する。「中華民国臨時約法」は主権在民を謳い、議院内閣制を採り入れて、國務総理に大きな権限を付与するものであったが、こうした条項を通して、大總統の権力に法的な制約を加えようとしたのである。「中華民国臨時約法」に基づいて国会が開設されると、革命派は、宋教仁のイニシャチブの下で、秘密結社だった中国同盟会を、他の諸党派をも巻き込みながら、議会政党・国民党に改組して、政党政治の実現を目指すことになる。

なお、汪兆銘は当時、国民党に批判的であった。その理由について汪兆銘は後年、以下のよう述べている。

辛亥革命が起こり、総理（筆者注：孫文を指す）が南京で臨時大總統に就任すると、当時、幾人かの同志（筆者注：宋教仁らを指す）が総理に対して、「目下、民族主義と民権主義が実現しましたが、民生主義は、国外では列強の憎悪を招き、国内では社会の猜疑心を引き起こしています。やはり（筆者注：民生主義の実施を）延期すると言明した方がよいのではないのでしょうか」と述べた。総理がこれを聞いて憤然として「私がもし民生主義を主張しなかったのならば、革命には及ばなかつただろう」と言った。しかるにこれらの同志は、最後まで総理の忠言を聴き入れなかつた。民国元年（筆者注：1912年）、北京では（筆者注：宋教仁らが）公然と無数のもぐりの政客を巻き込み、強引に中国同盟会を国民党に改組してしまった（「我們怎樣実行三民主義」第3巻124頁）。

宋教仁の指導下にある国民党は、汪兆銘からは不評だったものの、袁世凱にはかなりの脅威に映っていた。国民党は1913年2月に実施された第1回国會議員選挙で、半数に近い議席を獲得して第一党となり、宋教仁が國務総理に選出される見通しになったからである。そこで袁世凱はついに刺客を放って、宋教仁を同年3月に上海駅頭で暗殺するという挙に出た。そして脅迫と賄賂を交えて、国民党議員の切り崩し工作を行ない、さらには国民党の軍事的地盤を弱

体化する措置をとった。こうした事態を受けて、孫文は同年7月に第二革命を起こす決意を固める。しかし南方各地で蜂起した軍勢がいずれも敗北を喫して、孫文は日本への亡命を余儀なくされている。

袁世凱は第二革命を粉碎すると、国民党を解散させ、さらには国会を機能停止に追い込み、「中華民国臨時約法」に代わって、新たに「中華民国約法」を制定して、大總統の権限を大幅に強化した。袁世凱の最終的な野望は、自ら皇帝になって、新たな王朝を開くことにあったことから、1915年になると君主制の復活を画策するようになった。しかし同年5月に袁世凱は、ドイツの山東権益の日本への譲渡を含む対華21ヵ条要求の大半を受諾したことから、ナショナリズムに燃え立つ世論の批判を浴びるようになる。そして同年末には、君主制の復活に反対して、雲南省をはじめ各地で武装蜂起が相次ぎ、第三革命が起こる。列強諸国の反対もあって、ついに袁世凱は16年3月に君主制の復活の取消しを宣言せざるを得なくなり、その直後に憂悶の中に急逝した。

袁世凱の死後、「中華民国臨時約法」と国会が回復されたものの、依然として有名無実の存在に過ぎなかった。全国各地に大小の軍閥が割拠するようになったからである。袁世凱が率いていた北洋軍閥は、袁の死後、段祺瑞らを中心とする安徽派と、馮国璋らを中心とする直隸派に分裂し、前者は日本の支援を、後者は英米諸国の支援を、それぞれ受けていた。その他の有力な軍閥には、日本の支援を受けていた張作霖の奉天派があった。北京政府の実権は、安徽派と直隸派の対立に奉天派が絡んで起こるその時々の内戦の勝者の手に落ちたが、政権はいずれも短命に終わっている。なお、政局混迷の間隙について、1917年には清朝復活のクーデター未遂事件が起こった。

一方、孫文は第二革命が失敗に終わると、日本に亡命し、1914年7月に革命のための秘密結社「中華革命党」を結成している。第三革命が起こると、帰国し、袁世凱の死後には、北京から逃れてきた一部の国会議員や、西南地方を地盤とする中小の軍閥とともに、1917年9月に広東省で政府を設立した。孫文は北京の軍閥政権に対抗して、「護法（「中華民国臨時約法」の擁護）」を旗印に掲げて、翌年にかけて護法戦争に踏み切る。しかし孫文の政治基盤は、日和見的な軍閥に支えられていたことから、常に不安定であった。孫文は提携した軍閥の裏切りに幾度もあっては、その都度政府の大幅な改組を余儀なくされていたのである。

「修養の時代」

汪兆銘にとって、辛亥革命の挫折によって政治情勢が混沌とする「民国元年（筆者注：1912年）から民国10年（筆者注：1921年）までの間は修養の時代だった」（『汪精衛先生伝』119頁）。辛亥革命直後から、汪兆銘は政治の表舞台に立つことを極力避けるようになり、フラン

ス留学の熱意に突き動かされていた。前述したように、汪兆銘はかねてから近代的な系統だった教育の欠如を嘆いていたが、日本留学だけではとうてい飽き足らなかったのである。そこで、孫文と袁世凱の提携を見届けたのを機に、12年8月にフランス留学に旅立つことにした。汪兆銘はパリ郊外のモンタルジに居を構えると、家庭教師からフランス語を習いながら、社会科学や文学に関する書籍を読んだり訳したりするほか、後述するように「教育救国」活動に携わるようになる。

一方、孫文は、有能な部下である汪兆銘を手元に留め置きたかった一心から、渡仏に強く反対していた。そこで、汪兆銘は孫文宛の手紙に「仮に（筆者注：フランス留学について）師友の同意が得られなくても、数年前に暗殺を執行した時のように、ただ行方をくらまして渡航するだけでしょう」とまで書き連ねるようになる（『汪精衛生平紀事』24頁）。孫文とて、ここまで固い決意を示されては、渡仏に同意せざるを得なかっただろう。

もっとも汪兆銘は当時、たとえ渡仏をとりやめたとしても、孫文の政治活動からは距離を置いていたにちがいない。アナーキズムの影響もあってか、政治的な役職に就くことを極力避けていたからである。前述したように、汪兆銘はアナーキズムの影響の下に、摂政王・載灃の暗殺未遂事件を引き起こした。汪兆銘は1912年2月に、アナキストの李石曾が主宰する「進徳会」に入会するが、その重要な会則は「官職に就かない」というものだった。汪兆銘は当時、革命派から広東都督に推されていただけでなく、袁世凱からも総統府高等顧問の誘いを受けていた。しかし「進徳会」の「官職に就かない」という会則を守るためか、いずれも固辞している。

汪兆銘はフランスで勉学三昧の生活に終始していたわけではなく、アナーキズムの影響の下で、蔡元培、呉稚暉、李石曾らとともに「教育救国」の活動にも携わっていた。アナーキズムが目指す権力機構や法律に依拠しない相互扶助の社会は、自立と友愛の精神に満ちた人々の自発的な結合に基礎を置いているが、アナキストは元来そうした人々をはぐくむ教育の重要性をも訴えていたのである。汪兆銘らは「教育救国」活動の一環として、各種の雑誌を発行したほか、在仏中国人学生のために互助会や「中仏リヨン大学」などを設立した。

汪兆銘は、フランス留学がそもそも「教育救国」の活動のためだったとして、以下のように述べている。

……私の志についてですが、革命後の最大の希望として、言論や出版の自由によって、真理を広め、国民の思想を変えたいのです。こうしたことを追求しないのなら、革命に従事してきた意義などなくなってしまうでしょう。それ故に、はばかりことなく全てを投げ捨てて、こうしたことに尽力しようとしているのです。その際、勉学しながら、それによつ

て得たところのものを国民に紹介するのが良いでしょう。この度のフランス行きもそのためにほかなりません（「答某君書」2頁）。

汪兆銘が「国民の思想を変えたい」と意気込んだのは、中華民国成立後の様々な困難を克服するためであった。特に問題視していたのは、国民が三民主義に関して偏った理解をしていることであった。汪兆銘は以下のように呉稚暉宛ての私信で述べている。

……十年余り、私たちは三民主義を主張してきましたが、議論と運動がもとより排満（筆者注：満州族、すなわち女真族を排斥すること）に偏っていたことから、国民が受容した思想もとりわけ排満が多くなりました。（中略）国民の思想がその程度に過ぎないのなら、国民の行動もその程度に過ぎなくなってしまうでしょう（李志毓，2014，34頁）。

民族主義の骨子である「排満」そのものは、明朝の滅亡と清朝の成立の頃から唱えられてきた思想だったことから、革命派の人々からはもとより、一般国民からも比較的受容されやすかったのだろう。一方、民権主義や民生主義は新たに唱えられた思想だったためか、革命派の人々からさえあまり言及されず、一般国民に至ってはほとんど受容されることがなかった。こうした国民の思想状況を反映して、民族主義に基づく清朝の打倒は成功したものの、民権主義や民生主義は有名無実化して、袁世凱の独裁や軍閥の割拠を許す状態に陥ってしまった。そこで汪兆銘は民権主義や民生主義を実現する上で必要な西欧の思想を広めて、「国民の思想を変えたい」と熱望するに至ったのだろう。なお、前述したように、汪兆銘が宋教仁の指導下にあった国民党に対して批判的だったのも、同党が民生主義を放棄していたからにほかならなかった。

李志毓が指摘するように、汪兆銘の「教育救国」の考え方は、新文化運動のそれに類似しているといっただろう（同上45頁）。中国の知識人は、辛亥革命にかけた希望が裏切られるのを見届けると、新たに救国の活路を求めするために、新文化運動を起こした。すなわち「デモクラシーとサイエンス」というスローガンの下で、近代西欧を模範とする知的啓蒙運動を起こして、汪兆銘と同様に「国民の思想を変えたい」と意気込んだのである。なお、新文化運動はその過程で五四運動を導き出し、中国共産党を生み出す思想的基盤を準備している。

汪兆銘は、フランスでの「教育救国」の活動に、常に心安んじて専心していたわけでは決してなく、中国の政治情勢の変化に心を揺さぶられては、居ても立ってもいられなくなる時があった。とりわけ中国で重大な事件が勃発すると、帰国して孫文の下に馳せ参じている。1913年には宋教仁の暗殺後から第二革命の失敗まで、15年には対華21カ条要求の受諾後から年末

まで、それぞれ数か月間中国に滞在していた。

汪兆銘は、1917年以降は基本的に中国に留まり、広東省での政府の設立や改組、並びに護法戦争などに関与していた。しかし「官職に就かない」というモットーを守ってか、広東政府から秘書長への就任の要請があっても固辞している。また広東政府がパリ講和会議に代表を送ると決定した際、汪兆銘は代表への就任を要請されたが、固辞して、民間人の身分で同会議に参加した。

汪兆銘はようやく1921年になって政治的役職、すなわち広東省教育会の会長に就任することを承諾した。それでも就任に当たって、会長職には「官吏の性質が全くなく、政治的な悪習が全くない」ことをわざわざ強調して（李志毓，2014，54頁）、モットーに反しているわけではないと弁明していた。しかしこれを機に、長い「修養時代」は終わりを告げ、汪兆銘はいよいよ孫文の側近として、政治の表舞台に再び舞い戻ることになる。

III. 反共と反蒋介石：訓政時期の民主化論

国共合作

汪兆銘が再び政治の表舞台に舞い戻ったのは、奇しくも中国内外の政治情勢に一大変化が生じ、それに伴って孫文の政治路線も大転換を遂げる時期に当たっていた。

孫文は、1919年5月に発生した五四運動を目の当たりにすることにより、これまでの愚民的な民衆観を改めるに至る。五四運動とは、新文化運動を背景に、ロシア革命に触発された学生や労働者が、パリ講和会議でドイツの山東権益の日本への譲渡が決定されたことに憤激して、全国で展開した反日運動のことである。北京政府は五四運動の圧力を受けて、同年6月にベルサイユ条約調印を拒否すると声明せざるを得なくなった。孫文はこうした民衆パワーを目の当たりにして、同年10月に秘密結社の中華革命党を、広範な国民的基盤を擁する政党、すなわち中国国民党に改組することを決意する。

一方、その頃、軍閥間の戦争は以前にもまして熾烈になっていた。米国の主導によって1921年から22年にかけて、東アジアに新たな地域秩序、すなわちワシントン体制が成立したためである。確かにワシントン体制の下で、懸案だったドイツの山東権益が中国に返還されたばかりでなく、さらには中国の領土保全が日本を含む列強諸国から保障されることになった。しかし中国にとって、ワシントン体制は諸刃の剣であった。直接的な武力干渉を封じられた列強諸国は、各地の軍閥を通して、自国の権益の拡大しようとした挙句、軍閥間の戦争を煽るに至ったからである。軍閥間の戦争の激化に伴って、軍閥を怨嗟する民衆の声が中国全土で沸き立つようになった。

孫文はそうした民衆の声に応えるかのように、「護法」を掲げて、北京政府を支配する直隸派に対して軍事行動を開始した。しかし1922年6月に直隸派と内通していた配下の広東軍閥の陳炯明から反乱を起こされるに至り、広東政府は瓦解する。孫文は九死に一生を得て、上海に脱出した。

これを機に、孫文は日和見的な軍閥に依拠しながら、「護法」の実現を目指すという方針を放棄することにした。そして新たにソ連・コミンテルンや中国共産党と提携しながら（「連ソ・容共」）、「国民革命（軍閥の打倒による中国統一、並びに軍閥の背後に控える帝国主義の打倒による主権回復を目指すナショナリズム運動）」の実現を目指すという方針を採用する。

ここで、「連ソ容共」について一瞥しておこう。1917年11月にロシア革命が勃発して、ソ連が成立した。ソ連は19年と20年にカラハン外務人民委員代理の名で、帝政ロシアが中国から奪った利権を無償で返還することなどを宣言し、中国国民から熱狂的な歓迎を受けた。その後、ソ連は世界共産主義革命のための国際組織として、コミンテルンを設立する。コミンテルンは新文化運動や五・四運動の指導的立場にあった陳独秀や李大釗らに対して、中国共産党を結成するように働きかけた。こうして1921年7月に中国共産党が正式に設立されることとなり、初代のトップには陳独秀が就任している。なお、20世紀後半に中国を独裁支配することになる毛沢東は、創設メンバーの一人として、中国共産党第1回全国代表大会に湖南省の代表として出席していた。

一方、コミンテルンは当時、各国で共産党の設立を推進するかたわら、帝国主義に抵抗する植民地の民族解放勢力と提携する方針も立てていた。コミンテルンはそうした方針に基づき、国民党を中国の民族解放勢力であると評価して、孫文に接触を試みていたが、ついに孫から提携に応じるとの返事を引き出すことに成功する。こうして国民党の「連ソ容共」の方針が定まったのである。

1924年1月に広州で開催された国民党第1回全国代表大会（一全大会）で、国共合作は正式にスタートした（第一次国共合作）。国共合作の形式は、共産党員が個人の資格で国民党に入党するというものであり、李大釗や毛沢東らの共産党員は国民党の要職に就任することになった。

また孫文は、ソ連の顧問の助言の下で、ソ連共産党に倣った国民党の改組にも踏み切る。換言すれば、ソ連共産党のように、国民党が「民主主義的集権制度」に基づいて、政府や軍を指導するというシステムの確立を目指したのである。ただし孫文個人のために設けられた総理の地位は、中華革命党以来の慣習を引き継いで、党から半ば超越した特別のものとされていた。改組に際して、特に課題になったのが、これまで依存しては裏切られてきた軍閥の軍隊に代わる国民党自身の軍隊の創設である。この課題に応えるために、1924年に黄埔軍官学校が設立

され、蒋介石が校長に就任した。黄埔軍官学校は、国民党が擁する軍隊である国民革命軍の幹部を輩出することになる。

国民党一全大会では、「連ソ・容共・工農扶助（労働者・農民階級に対する支援）」の三大政策とともに、従来の三民主義に新たな解釈を加えた「新三民主義」が打ち出された。民族主義は、帝国主義の圧迫からの独立、並びに国内諸民族の平等を主張している。民権主義は、五権（行政・立法・司法・考試（官吏採用権）・監察（弾劾権））分立に加えて、「直接民権（選挙権、罷免権、創制権（立法院から独立して法律を制定・廃止する権限）、複決権（立法院で否決された法律を復活させる権限）」を主張している。民生主義は、「耕す者に田を」のスローガンの下で、封建的土地所有制をなくす地権平均、並びに民間資本の独占防止と国家資本の育成をはかる資本節制を主張している。

ここで注意すべき点は、民権主義について、孫文があくまでも軍政・訓政・憲政の各段階を踏んで実現すべきだと強調していたことである。軍政時期は、国民党が北京の軍閥政府を打倒して全国を再統一するまでの間、軍事独裁を断行する（軍事独裁体制）。その後の訓政時期は、中国の民衆が政治的に未熟であることを踏まえて、国民党が民衆の政治的諸権利を代行する、すなわち国民党による一党独裁を実行する一方、民衆を訓導して政治的に成熟させ、徐々に民主化を実施する（民主集権体制）。憲政時期では、民衆はすでに政治的に成熟していることから、憲法に基づき、普通選挙を実施して、選出された国民代表が国民大会を通して、中央政府やその法律に対して「直接民権」を行使する（民主主義体制）。孫文は、辛亥革命直後にいきなり議会制民主主義に基づく政党政治を実現しようとして挫折したことに対する反省から、こうした構想を提唱するに至ったのである。汪兆銘も「新三民主義」の民権主義を受容していた。その結果、後述するように、汪兆銘の民主主義観も、軍政・訓政・憲政の枠組みを前提にしたものによって変わっていくこととなる。

さて、汪兆銘は、孫文が国共合作に乗り出した当初、ソ連や中国共産党に信頼を寄せることができず、国共合作に消極的な姿勢をとっていた。孫文もまた蒋介石に宛てた私信の中で「精衛は元来ロシア派の革命には賛同していない」と述べている（李志毓，2014，61頁）。汪兆銘が元来アナキズムから大きな影響を受けていたことを考慮すれば、共産主義に疑念を抱いたとしても不思議はないだろう。アナキストと共産主義者は、19世紀後半にプルードンとマルクスの対立以来、犬猿の関係だったからである。しかし汪兆銘はその後、国共合作に積極的な姿勢に転じ、国民党一全大会では、党中央の最高指導メンバーの一人に選出された。孫文の死後には、汪兆銘は国共合作を支持する国民党内の左派のリーダーになっている。

孫文の後継者

1924年9月、北京政府を支配していた直隸派に対して、安徽派、奉天派、孫文の広東政府が共同戦線を結成して、戦端を開いたところ、直隸派は内部対立もあって、総崩れとなり、安徽派の段祺瑞が臨時執政となった。直隸派の買収行為によって国民の信頼を失った国会に代わって、真に民意を代表する「国民会議」を招集すべきだとする世論に応えるために、孫文は同年11月に「北上宣言」を発し、病軀を押して日本経由で北京に向かった。

なお、孫文は寄港先の神戸で、かの有名な「大アジア主義」と題する講演を行なっている。日本国民に対して、欧米の帝国主義に付き従って中国などのアジア諸国を侵略する「西洋覇道の番犬」になるのか、それとも欧米の帝国主義によって侵略されている中国などのアジア諸国の解放に力を貸す「東洋王道の牙城」になるのかと問うたのである。

孫文は北京入りした時、その病状はすでに回復の見込みがないほど悪化しており、ついに1925年3月に享年59で死去した。汪兆銘は臨終に際して、孫文の最も信頼の篤い側近として、以下のようなかの有名な遺囑を代筆している。

私は力を国民革命に尽くすことおよそ四十年になります。その目的は中国の自由・平等を求めることにあります。四十年の経験を積んで、次のことを深く知るに至りました。この目的を達成しようとするのならば、必ず民衆の目を覚まさせ、世界において我々を平等に扱ってくれる民族と提携して、ともに奮闘すべきだということを。今日、革命はまだ成功していません。およそ我が同志たる者は（中略）引き続き努力して、貫徹することを求めなければなりません。

孫文の死後の1925年7月に国民政府が正式に組織されると、汪兆銘は政府主席に選出されている。汪兆銘が大元帥代理だった胡漢民らを抑えて、政府主席に選出されたのは、生前、孫文が最も信頼を寄せる愛弟子だったことに加えて、当時政権内で隠然たる影響力を有していたソ連の顧問の支持もあったからである。こうして汪兆銘は名実ともに孫文の後継者になる。この頃が、汪兆銘の政治家としてのキャリアの絶頂期だといってよいだろう。もっとも汪兆銘は、孫文とは違って絶対的な権威を有しているわけではないので、あくまでも集団指導体制におけるトップに過ぎなかった。こうした点について、汪兆銘は同年11月に以下のように述べている。

……孫先生が亡くなられていないのなら、私たちはこの唯一の指導者に一意従っていけばよい。孫先生がすでに亡くなられた以上、私たちは委員制を採用して、各々ができること

を尽くし、総理によって与えられた責任を共同で担って、国民革命の未完の任務を受け継ぐべきである。これこそが国民政府が成立した所以である（「国民政府特別党部成立日演説詞」第3巻73頁）。

一方、国民政府が成立する前後から、共産党の指導下にある労働運動は列強諸国を震撼させるほどの影響力を発揮するようになる。五・三十事件と、それを受けた省港ストライキの発生である。1925年5月30日に上海で、日本人経営の紡績工場のストライキ弾圧に抗議して、労働者や学生がデモを起こしたところ、デモ隊に英国人警官が発砲して、多数の死傷者を出した。これを機に反帝国主義運動が全国諸都市に波及した。国民政府のお膝元の広州と、その付近の英領香港においても、上海での五・三十事件に抗議して、同年6月から翌年10月まで、労働者が反帝国主義を掲げたストライキを実施した。国民政府も香港を経済封鎖するなどして、ストライキを支援していた。

国民党内の右派は、孫文の死後、共産党の勢力の急拡大に脅威を抱き、国共合作に対する批判のトーンを高めるようになる。1925年8月にはついに汪兆銘と並ぶ左派のリーダーである廖仲愷が暗殺される事態になった。汪兆銘はその際、右派のさらなる策動を牽制するために、以下のような演説を行なっている。

……中国が今日最も必要としているのは国民革命である。それ故に、私たち同志は現在、共産か反共産かという問題を決して起こすべきではない。ただ帝国主義か反帝国主義かという問題が存在するばかりである。私たちは決して共産の二字を口実にして、左派分子を排斥するようなことをしてはならない。ここに中国国民党の生死の分かれ目が存在しているのである（『汪精衛生平紀事』72頁）。

汪兆銘はこのように廖仲愷の暗殺にも動揺を見せることなく、国共合作を断固として擁護する姿勢を示していた。そして暗殺に関与した嫌疑があるとして、旧友であり、かつ外交部長でもあった胡漢民を事実上モスクワへ追放するという決定を下している。なお汪兆銘は当時、国共合作に反対するその他の旧友、例えばフランスで「教育救国」の活動をともにしていた蔡元培や呉稚暉らとも関係を悪化させていた。

一方、右派の策動はやむことなく、1925年11月になると、謝持や鄒魯らが北京で分派活動を公然化させ、西山会議派を結成し、国民党からソ連の顧問や中国共産党を追放すべきであると声高に要求するようになった。汪兆銘を中心とする左派には、右派からの攻撃に抗するだけの権力基盤がなかったことから、汪は政権を維持するために、労働者・農民運動団体を掌握す

る共産党の力にいつそう依存するようになった。また軍事力を掌握する蒋介石との協力関係をもさらに密にしている。前述したように、蒋介石は黄埔軍官学校校長などの地位にあり、国民革命軍を掌握していたことから、国民党内での発言力を強めていたのである。

中山艦事件

1926年1月に広州で国民党第2回全国大会（二全大会）が開催された。二全大会では右派が排除される一方で、汪兆銘を中心とする左派、共産党、軍に依拠した蒋介石グループが、党中央の要職を占めることになった。しかしソ連の顧問・中国共産党と蒋介石グループとの間で、内々に確執が生じていたことから、汪兆銘は両者の橋渡しに腐心するようになる。

ここで、蒋介石について一瞥しておこう。蒋介石は1887年10月に浙江省奉化県の商家で生を享けた。若い頃から軍事を通じての救国を志していたことから、日本に留学して、1909年に新潟県高田で日本陸軍の士官候補生になった。その間に東京で中国同盟会に加入し、11年10月に辛亥革命が勃発すると、帰国して革命に身を投じた。その後、孫文に従って、袁世凱打倒を目指す第二革命と第三革命に参加した。その間、孫文らとともに日本に亡命して中華革命党に加入した。陳炯明の反乱後、23年に孫文が広東政府を再建すると大本營参謀長となり、軍事視察のためにソ連へ派遣され、24年黄埔軍官学校創設と同時にその初代校長に就任している。26年の国民党第2回全国大会で、中央執行委員に選出され、党中央の要職をも兼ねるようになった。

さて、話を元に戻すと、汪兆銘の橋渡しの努力も空しく、国民党二全大会からわずか2か月後の1926年3月に、ソ連の顧問・中国共産党と蒋介石グループとの間の確執がついに表面化する。中山艦事件が発生したのである。中山艦事件とは、国民革命軍の軍艦中山号が命令外の行動をとったとして、軍総司令官の蒋介石が共産党員でもあった艦長以下を逮捕して尋問したというものである。同事件自体の真相はいまだに謎の部分が多いが、これを機に、蒋介石は広州市内に戒嚴令を敷いて、ソ連の顧問や中国共産党員への圧迫を始める。もっともソ連側が同事件の発生後まもなくして、蒋介石に譲歩する方針を打ち出したことから、事態は収束に向かった。蒋介石も北京の軍閥政府を打倒するためには、ソ連の援助が必要なことを熟知していたことから、ソ連や中国共産党との決定的な決裂までは望んでいなかったのである。

一方、汪兆銘は中山艦事件が発生すると、病気を理由に辞任して、2か月後の1926年5月にはフランスに渡航している。陳璧君が同年4月に蒋介石に送った私信によれば、汪兆銘が辞任したのは、病気を療養するためのみならず、蒋介石に同事件について反省を促すためでもあった（『汪精衛生年記』87頁）。汪兆銘が特に反省を促そうとしたのは、蒋介石が正式な手続きに基づいて、事前に上司の汪自身の了承を得なかったことである。汪兆銘は後年になっ

て以下のように述べている。

……三月二十日のこと（筆者注：中山艦事件を指す）は、事前に中央執行委員会や政治委員会には全く知らされていなかった。私は当時、政治委員会主席だったが、私は責任をどのようにとるべきだったのだろうか？ 三月二十日には広州に戒厳令が敷かれたが、軍事委員会には知らされていなかった。私は軍事委員会主席だったが、私は責任をどのようにとるべきだったのだろうか？ 三月二十日には第二師団の党代表以下が拘束された。私は国民革命軍の総党代表だったが、私は責任をどのようにとるべきだったのだろうか？ 私は当時、この件が間違っているか、正しいかということについては、不問にする考えであった。だが、この件のやり方は間違っていたと言わざるを得ない（「覆林伯生書」第4巻64頁）。

汪兆銘のこうした一文からも、蒋介石の越権行動によって、面目を潰された怒りが伝わってくるだろう。汪兆銘は常々正式な手続きにこだわってきたことから、「党紀先生」と揶揄されてきたと自嘲しつつも、「私はやはりかくあるべきだと考える」と強調している（同上、第4巻63頁）。

汪兆銘が自らの辞任によって反省を促そうとしたにもかかわらず、蒋介石は形ばかりの反省でお茶を濁して、ついに国民政府の政治・軍事の実権を掌握するに至る。中山艦事件を機に、蒋介石が国民政府の名実ともにナンバー1の座に君臨する一方、汪兆銘はその最大のライバル、もしくはナンバー2の地位に甘んじることになるのである。

国共合作の解消

汪兆銘が渡仏していた間に、中国の政治情勢はまた大きく動き始めていた。「北伐」、すなわち北方の各軍閥に対する軍事攻勢が始まったのである。ソ連の顧問や中国共産党は元来北伐に反対していたが、蒋介石は中山艦事件を機に押し切り、1926年7月1日に北伐宣言を発して、自ら国民革命軍総司令に就任した。北方の各軍閥の内訌は、武漢方面の直隸派の呉佩孚、揚子江下流域の直隸派の孫伝芳、北京の奉天派の張作霖などであった。そうした軍閥の総兵力は約70万であったのに対して、国民革命軍は約10万に過ぎなかった。しかし国民革命軍は、共産党指導下の労働者・農民運動の支援もあって、わずか数ヶ月で呉佩孚軍や孫伝芳軍を撃破し、揚子江流域に進出した。

なお、国民革命軍の中、黄埔軍官学校の卒業者を中核とする蒋介石の直系部隊は一部に過ぎず、大半は広東・雲南・湖南省などの地方軍閥の軍を吸収し改編したものであった。後に汪兆

銘ら左派が武漢に国民政府を樹立した際に、頼みの綱としたのは、元湖南軍閥の唐生智の軍である。

北伐の進展とともに増大する一方の蒋介石の権勢に対して、左派や共産党は憂慮の念を募らせていた。そこで左派や共産党は、蒋介石に唯一対抗し得るだけの権威を有していた汪兆銘に対して、帰国を再三にわたって促すようになる。また左派や共産党は、1927年1月に国民政府の武漢への遷都を実現すると、3月に国民党二期三中全会を開催して、蒋介石の権限の大幅な削減を図った。一方、蒋介石は武漢への遷都を批判して、総司令部のある南昌への遷都を主張していた。もっとも蒋介石もまた汪兆銘に対して帰国を促すなどしており、この時点ではまだ左派・共産党との決定的な決裂を望んでいるわけではなかった。

蒋介石が左派・共産党との決定的な決裂に踏み切った契機は、南京事件の勃発である。左派や共産党は武漢に遷都した直後の1927年1月に、租界（近代中国の開港場において外国が「永借」し行政権を掌握していた土地）を強制接収する挙に出た。租界こそ帝国主義による圧迫の象徴にほかならなかったからである。こうして左派や共産党は英国との対立を深めていった。そうした最中の同年3月に南京事件が勃発する。すなわち左派や共産党の影響力の下にあった国民革命軍の部隊が南京を占拠した際、一部の過激分子が諸外国の領事館や教会などを襲撃したのに対して、英米両国の軍艦が報復として砲撃を加えてきたのである。蒋介石は南京事件の事後処理を通して、日本を含む列強諸国との関係を改善する一方、いよいよ国共合作を清算する覚悟を決める。

蒋介石が覚悟を決めた頃、汪兆銘は1927年4月にソ連を経由して上海に到着した。汪兆銘は上海で蒋介石と会談したが、蔣の国共合作の解消という要求には応じようとしなかった。汪兆銘はその代わりに、国民党の中央全体会議を開催することにより、左派・共産党と蒋介石グループとの間の対立を調停すべきだと主張したのである。蒋介石は汪兆銘を当てにできないことを悟ると、一気に実力行使に出る。汪兆銘が上海から武漢に向かった直後に、突如反共クーデターを起こしたのである。これに対して、武漢の国民政府は即座に蒋介石を全ての職務から解任し、国民党からも除名したが、蒋介石は、南京で胡漢民を主席とする独自の国民政府を樹立して、対抗する姿勢を示していた。

一方、汪兆銘ら左派はそれから3ヶ月後の1927年7月に、国共合作の解消を決断するに至る。汪兆銘が武漢で目の当たりにしたのは、労働・農民運動が過激化していく姿であった。汪兆銘によれば「目下、民衆運動に従事している人々が、民衆は党や政府の力を信じてはならないと声高に呼びかけている」という有様だった（『党與民衆運動』第3巻140頁）。その結果、労働運動はストライキという手段を頻発させ、「帝国主義の工業を衰微させたのはもとよりであるが、同時に国内において必然的に労働者の失業問題をも発生させてしまった」（『我們要建

設怎様の国家」第3巻152頁)。農民運動は「耕す者に田を」のスローガンを実行するに際して、民生主義の「政治と法律によって解決する」という手法ではなく、「農民を立ち上がらせ、地主の田を強奪して解決する」という手法に依っていた(「党與民衆運動」第3巻141頁)。ちなみに当時、労働運動を指導していたのは劉少奇であり、農民運動を指導していたのは毛沢東であった。

こうした共産党指導下の労働・農民運動の過激化は、ついに1927年5月に、汪兆銘ら左派が蒋介石に対抗する上で頼みの綱とする唐生智軍の反乱を招く。唐生智は元来湖南省を地盤とする軍閥であり、その軍の将校には地主階級の出身者が多かったからである。続いて同年6月に、汪兆銘が共産党との決裂に踏み切る決定的な出来事が起こる。コミンテルンからの密電を知ってしまったのである。汪兆銘はコミンテルンからの密電の問題点について、以下のように述べている。

第一点目は、土地革命については、国民政府の命令など不要であり、下部組織の方で行なって、土地の没収を実行すべきであるとしている。こうしたことは実際に湖南での事変(筆者注：唐生智軍の反乱を指す)の原因となっており、農民運動が国民党の方針から逸脱した原因にもなっている。(中略)第三点目は、中国国民党中央執行委員会を改造して、執行委員会に農民や労働者の指導者を増やすべきであるとしているが、実際には共産党員を増やせということである。(中略)第四点目は、2万人の共産党員を武装させ、かつ5万人の農民・労働者分子を選抜して武装させるべきだとしているが、農民・労働者分子とは、実際には共産党の分子を指しているのである。第五点目は、国民党の指導者に革命法廷を組織させ、反共の軍官を裁かせるべきであるとしている。こうしたことは国民党の指導者が共産党に代わって首切り役人となって、自分で自分を殺させるようなものであろう(「武漢分共之経過」第3巻231頁)。

こうして汪兆銘ら左派は1927年7月に正式に国共合作の解消を決定するに至り、第一次国共合作は終わりを告げた。その後、共産党は、国民党の弾圧によって壊滅的な打撃を被りながらも、しぶとく生き残り、日中戦争の前後まで、およそ10年にわたって、国民党との内戦を継続していくことになる(第一次国共内戦)。

中国の再統一

汪兆銘ら左派による国共合作の解消を受けて、武漢の左派と南京の蒋介石グループは国民党の再統合に向けた交渉を開始した。その際、武漢の左派は再統合の条件として、蒋介石の「下

野」を要求した。蒋介石は1927年8月にその要求を受け容れると、日本に渡航し、田中義一首相をはじめとする多くの要人と会談したり、孫文夫人・宋慶齡の実妹である宋美齡との結婚話を進めたりした。蒋介石が去った同年9月に、南京に設置された国民党中央特別委員会の下で、同党は形式上再統合を果たした。しかしその内実はというと、錯綜とした各派の対立によって、同党は機能不全に陥ることになる。

汪兆銘ら左派は再統合の主導権を握るために、旧敵の西山会議派などの支配下にある国民党中央特別委員会の解散を要求していたが、受け容れられなかった。そこで汪兆銘は抗議の意を込めて、1927年9月に国民政府の役職を辞任し、その他の左派の要人とともに広州に赴いた。そうした折、同年11月に広州で、左派を支持する張發奎の軍が、国民党中央特別委員会を支持する軍を襲撃するという事件が起こる。国民党中央特別委員会はこの事件について、左派が共産党と内通して起こしたものであると喧伝した。

さらに1927年12月には広東コミュンが起る。共産党が、葉剣英（中華人民共和国元帥・党副主席）らの指導の下で、張發奎軍の一部を離反させるなどして、広州で武装蜂起し、広東ソビエト政府（主席は蘇兆徴）を樹立したのである。広東コミュンは、国民党中央特別委員会にとって、左派が共産党と内通していることを喧伝する絶好の材料となった。汪兆銘はこれに反論して、「数ヶ月以来、私は反国民党中央特別委員会の運動に参加してきたことから、同委員会側の敵視をつぶさに受けてきた」と述べて、共産党との内通云々がそうした敵視の産物であるとした。しかし同時に「私が身を引くことによって、紛糾を終わらせたい」として、引退を表明するに至り、フランスに旅立って行く（「個人引退之電報」108頁）。

蒋介石は、機能不全に陥った国民党からの復職要請を受けて、1928年1月に国民革命軍総司令に再度就任するなどして、軍・党・政の最高権力を掌握した。蒋介石は同年4月に北伐を再開するに当たって、国民革命軍を四つの集団軍に再編し、自ら第一集団軍を率いた。第二・第三・第四集団軍の司令官にはそれぞれ馮玉祥、閻錫山、李宗仁が就任した。

蒋介石が自らに忠誠を誓う黄埔軍官学校の将校団から成る軍を統率していたように、馮玉祥、閻錫山、李宗仁もまた自らに忠誠を誓う私兵から成る軍を統率していた。その他の国民党系の地方の軍事指導者も同様であった。ここで馮玉祥、閻錫山、李宗仁の経歴や地盤について一瞥しておこう。馮玉祥は、当初は安徽派、次いで直隸派に属したものの、呉佩孚に対してクーデターを起して直隸派を離脱し、その後、国民党に入党したという経歴の持ち主であって、河南省を地盤としていた。閻錫山は日本留学中に中国同盟会に参加し、中華民国成立後に山西都督となり、その後、40年近くにわたって山西省を実質的に支配して、「山西王」という異名をとっていた。李宗仁もまた広西軍閥を経て国民党に入党したという経歴の持ち主であって、広東省を地盤としていた。

北伐は、戦意の低下した張作霖軍などから反撃らしい反撃を受けることなく、首尾よく進捗した。ただし日本が居留民保護を名目に、1927年5月に続いて、28年4月に再度の山東出兵に踏み切り、国民革命軍の進軍を阻止しようと試みている。日本は5000人の兵力で出兵し、済南の一部市域を占領したところ、同年5月に国民革命軍との間で市街戦となり、これを機にさらに増派して、済南の全市域を占領するに至った（済南事件）。しかし国民革命軍は日本軍との全面衝突を回避する方針をとって、北方軍閥の政府の首都である北京を一路目指すことにした。

張作霖は1928年6月になると、北京を放棄する決意を固めた。こうして国民革命軍は同月中に北京を占拠し、国民政府は北伐と全国統一の完成を宣言した。一方、張作霖は元来の地盤である奉天に列車で向かう途上で、関東軍の河本大作大佐によって爆殺される。張作霖はもとより日本から支援を受けていたが、その後、英米諸国から支援を受ける直隸派と手を結ぶなどしたことから、河本大作らから深く憎悪されていたのである。張作霖の遺児である張学良は、父親を関東軍によって殺害されたことを恨みとして、同年12月に奉天派の軍を率いて、国民政府への帰順を表明するに至った（易幟）。こうして中国は、現在のチベット自治区や新疆ウイグル自治区などの少数民族の集住地域を除くと、ほぼ国民政府の下で統一されることになる。

訓政をめぐる蒋介石との激突

蒋介石は北伐の完成と張学良の帰順を受けて、孫文のプラン通りに、軍政の終了と訓政への移行を決定した。訓政時期は、前述したように、民主集権体制の確立を目指している。中国の民衆が政治的に未熟であることを踏まえて、国民党が民衆の政治的諸権利を代行する、すなわち国民党による一党独裁を実行する一方、民衆を訓導して政治的に成熟させ、漸進的に民主化を推進するということを目指しているのである。

このように訓政時期は、独裁と民主化という二つの矛盾した側面が並存していることから、両者間のバランスをめぐる、紛糾が起きやすい状況にあると言えるだろう。蒋介石は独裁と民主化の中、明らかに独裁、しかも蔣個人に権力を集中させた独裁に傾斜していた。一方、汪兆銘は独裁と民主化の中、明らかに民主化に比重を置いて、蒋介石の個人独裁に対抗していたのである。

1928年2月の国民党二期四中全会で、訓政の開始とともに、五院の設立が決定されたことを受けて、蒋介石は自ら国民政府主席に就任すると同時に、行政・立法・司法・考試・監察の各院長に、自らを支持する党の元老、すなわち譚延闓、胡漢民、王寵惠、戴季陶、蔡元培を据えることに成功した。さらに29年3月の国民党第三回全国代表大会では、大会代表の多くが選挙によるのではなく、党中央の指名によって選出される。当然のことながら、蒋介石の息の

かかった人物ばかりである。要するに、蒋介石は政府や党中央の役職を自らに近い人物で固めてしまったのである。

さらに、蒋介石は権力の源泉ともいべき軍事についても、早々に手を打っている。1929年1月に開催された軍事編遣委員会議において、軍の再編成と縮小、中央集権化、財政の統一を目指したのである。要するに、蒋介石から見れば、新軍閥に過ぎない馮玉祥、閻錫山、李宗仁をはじめとする地方の軍事指導者の指揮下にある軍をそれぞれ大幅に縮小する一方で、蔣の指揮下の軍のみ突出して拡大させることを目指したのである。

一方、こうした蒋介石の個人独裁への傾斜は、汪兆銘のみならず、国民党内の反蒋介石各派の猛反発を招く。反蒋介石各派とは文人政治家派閥と軍人派閥の寄り合い所帯である。文人政治家派閥の主だったものには、汪兆銘のフランス滞在中に、汪を指導者と仰ぐ陳公博らが国共合作の解消後に左派を刷新した改組派、並びに元来左派とは犬猿の仲であった西山会議派などがあつた。軍人派閥とは、馮玉祥、閻錫山、李宗仁をはじめとする地方の軍事指導者がそれぞれ率いている軍事集団である。反蒋介石各派の猛反発は、ついに1929年から30年にかけての四度にわたる反蔣戦争にまで発展する。蒋介石側がいずれも戦勝したとはいえ、反蒋介石各派を決定的に壊滅させるまでには至らなかった。

改組派は、第一戦では傍観の態度に終始していたが、第二戦では反蒋介石の立場を明確にし、汪兆銘待望論の喚起に努めた。汪兆銘はそうした待望論に答えて、1929年10月にフランスから香港に到着すると、その前月に勃発した第三戦に積極的に関与するようになる。汪兆銘は反蔣戦争と訓政のあり方とを結び付けて、以下のように述べていた。

……今日の倒蔣運動は、人民全体からすれば、独裁を倒して、革命民権を保障することを、党全体からすれば、個人独裁を打破して、民主集権制度を回復することを、それぞれ目標にしている。これこそが倒蔣運動の真の意義である（「關於党治之談話」24頁）。

汪兆銘のこうした厳しい批判に対して、蒋介石側は1929年12月に汪の国民党からの永久除名の決定によって報いた。

1930年2月に勃発した第四戦は壮絶な戦闘となり、双方の対立もこれまでになく激化している。同年5月から半年余り続いた華北での中原大戦では、双方合わせて100万の軍を動員して、30万の死傷者を出すに至ったのである。また反蒋介石各派は同年9月に北京で独自の国民政府を樹立して、二つの国民政府が正統性を争う事態になったのである。北京では、閻錫山が国民政府主席に就任し、汪兆銘も同年7月に香港から日本経由で北京に合流すると、馮玉祥、李宗仁らとともに政府委員に就任した。汪兆銘は、北京の国民政府の正統性を強化するた

めに、訓政時期の暫定憲法ともいうべき「中華民国約法（制定地が北京から太原に移ったことから、「太原約法」とも称される）」の制定に尽力する。汪兆銘は制定に当たって、蒋介石を批判して、以下のように述べていた。

今日の蒋介石政府は、個人独裁政治をつくりあげるために、大胆にも訓政の名を借りて、約法をとりやめてしまった。それでは孫先生に対する反逆者になるということは、誰の目から見ても明らかなことである（「論約法」85頁）。

汪兆銘によれば、ほかならぬ孫文自身が、民主化の推進と人民の諸権利の保障のために、訓政時期には約法を、憲政時期には憲法を、それぞれ制定すべきことを唱えていた。しかし蒋介石は訓政への移行を決定しても、個人独裁に制約を課す約法の制定を見送っていたことから、蔣を孫文に対する「反逆者」としたのである。

「太原約法」は1930年10月に公布されたものの、その頃には反蒋介石各派の敗色が濃厚になっていたことから、施行されることはなかったが、蒋介石にとっても汪兆銘の批判は無視し得ないものとなっていた。そこで蒋介石側も独自の約法の制定に取り組み、1931年5月に「中華民国訓政時期約法」を公布するに至る。もっとも同じ約法であっても、「太原約法」が汪兆銘の訓政のあり方に関する主張を反映して、「相対的に地方分権的・民主的性格を強調していた」のに対して、「中華民国訓政時期約法」は蒋介石のそれを反映して、「相対的に中央集権的性格を強調していた」（山田辰雄，1980，277頁）。

訓政時期の民主化論

ここで、汪兆銘が1929年から翌年にかけて発表した訓政時期の民主化論について詳しく見ていくことにしよう。

汪兆銘は民主化に当たって、「民主勢力」の育成を唱えていた。「民主勢力」になり得るのは「全国の生産に従事している分子」、すなわち階級や階層を問わず生産に従事する一方で、帝国主義や軍閥などによって圧迫を被っている人々である。一方、蒋介石は「軍閥・官僚・土豪・劣紳など」に、共産党は「都市や農村のごろつき集団」に、それぞれ依拠していることから、「全国の生産に従事している分子」の庇護者にはなり得ないとしている（「怎樣實現民主政治」10頁）。汪兆銘の目から、庇護者として最も相応しいのは、汪らの「改組派」であることは言うまでもないだろう。

また汪兆銘は民主化に当たって、国民党による一党独裁の過程を経る必要があるとするが、次のような消極的理由と積極的理由を挙げている。消極的理由は、党が「反革命勢力を掃討す

る」ことにある。積極的理由は、党が「民主勢力」を育成することにあるが、その際の方法は「県から省へ、さらには国へと人民に政治に携わらせていく」ことだとしている（「怎樣樹立民主勢力」5-6頁）。

汪兆銘は「民主勢力」の伸長に伴って、国民党自らが権力を自己抑制すべきだと力説した。具体的には、①党と商人・労働者・農民団体などの民衆団体との関係においては、そうした民衆団体の独立性が尊重されるべきだとしている。党が民衆団体を命令に従わせるに当たっては、「自発的に党の指導を受け容れさせることができるだけで、決して圧迫を加えてはならない」。②党と政府機関との関係においては、党は政府機関に対して、「党の主義と政策に基づいて指揮・監督する」だけにとどめるべきだとしている。党が「政府機関に代わって、直接外部から指図するようなことがあってはならない」。③人民の集会、出版、言論の自由について、明確な規定をつくるべきだとしている。人民は三民主義などの「党の主義や根本政策」に「違反してはならない」が、その実行に当たっては「人民による批判や監督を容認すべきである」（「党治之意義」34-36頁）。

一方、汪兆銘は、蒋介石がそれらとは対極的な党運営を行なってきたとして、次のように批判した。①については、党は民衆団体を単なる「一種の道具」と見なし、自己の利益に奉仕させるために操っている。②については、党と政府機関の権限の範囲がしばしば重なり合い、明確に線引きがなされていないため、党が常に政府機関の権限を奪うという「党治」ならぬ「党乱」に陥っている（同上34-35頁）。③については、党は、党外の人民の集会、出版、言論の自由をことごとく剥奪しており、「党外に民なし」という状況をもたらしている（「關於党治之談話」24頁）。

なお、国民党自らが権力を自己抑制すべきだとする汪兆銘の主張は、1980年代に共産党内の改革派が提起した政治改革プランを彷彿とさせるだろう。特に②の党と政府機関の分離や③の言論の自由の条件付き容認は、改革派のトップである胡耀邦自らが取り組んだ課題でもある。汪兆銘も胡耀邦とともに、ソ連モデルの一方独裁を前提にした上での漸進的な民主化という課題を追求した点で共通しているのである。一方、汪兆銘によって批判された蒋介石の国民党運営のあり方は、1980年代に改革派によって批判された鄧小平を含む保守派の共産党運営のあり方を、どこか彷彿とさせるものがあるだろう。

さて、汪兆銘は訓政時期には、国民党による一方独裁、並びに三民主義による指導を前提にした上での民主化を唱えていたが、これは裏を返せば、共産党や共産主義といった他の政党やイデオロギーの排斥を含意していたものと言えるだろう。もっとも汪兆銘は憲政時期になれば、以下のように事情が異なると明言している。

仮に憲政時期になって、国家の基礎が強固になり、社会秩序が安寧になれば、根本の大法は全人民の意志により決定・制定・公布・施行されることになるだろう。この時期には人民の政治的自由は相対的に広がっているにちがいない。例を挙げると、フランスやドイツのような欧州の民主主義国家では、極右の保皇党や極左の共産党でさえも、選挙によって選出されれば、国会に参加することができ、出版・言論・集会・結社についても（筆者注：他の政党と）同様に自由であり、デモ行進についても（筆者注：他の政党と）同様に自由である。ただ暴動を起こしたりして、公共生活に直接的な危害を加えるようなことさえなければ、政府当局によって干渉されることはない（「論思想統一」141-142頁）。

上記の文面より、汪兆銘は憲政のあり方について、西欧諸国の民主主義体制に近似した体制をとることを念頭に置いていたと言えるだろう。憲政時期には、西欧諸国の共産党と同様に、中国共産党も武装蜂起するなどして「公共生活に直接的な危害を加えるようなことさえなければ」、自由な政治活動を認めることを示唆していたのである。

IV. 救国と民主化論の終焉

蒋汪合作政権の成立

さて、蒋介石側が制定した「中華民国訓政時期約法」は、図らずも蒋と一部の元老との衝突を引き起こす。立法院長の胡漢民が約法の制定に頑強に反対したことから、蒋介石は1931年2月に胡を軟禁した上で、立法院長の職を解任したのである。汪兆銘は第四戦の敗北を受けて、30年11月より香港に拠点を移していたが、胡漢民の境遇を知ると、31年3月に以下のような声明を発表した。

……蒋介石が、宴を開いて客（筆者注：胡漢民を指す）を招きながら、銃を取り出してその客を捕まえたことを厳しく非難する。国民政府主席でありながら、強盗や人さらいのような行動に出るとは、『青霜劍（筆者注：悪役人が、美貌の妻をもつ男を無実の罪に陥れて死罪にさせた上で、その妻と再婚しようとしたが、その妻から仇討ちされるという内容の中国の伝統劇）』の悪役人と比べてみても、勝るとも劣らないほどである（『汪精衛生平紀事』148頁）。

このように汪兆銘の蒋介石に対する批判は、これまでのように個人独裁を志向する政治姿勢だけでなく、人格面にまで及ぶようになっていた。

胡漢民の軟禁を受けて、蒋介石側から胡漢民派、並びに胡を支持する孫科（孫文の長男）派が離脱して、胡漢民派の牙城である広州に結集し、さらには反蒋介石各派も合流した。汪兆銘も1931年5月に広州に駆けつけた。こうして広州で独自の国民政府が樹立されるに至り、汪兆銘は政府主席に推挙される。もっとも広州の国民政府を事実上、取り仕切っていたのは胡漢民派であり、汪兆銘は「蒋介石に対抗するためのいわば飾り物にすぎなかった」。汪兆銘の側近ともいべき陳公博らの参加が拒まれていたのである（土屋光芳，2004，140頁）。

広州の国民政府は、蒋介石の下野と胡漢民の解放を求めて、1931年9月には軍を北上させ、南京の国民政府との軍事衝突をも辞さない構えを見せていたが、その最中に満州事変勃発の一報が入った。満州事変を機に、蒋介石と汪兆銘は、世論の圧力もあって、国民政府が分裂している場合ではないという認識を共有するようになる。蒋介石は国民政府の再統一のために、胡漢民を解放しただけでなく、自らの下野をも決意した。さらに政府主席を象徴的ポストとして、行政院長を実質的にトップとするなどの民主的な制度改革にも同意した。

こうして1931年12月に南京で孫科を行政院長とする国民政府が新たに発足することになった。しかし、孫科は蒋介石派や汪兆銘派の協力を得られなかったことから、1ヶ月足らずで退陣してしまった。そこで蒋介石と汪兆銘という両巨頭がついに提携することになる。32年1月に汪兆銘が行政院長に就任し、3月に蒋介石が軍事委員会委員長に就任して、汪が政治・外交に、蔣が軍事に、それぞれ責任を負う蔣汪合作政権が成立した。

当時、蔣汪合作政権は、日本と共産党という二重の軍事的脅威に直面していた。満州事変を契機とする日本軍による東北地方への侵略は、拡大の一途をたどっていた。また共産党も、国民党の弾圧によって壊滅的な打撃を被った上に、都市での武装蜂起を試みては、失敗を繰り返していたにもかかわらず、しぶとく生き残っていた。内陸部の辺境地帯の農村にいくつかソビエト政権を打ち立てるまでになっていたのである。蒋介石と汪兆銘の間では、こうした二重の軍事的脅威に対処するに当たって、「安内攘外」、すなわち先に共産党を殲滅し、その後に日本軍を一掃するという根本方針で臨むという合意ができあがる。

また、こうした二重の軍事的脅威への対処を、政府の最優先課題としていたことから、軍事に責任を負う蒋介石が、政治・外交の方針策定に際しても、勢い大きな発言力を有するようになった。こうして蒋介石が軍のみならず、事実上政府をも掌握するようになって、実質的にナンバー1となり、汪兆銘はナンバー2に甘んじざるを得なくなる。しかし形式的には汪兆銘があくまでも政治・外交の責任者として振舞い、蒋介石は汪の陰に隠れていたのである。蔣汪合作政権は、汪兆銘狙撃事件が起こる1935年11月まで、紆余曲折がありながらも継続する。

民主化論の終焉

さて、汪兆銘は、実質的にはナンバー2とはいえ、行政院長に就任したことにより、長年唱えてきた民主化を実行に移すチャンスを手にしたと言えるだろう。もっとも当時は、日本と共産党という二重の軍事的脅威への対処、すなわち救国が最大の課題となっていた。汪兆銘は救国と民主化の関係をどのように考えていたのだろうか。

日本軍による東北地方の占領を前にして、救国を求める世論が高まったが、その際、胡適を中心とする知識人は、訓政から憲政への速やかな移行、すなわち憲法制定と議会政治の速やかな実現を要求していた。救国のためには、強固な国家統合を実現する必要があるが、そのためには国民の積極的な政治参加が欠かせないというわけである。当時、胡適らの主張は世論から強く支持されていた。

訓政から憲政への移行を求める世論に押されて、蔣汪合作政権は1932年12月に、国民代表を選挙によって選出した上で、憲法を制定するための国民大会を、35年中に開催するという決定を下す。この決定を受けて、立法院長の孫科が中心となって、憲法草案の作成にとりかかった。実際には、国民大会の開催は戦後まで延期されたが、36年5月に憲法草案（5月5日に発表されたことから、「五五憲草」と呼ばれる）が先行して発表されることになった。

もっとも「五五憲草」は、憲政の実現を求めている知識人や民衆には失望を与えている。「五五憲草」は「専制的性格」を帯びたものだったからである（金子肇，2011，289頁）。「五五憲草」は国民大会の権限を制約する一方で、三民主義と国民政府の優位性を保障していた。国民大会が招集されるのは、臨時大会を除けば、原則として3年に1回1か月間のみであることなどから、国民大会が「直接民権（選挙権、罷免権、創制権、複決権）」を行使する機会は自ずと制約されることになる。こうすることで、国民政府の自立性を確保し、さらには政府の頂点に強力な権限を有する総統を置くことが可能になるのである。いわば国民政府は、「新しい酒を古い革袋に入れる」ならぬ、「古い酒（独裁）を新しい革袋（憲政）に入れる」ようなことを行なったのである。知識人や民衆は「五五憲草」を批判し、その民主的な改正を求める運動を起こすようになった。

一方、汪兆銘は一見すると「五五憲草」の「専制的性格」に反発するかのようになり、反蔣戦争当時と同様に、民主化を擁護する姿勢を示していた。汪兆銘は1937年1月に行なった講演で、欧米諸国の民主主義が、ソ連のプロレタリアート独裁、並びにドイツとイタリアのファシズムから「挟撃される状況下で、没落しつつある」とする見解に対して、次のように反論する。「英仏両国は依然として民主政治ではないだろうか？ 米国は依然として民主政治ではないだろうか？」と。要するに、世界の主要国である英米仏諸国が依然として民主主義国家である以上、民主主義は健在だとするのである。その上で「中国が現在も、また将来も民主政治に向

かって歩いていくのは、疑いのないことである」と強調している（「論民主政治」下編21-22頁）。

もっとも汪兆銘は、非常事態の下では例外が認められるとして、欧米諸国の事例について言及しながら、以下のように述べている。

……ひとたび国家に非常事態が起こると、政府は、権力の集中化や行動の迅速化に向けて、十分に能力を発揮し、制約を受ける恐れを取り除くのである。欧州大戦に際して、こうした現象は顕著であった。欧州大戦のような国家の危急存亡に際してのみ、かくのごとくなのではない。例えばここ数年、米国では経済恐慌の救済のために、連邦議会がルーズベルト大統領に大きな権限を授けて、自由に行使できるようにした。米国は現在、世界の富強国であるが、小さな危機に遭遇しても、かくのごとくなのである。まして中国は現在、なおも訓政時期にあり、内憂外患が次々と迫っている状況にあれば、なおさらであろう。もし良好な政府が成立すれば、人民が信任を付与して、政府が救国と生存の計画の完成のために、一生懸命尽力できるようにするのは、至極当然であろう（同上、下編22-23頁）。

汪兆銘は要するに、中国においても非常事態の下では、救国のために、政府への権力の集中と民主化の後退はやむを得ないという見解を打ち出していたのである。

汪兆銘はこうした見解を打ち出したことと軌を一にするかのように、憲政のあり方に関して軌道修正を図るようになる。1937年5月に、憲法制定の使命を帯びた国民大会をテーマに講演を行なったが、その中で国民大会の基礎として、次の三点を挙げている。第一に、満州事変以後により差し迫ってきた「亡国滅種」の危機に対する「共同感覚」。第二に、国民党の党員、非党員を問わず、「一致団結なくして、救国と生存はあり得ない」とする「共同認識」。第三に、三民主義に対する「共同信仰」（「国民大会之三大基礎」下編91-93頁）。ここで注目すべき点は、第三の三民主義に対する「共同信仰」であるが、汪兆銘はさらに以下のように述べている。

……この危急存亡の時に当たっては、一つの主義によって全国の人民の行動を統一することは、救国の唯一の方法である。というのは、同じ空間・時間内に、二つの主義が存在することは不可能だからである。もしも別に理想の主義を実現しようとするれば、それに先立って、すでに存在している主義を打倒せざるを得なくなるだろう。（中略）そのことによって紛糾や衝突が引き起こされ、さらには力まで失ってしまうのは、民族全体の損失で

ある。こうした国家・民族全体の損失は、平時においても惜しむべきものであるが、危急存亡の時にあっては、どうしてさらに手痛いものにならないだろうか（同上、下編93-94頁）。

上記の講演は、1936年末の西安事件（対共産党軍事作戦督促のため西安に飛来した蒋介石を、内戦停止・抗日戦などを要求する張学良らが監禁した事件、共産党の調停により蔣は釈放される）を機に、国共両党間で融和ムードが醸し出されていた時期に行なわれたものである。しかし汪兆銘はそうした融和ムードに水を差すかのように、国民大会から、三民主義とは相容れない共産主義を信奉する共産党を排除すべきだとしているのである。もっともこれは民主化の後退とは一概に言えないかもしれない。前述したように、汪兆銘は反蔣戦争当時、憲政時期には、西欧諸国の民主主義体制に近似した体制の下で、共産党でさえ「公共生活に直接的な危害を加えるようなことさえなければ」という条件の下で、自由な政治活動が認められるとしていた。しかし依然として独自の軍事力を保持したままの共産党が、そうした条件を満たしていなかったのは明らかだろう。むしろ民主化の後退という点で問題になるのは、国共両党以外の第三党と呼ばれる様々な非武装の各党各派、並びに無党無派さえも、三民主義を信奉しない限り、国民大会から排除すべきだとしていることである。

こうした国民大会によって制定される憲法が、当然のことながら、三民主義の優位性と、それを党是とする国民党、ひいては国民政府の優位性を規定するものになるのは必至だろう。汪兆銘は事実上「専制的」と称される「五五憲草」に近い憲法観を抱いていたと見てよいだろう。汪兆銘のこうした憲法観、すなわち憲政のあり方は、反蔣戦争当時のそれとは明らかに断絶している。繰り返しになるが、反蔣戦争当時、憲政時期には、西欧諸国の民主主義体制に近似した体制の下で、共産党でさえ「公共生活に直接的な危害を加えるようなことさえなければ」、自由な政治活動が認められるとしていた。要するに、憲政時期には「国家の信条的中立性」という原則の下で、三民主義を党是とする国民党であれ、共産主義を党是とする共産党であれ、またその他のイデオロギーを信奉する第三党であれ、憲法と法律に従う限り、基本的には平等に扱われるとしていたのである。このように汪兆銘は救国のためには、憲政のあり方さえも大きく軌道修正してしまい、年来の民主化の主張を大きく後退させてしまったと言えるだろう²⁾。

「一面抵抗・一面交渉」

汪兆銘が救国のために、民主化の主張を大きく後退させるに至った背景について、もう少し詳しく見ていくことにしよう。当時、蔣汪合作政権は日本と共産党という二重の軍事的脅威へ

の対処を迫られていたが、汪兆銘は実質的な権限はともかくとして、対外的には行政院長として対日外交に最終的な責任を負う立場にあった。

満州事変が勃発すると、蒋介石は、東北地方を地盤とする張学良に対して、不抵抗方針を命じ、国際連盟に提訴して解決する意向を示した。しかし国際連盟は無力で、日本軍の侵略のさらなる拡大を阻止することができなかった。汪兆銘が行政院長に就任した1932年1月には第一次上海事変が勃発し、戦火が東北地方から、国際都市・上海にまで拡大した。日本軍は、世界の耳目を東北地方からそらせ、あわせて上海における排日運動の高揚を抑えることを狙って、上海に侵攻したのである。この時、非蒋介石派の将校に率いられた第19路軍が一ヶ月にわたって奮戦して、抗日を求める世論の喝采を浴びた。

汪兆銘は第19路軍の奮戦を契機に、蒋介石の同意の下で、「一面抵抗・一面交渉（抵抗しながら、交渉する）」という対日外交の原則を提起する。汪兆銘はその原則について以下のように説明していた。

……「一面抵抗・一面交渉」は同時並行させるべきであり、軍事において抵抗し、外交において交渉すべきものである。（筆者注：日本の要求が中国の）領土や主権の喪失という最低限度を超えていれば、我々は譲歩すべきでなく、最低限度を超えていなければ、我々は勇ましいことを叫ぶべきでない。これこそが我々がともに国難に赴く方法である（「一面抵抗一面交渉」上編15頁）。

汪兆銘の上記の説明を補足すると、「一面抵抗・一面交渉」とは「軍事的な『抵抗』によって戦線の拡大及び全面戦争になるのを防ぎ、その過程で『交渉』によって停戦協定に持っていく」ということである（土屋光芳，2004，251頁）。要するに「一面抵抗・一面交渉」は基本的に日中間の平和を保つことを主眼としており、「安内攘外」、すなわち先に共産党を殲滅して、その後に日本軍を一掃するという根本方針を実現するための方途であったと言えるだろう。

蒋汪合作政権は、上海での軍事的な抵抗がある程度成果を取めたのを見届けると、「一面抵抗・一面交渉」という原則に則って、1932年3月より対日交渉を進めることにした。そしてついに同年5月に淞滬停戦協定を締結して、最終的に日本軍を撤退させることに成功する。しかし淞滬停戦協定は抗日に沸き立つ世論には不評であった。汪兆銘は対日外交の責任者として、同月、南京の抗日救国団体の幹部らと面会した際、以下のように述べて理解を求めている。

……大衆運動は組織の規律を重んじるべきであり、そうしてこそ初めて正しい力と効果を発揮することができるのである。対日政策については今後も確定した政策（筆者注：「一面抵抗・一面交渉」を指す）を行なうつもりである（『汪精衛生平紀事』175頁）。

「組織の規律を重んじる」とは、要するに政府に従うことを要求していると言ってもよいだろう。しかし汪兆銘がこうした説得で、果たして抗日救国団体の幹部らを納得させることができたかは疑問である。淞滬停戦協定に対しては、政権の内部からさえも批判の声が上がり、監察院長の于右任によって、汪兆銘は危うく弾劾されかねない有様だったのである。

一方、上海に世界の耳目が集まっている最中に、東北地方では日本軍がさらに侵略を拡大し、1932年3月になると、ついに清朝最後の皇帝・溥儀を執政に擁立して満州国を樹立するに至った（溥儀は34年3月に皇帝に即位）。汪兆銘はこうした事態に対して、「一面抵抗・一面交渉」という原則に基づいて対処しようとした。その際、焦点になるのは、当時、北京の軍事責任者に準ずる地位にあり、実際に東北地方の日本軍に対して軍事的な抵抗を指揮することになる張学良の思惑である。果たして、汪兆銘の再三の要請にもかかわらず、張学良は日本軍に対して、麾下の軍を動員しなかったばかりか、多額の軍費を行政院に要求する始末であった。そこで汪兆銘は32年8月に張学良に対して、東北地方失陥の責任をとって、汪とともに辞職すべきだとする電報を発するに至る。張学良は、配下の部将たちの留任要求によって、事実上その地位を何とか保つことができたものの、汪兆銘は行政院長を辞職して、病氣療養を名目にドイツに向けて出国した。

1933年2月になると、満州国の領土の拡大を目指して、日本軍が熱河省攻略に乗り出したが、またたくまに張学良軍を蹴散らし、万里の長城を超えて、北平・天津にまで迫る勢いを示した。この時、張学良は熱河省の防衛戦に失敗した責任をとって、同年3月に辞職を余儀なくされた。汪兆銘は、張学良の辞職に合わせるように帰国すると、同月に行政院長に復帰し、さらに同年8月には外交部長も兼職するようになった。

一方、万里の長城付近の前線では、張学良軍に代わって、蒋介石直系軍が出動するようになり、日本軍を相手に善戦して、一部の戦役では勝利さえ収めた。蔣汪合作政権は、軍事的な抵抗がある程度成功を取めたことを見届けると、北平・天津を戦火から守るために、「一面抵抗・一面交渉」の原則に基づき、現地の地方当局に対して、日本軍との交渉の席に着くように指示を出す。こうして1933年5月に塘沽停戦協定が締結されることになった。

塘沽停戦協定には、日本側の要求が全面的に反映されており、万里の長城より南側の河北省北東部を非武装地帯とする一方、日本軍は長城より北に撤退することとなった。満州国と中国の国境線が実質的に万里の長城に沿う形で確定されたのである。塘沽停戦協定は事実上、満州

事変の講和条約となり、満州国を承認するものであったことから、世論から激しく非難された。一方、蔣汪合作政権は、塘沽停戦協定を締結したのは、あくまでも現地の地方当局であることから、中央政府が満州国を承認したことにはならないという立場をとっていた。当時、対日外交の責任者として、非難の矢面に立った汪兆銘の苦悩は、塘沽停戦協定の締結に際して発表した声明文からも読み取ることができる。それは以下のようなものであった。

かつては抵抗しなかったことで国土を喪失し、今日は抵抗したことでさらに多くの領土を喪失したと、非難する者がいる。実際のところ、中国の現有の国力を以てしては、抵抗したところで、畢竟のところ勝利の望みはないのだということは最初から分かり切っていた。それでも抵抗したのは、愛国心が要求するからにはほかならない。それ故に世間では、国土の割譲を承認したのではないかと憶測されているが、断じてそのようなことはない、あえて請け合う次第である（『汪精衛先生伝』239-240頁）。

塘沽停戦協定の締結後も、1933年7月から34年7月にかけて、中国側の地方当局は、日本の現地軍と交渉を進めて様々な協定を結び、中国と満州国間の鉄道・道路問題、郵便問題、航空路・海路問題といった懸案事項を解決していった。一連の協定は事実上、中国と満州国の国交を正常化するものとなったことから、またもや世論の激しい反発を呼んだ。一方、蔣汪合作政権は相変わらず、一連の協定を締結したのは、あくまでも現地の地方当局であることから、中央政府が満州国との国交を正常化したことにはならないという立場をとっていた。汪兆銘の苦悩は深まる一方であった。

さて、汪兆銘が救国のために民主化の主張を大きく後退させるに至ったのは、端的に言えば、「安内攘外」や「一面抵抗・一面交渉」が世論の強い反感を買っていたからだろう。仮に民主化を推進すれば、抗日を求める世論が政治に反映されることになり、「安内攘外」も「一面抵抗・一面交渉」も当然のことながら放棄されるだろう。しかし当時、汪兆銘は蒋介石とともに救国のためには「安内攘外」という根本方針を立てる必要があり、「安内攘外」のためには「一面抵抗・一面交渉」という原則で対日外交に臨む必要があると確信していた。そこで汪兆銘は非常事態の下では、政府への権力の集中と国民世論の統制を当然視して、実行に移しただけでなく、憲政への移行に当たっても、「専制的」と称される「五五憲草」に近似した憲法の制定を事実上提唱するに至ったのである。

暗殺未遂

1933年9月に、広田弘毅が外相に就任したのを機に、日本政府は欧米諸国に対してのみな

らず、中国に対しても、関係改善に取り組む姿勢をアピールした。蔣汪合作政権は、抗日を求める世論に反してでも、対日関係の安定を望んでいたことから、日本政府の関係改善の呼びかけに積極的に応えることにした。こうして35年5月には、日中間の外交レベルを公使級から大使級に引き上げることに合意し、さらに6月には、日本の要求に応じて、抗日活動を取り締まることを目的とする「邦交敦睦令」を布告するに至る。

しかし当時、日本の軍部はすでに政府のコントロール下にはなかった。日中両政府が親善ムードを盛り上げようとしていた最中にもかかわらず、現地の日本軍は華北分離工作に着手していたのである。日本軍は、中国の親日派要人に対する暗殺事件などを口実にして、中央軍と国民党機関の河北・チャハル両省からの撤退を要求した。蔣汪合作政権は日中間の親善ムードを壊すことを恐れて、敦睦邦交令の布告とほぼ同時に、現地当局の指導者の何応欽と秦徳純に、それぞれ梅津・何応欽協定と土肥原・秦徳純協定を締結させることにする。もっとも蔣汪合作政権は、塘沽停戦協定などと同じく、これらの協定についても中央政府が承認したことにはならないという立場をとっていた。

蔣汪合作政権がここまで妥協を重ねてまでして、対日関係を安定させようとしたのは、言うまでもなく共産党に対する殲滅作戦を優先する「安内攘外」という根本方針のためであった。しかし政権の内部からさえ、対日外交の責任者の汪兆銘を非難する声が高まっていた。汪兆銘はそのために辞意を表明せざるを得なくなる（その後、蒋介石の慰留により撤回した）。

また、抗日を求める世論も敦睦邦交令の布告にもかかわらず、すでに忍耐の限度に達していた。1935年12月には北平で一二九運動と呼ばれる日本の侵略に反対する大規模な学生デモが起こり、またたくまに全国に広がっていった。そして各地に多くの救国団体が生まれ、36年6月にはそれらの連合体として、中華全国各界救国連合会が設立された。同年11月には同会の指導者ら7人が「安内攘外」という根本方針を批判して、共産党とではなく、日本と戦うべきだと主張した挙句、逮捕されるという七君子事件が起こり、抗日の世論をいっそうかき立てた。

こうした抗日を求める世論の沸騰は、ついに対日外交の責任者である汪兆銘に対するテロという形をとる。1935年11月、国民党四期六中全会の開催に当たって、記念写真の撮影が行なわれていた際に、汪兆銘は、取材に訪れていた新聞記者から3発の銃弾を浴びせられたのである。倒れ込んだ汪兆銘は死を覚悟したのか、駆け寄って来た妻の陳璧君に「私は革命党だ、結果はこの通りだが、全く悔いはない」と口走った（『汪精衛先生伝』262頁）。「革命党」は清朝の打倒を目指して結成された中国同盟会を指している。暗殺されても「全く悔いはない」という言葉から、囂々たる非難にされていた対日妥協も、中国同盟会時代の摂政王・載灃暗殺の試みと同様に、強い信念に基づくものだったことがうかがえるだろう。

汪兆銘は幸い一命をとりとめたものの、行政院長などの辞職を余儀なくされ、療養のためにドイツに渡航した。汪兆銘が再び帰国し、政治の表舞台に復帰するのは、西安事件の一報を受けた後の1937年1月のことである。

V. エピローグ

親日政権の樹立

本稿は、民主化を軸にして、汪兆銘の半生の軌跡を描くことを目的にしている。満州事変を契機に、蔣汪合作政権が成立してからというもの、汪兆銘は救国のために、民主化の主張を大きく後退させるに至った。汪兆銘はその後、1944年11月に死去するまで、ついに再び民主化の推進を提唱することがなかった。それ故に本稿はここで終わっても差し支えないのかもしれない。

一方、汪兆銘の伝記作者は、むしろ最晩年の6年弱の親日的な政治行動を中心に、汪の生涯を描いてきた。この6年弱の政治選択こそが、汪兆銘の在世中も、またその死後も、汪が愛国者なのか、それとも売国奴なのかをめぐって、日中間で議論を呼び起こしてきたからである。しかし本稿では、この6年弱の軌跡の詳細については他書に譲ることとして、以下に簡潔に描くのみとする。

1937年7月に盧溝橋事件が勃発して、北京郊外で日中両国の現地軍が衝突した。蒋介石は西安事件を機に「安内攘外」という根本方針を放棄して、共産党との合作を視野に入れるようになっていたこともあって（同年9月に第二次国共合作が正式に成立）、現地軍に徹底的な抗戦を指示する。日本政府の強硬姿勢も相俟って、ついに日中間の全面戦争に発展し、戦火は華北から上海へと拡大した。およそ8年間にわたる日中戦争の始まりである。

蒋介石は、南京と上海という中国の政治・経済の中枢を死守するとともに、上海に莫大な利権を有する英米両国の積極介入を引き出すために、上海戦線に中央軍の精鋭部隊を大量に投入する。精鋭部隊は、日本軍に大きな打撃を与えたものの、日本軍の猛攻の前に、ついに潰走を余儀なくされた。猛り狂った日本軍は1937年12月に首都の南京を陥落させると、世界を震撼させた南京大虐殺を引き起こす。なお国民政府は南京陥落の直前に、重慶への遷都を決定していた。その後も、日本軍の侵攻はとどまることなく、38年中に武漢と広州が陥落して、中国の主要都市の大半が日本軍の手に落ちていった。

蒋介石は、英米ソ諸国をはじめとする国際社会に対して実効性のある対日制裁を求めたものの、叶わなかった。そうしたこともあって、蒋介石は、駐華ドイツ大使のトラウトマンによる和平工作の提案を前向きに検討するようになったが、日本側の条件が、日本軍の進撃に合わせ

て、エスカレーションする一方だったために断念を余儀なくされる。日本側は当初の満州国の承認や華北の制圧に加えて、南京や上海を擁する華中の制圧まで要求するようになったのである。蒋介石はやむを得ず徹底抗戦を唱えるほかなかった。

一方、毛沢東は、日本軍の占領をまぬがれた広大な農村地域を舞台にした遊撃戦によって、最終的な勝利を得ることは可能だと力説していた。日本軍が占領し得たのはいわゆる「点と線」、すなわち都市、並びに都市と都市をつなぐ鉄道の沿線地域のみだったのである。こうして共産党の根拠地は、国民政府が撤退を余儀なくされた華北や華中の農村地域において急速に発展するようになる。

汪兆銘は蒋介石や毛沢東とは異なり、武漢と広州の陥落後から、抗戦の前途を悲観するようになり、対日和平の必要性を痛感するようになっていた。汪兆銘は西安事件後の1937年1月に帰国すると、国防最高会議副主席、国民党副総裁などの要職に就任して、国民政府内では蒋介石に次ぐナンバー2の地位にあった。それ故に、汪兆銘は国民政府内の和平派のリーダーと目されるようになる。もっとも政治と軍事の大権を掌握していたトップの蒋介石が、汪兆銘の説得に耳を貸すことなく、徹底抗戦を唱えていたことから、汪は重慶にいる限り、公然と対日和平を画策することができなかった。

一方、日本政府は、トラウトマンによる和平工作の失敗を受けて、1938年1月に「爾後国民政府を相手とせず」という第一次近衛声明を発表して、国民政府、すなわち徹底抗戦を唱える蒋介石を首班とする政府との断交を宣言した。こうして日中の有志の間で、和平派のリーダーである汪兆銘を担ぎ出す工作が水面下で始動される。計画が煮詰まった同年12月に、ついに汪兆銘は重慶を脱出して、ハノイに赴いた。計画通りにその直後、日本政府は第三次近衛声明を発表したが、汪兆銘側との合意を破って、日本軍の2年以内の撤兵に言及することもなければ、駐屯地もあいまいにしたままだった。要するに日本政府は、汪兆銘側を騙して、汪側が独立国家としての体面を維持する上でぎりぎり妥協し得ると判断した条件さえ反故にして、日本側の要求を汪側に丸呑みさせようと目論んだのである。

汪兆銘はそれでも国民政府に宛てて、対日和平を勧告した。それに対して、蒋介石は、汪兆銘の党籍の永久剥奪を決定したばかりでなく、刺客を送り込んで、汪の秘書を暗殺するという拳に出た。汪兆銘は、言論による和平運動に限界を感じて、親日政権の樹立に踏み切る。ただし汪兆銘側が待望していたような、非蒋介石系の有力な軍首脳による追隨の動きが起きなかったことから、日本軍の非占領地域での政権樹立という当初の計画は断念せざるを得なくなった。こうして1940年3月に、日本軍占領下の南京で、国民政府の「還都」という形式をとって、政権を発足させることになる。

日本政府は、汪兆銘政権の発足後も、蒋介石政権との直接和平交渉を水面下で模索していた

ことから、汪政権の承認を、政権発足から8か月後の1940年11月まで引き延ばした。同月に汪兆銘政権は日本政府との間で日華基本条約を調印したが、秘密扱いとはいえ、汪政権の独立性を著しく侵害する条項が盛り込まれていた。日本軍占領下で政権を発足させる以上、汪兆銘には日本政府の要求を丸呑みする以外に選択肢がなかったのである。汪兆銘政権は文字通り傀儡政権から出発したと言ってよいだろう。

しかし、汪兆銘は傀儡政権に甘んじていたわけでは決してない。例えば、官製国民運動を発動して、対日従属化を緩和しようと試みている。満州事変の立案者とも言うべき石原莞爾が始めた東亜連盟運動を採り入れて、汪兆銘政権下においても、1940年9月より大々的に繰り広げた。東亜連盟運動はもとより「政治の独立」という綱領を掲げていたが、それはとりもなおさず、汪兆銘政権の「政治の独立」の可能性をもたらすものだったからである。汪兆銘はその他にも汪政権独自の官製国民運動として、1941年11月より新国民運動を繰り広げた。

蒋介石と汪兆銘の国際情勢に対する認識

さて、蒋介石は依然として徹底抗戦を堅持する一方で、汪兆銘は和平のために親日政権の樹立にまで踏み切った。両者の対照的な対日政策の背景には一体どのような事情があったのだろうか。蒋介石も汪兆銘と同様に、中国が独力で日本との戦争に勝利できるとは考えていなかった。日中両国の間には、軍事力や経済力の面で、圧倒的な格差があると認識していたのである。一方、毛沢東は、たとえ前近代的な遊撃戦であっても、粘り強く展開していれば、中国が独力で最後の勝利を得ることは可能だと考えていた。その点が、蒋介石と毛沢東の違いだと言ってよいだろう。

蒋介石と汪兆銘の最大の相違点は、当時の国際情勢に対する認識にあった。もともと日中戦争が勃発するまでは、蒋介石と汪兆銘は、次のような認識をほぼ共有していたと言って差し支えない。中国が日本の侵略を何とかしのいで、持久戦に持ち込むことさえできれば、いずれ英米ソ諸国が軍事介入してきて、世界戦争に発展するにちがいない。そうなれば、日本は英米ソ諸国の敵ではないので、敗北を喫するのは必至である、と。世界戦争に発展するという見通しは、英米両国が長江下流域などに大きな権益を抱えていたことに加えて、ソ連が満州国との国境線を挟んで日本と一触即発の関係にあったことに基づいている。

日中戦争勃発後も、蒋介石は概ね上記のような国際情勢に対する認識を保持していた。しかし汪兆銘は、特に1938年中に相次いで武漢と広州が陥落すると、次第に国際情勢に対する認識を改めるようになる。

汪兆銘は、英国が長江下流域に長年にわたって莫大な権益を築いてきたことから、日本の対中侵略を座視できないだろう、としている。しかし英海軍の防衛領域が大西洋、地中海、イン

ド洋、太平洋と分散していることから、独力では日本に対処することができない。そこで英国は米国と共同歩調の方針を採るよりほかないだろうと判断している。

汪兆銘は、米国が道義に基づいて厳しい対日批判を行なったことを、一定程度評価している。しかし米国が国益擁護という動機から、対日軍事介入に踏み切る可能性は低いと見なしている。というのは、日米の貿易総額の方が中米のそれよりも大きく上回っていることに加えて、第一次世界大戦後に全米を風靡していた孤立主義の影響も無視し得ないからである。汪兆銘は、およそ国家たるものは国益に基づいて行動すると考えてきたが、米国もその例外ではないと、改めて見なすようになったのである。汪兆銘は、このように米国に対日軍事介入の意志がなければ、英国も手を拱いているよりほかないと結論付けたのである。

汪兆銘は、ソ連が日本の脅威の増大に警戒を強めているものの、日本と戦端を開けば、日独防共協定に基づいて、ドイツがソ連に侵攻する可能性があることから、対日参戦の可能性はゼロに等しいとしている。ソ連が対日参戦に踏み切るのは、西方におけるドイツ軍の圧力がなくなった時だとしたのである。要するに、蒋介石が抗日の姿勢を堅持し、汪兆銘が親日の姿勢に変化した背景には、英米ソ諸国の軍事介入があり得るか否かという判断の違いが存在していたのである。

汪兆銘が重慶を脱出した1938年12月の時点では、英米ソ諸国の軍事介入の可能性の有無は、誰の目から見ても、判然としなかったであろう。汪兆銘の情勢判断の通りに、日中戦争が世界戦争に発展することなく、中国が単独で対日戦の遂行を余儀なくされたと仮定することにしよう。そうなれば、蒋介石も汪兆銘と同様に、中国に勝利の見込みがない以上、早晚降伏せざるを得ないと認めることだろう。降伏となれば、次は日本との和平交渉を通して、日本の要求する過酷な講和条件を、でき得る限り緩和するという課題が出てくる。

そうなれば、早くから対日和平を唱えて、日本側と信頼関係を構築し、太いパイプをもつ汪兆銘が、その課題を解決し得る最適任者として浮上するだろう。汪兆銘はまさにその時に救国の英雄となるチャンスをつかむのである。汪兆銘が仮に日本政府から大幅な譲歩を引き出すことに成功すれば、その歴史的な位置付けは、戦後、マッカーサーやGHQ当局を相手に立ちまわって、様々な譲歩を引き出し、「戦争で負けて外交で買った歴史はある」と嘯いた吉田茂のそれに似たものになったかもしれない（高坂正堯，1992，5頁）。

しかし、汪兆銘の情勢判断は最終的に外れてしまった。1941年12月に太平洋戦争が勃発したからである。開戦の一報を耳にした際の蒋介石と汪兆銘の反応は、実に対照的であった。蒋介石は日記に以下のように記している。

敵が南洋各地に進駐することとなれば、その兵力は分散して弱まる。そうなれば戦区は

拡大し、戦線は延長され、時間が長びくにつれて、人力、物力はいずれももちこたえられなくなる。その終末の悲惨さは、想像を絶するものとなろう（12月13日の日記）（『蒋介石秘録（下）』337頁）。

蒋介石はまさに開戦の時点で、その後の太平洋戦線や東南アジア戦線での日本軍の相次ぐ玉砕を予見していたのである。一方、汪兆銘は、太平洋戦争に先立つ日米交渉の見通しについて極めて楽観的だっただけに、開戦の一報は晴天の霹靂であった。その時の様子は、周仏海が語るところによれば、以下のようにであった。

……今朝汪先生は日本の総軍司令部と大使館から正式の通知を受け、臨時に高級幹部会議を開いた。汪先生はとても怒っていた。このような重大問題の決定を、事前になんの連絡もしてこない。日本は反米英のスローガンで新しい戦争を始めた。こんな無茶苦茶なやり方をするようでは、自分で失敗をきめてかかると同じだ。日本がこんな愚かなガサツなことをするとは、全く汪先生にとって予想外のことだった。今日は先生は異常なほどに激情のとりこになっていた。先生は発言するとき、全く平生（原文ママ）の態度を失っておられた（金雄白、1960、171頁）。

汪兆銘は、日本にとうてい勝機などあり得ないと考えていたからこそ、ショックのあまり「異常なほどに激情のとりこになっていた」のだろう。汪兆銘も周仏海と同様に、「三年前のわれわれの情勢判断（筆者注：英米ソ諸国との戦争の可能性はない）はあきらかにまちがっていたことを、認めざるをえない」と内心思ったことだろう。そして「自分の将来に遭遇すべき運命は、暗澹たるものだ」と覚悟したにちがいない（同上171頁）。この場合の運命とは、死罪などの重罪を科されるだけでなく、死後にも売国奴という汚名を被せられるということである。

汪兆銘に残された道は、汪政権の対日従属化を緩和することにより、日本軍占領下の国民の支持を獲得して、売国奴や傀儡政権という印象をでき得る限り薄めることだけだったと言ってよいだろう。そこで汪兆銘は、日本に対して積極的に戦争協力の姿勢を示すことによって、日本側の譲歩を勝ち得ようと画策する。そうした汪兆銘の画策は1943年1月に実現するかに見えた。汪兆銘政権の参戦と引き換えに、上海などの租界が返還されたのである。しかし2日遅れで、蒋介石政権も英米諸国との間で、租界返還に関する新条約を締結したために、汪兆銘政権のせつかくのアピールも出鼻を挫かれる結果となった。こうして汪兆銘は様々に尽力したものの、結局のところ売国奴や傀儡政権という印象を薄めることに成功しないままに、44年11

月に最期を迎えることになったのである。

注

- 1) 汪兆銘の釈放時期には諸説がある。『汪精衛先生伝』によれば、1911年9月であり、杉森久英（1998）によれば、同年11月である。
- 2) 汪兆銘の憲法観についてであるが、「この社会と人事は変遷して定まらないものである以上、憲法は自ずと軟性であるべきだ」と述べていることから（「論約法」81頁）、軟性憲法を支持していたと言える。それ故、共産党を殲滅し、さらには日本軍を一掃して救国の目標を達成した暁には、再び民主化を実現するために、憲法を改正すべきだと主張することも十分あり得たかもしれない。もっとも汪兆銘は戦時下の1944年11月に死去したことから、それは単なる仮定の話でしかないが。

参考文献

コトバンク <https://kotobank.jp/>

天児慧ほか編（1999）『岩波 現代中国事典』岩波書店

安藤徳器編訳（1941）『汪精衛自叙伝』大日本雄弁会講談社⇒『汪精衛自叙伝』

池田誠ほか（2002）『図説 中国近現代史（第2版）』法律文化社

石川禎浩（2010）『革命とナショナリズム 1925-1945：シリーズ 中国近現代史③』岩波書店

小野稔（1988）『太田元次軍医の看護日誌抄：日中平和の先駆者汪兆銘客死抄（小野稔作）から抜粋』大洋堂

金子肇（2011）「知識人と政治体制の民主的変革：『憲政』への移行をめぐる」（村田雄二郎編著『リベラリズムの中国』有志舎）

金雄白（1960）『同生共死の実体：汪兆銘の悲劇』時事通信社（池田篤紀訳。原著は1959年に刊行）

小島晋治ほか（2007）『中国近現代史』岩波書店

サンケイ新聞社（1985）『改訂得装版 蒋介石秘録（下）』サンケイ出版⇒『蒋介石秘録（下）』

柴田哲雄（2009）『協力・抵抗・沈黙：汪精衛南京政府のイデオロギーに対する比較史的アプローチ』成文堂

杉森久英（1998）『人われを漢奸と呼ぶ：汪兆銘伝』文藝春秋

高坂正堯（1992）『宰相 吉田茂（第12版）』中央公論

土屋光芳（2000）『汪精衛と民主化の企て』人間の科学新社

土屋光芳（2004）『汪精衛と蔣汪合作政権』人間の科学新社

西村成雄ほか（2009）『叢書 中国の問題群1 党と国家：政治体制の軌跡』岩波書店

深町英夫（2016）『孫文：近代化の岐路』岩波書店

森田正夫（1939）『汪兆銘』興亜文化協会

山田辰雄（1980）『中国国民党左派の研究』慶応通信

山中徳雄（1990）『和平は売国か：ある汪兆銘伝』不二出版

横山宏章（1997）『中華民国：賢人支配の善政主義』中央公論社

蔡徳金ほか編著（1993）『汪精衛生平紀事』中国文史出版社⇒『汪精衛生平紀事』

精衛（1916）「答某君書」（『旅欧雑誌』第6期、1916年11月）⇒「答某君書」

- 雷鳴（1944）『汪精衛先生伝』政治月刊社（《民国叢書》編輯委員会編（1989）『雷鳴著「汪精衛先生伝」／葉參ほか合編「鄭孝胥伝」』上海書店を使用）⇒『汪精衛先生伝』
- 李志毓（2014）『驚弦：汪精衛の政治生涯』牛津大学出版社
- 梁啓超（不明）「開明專制論」（『新民叢書』第75号（第4年第3号））⇒「開明專制論」
- 精衛（1906）「駁新民叢報最近之非革命論」（『民報』第4号）⇒「駁新民叢報最近之非革命論」
- 汪精衛（1930）「党治之意義」（南華日報社編輯部編『汪精衛先生最近言論集』南華日報社營業部）⇒「党治之意義」
- 汪精衛（1930）「關於党治之談話」（同上）⇒「關於党治之談話」
- 汪精衛（1930）「論思想統一」（同上）⇒「論思想統一」
- 汪精衛（1930）「論約法」（同上）⇒「論約法」
- 汪精衛（1930）「怎樣實現民主政治」（同上）⇒「怎樣實現民主政治」
- 汪精衛（1930）「怎樣樹立民主勢力」（同上）⇒「怎樣樹立民主勢力」
- 汪精衛（1930）「党與民衆運動」（汪精衛『汪精衛集（第3卷）』光明書局。《民国叢書》編輯委員会編（1992）『汪精衛著「汪精衛集」』上海書店を使用）⇒「党與民衆運動」
- 汪精衛（1930）「覆林伯生書」（汪精衛『汪精衛集（第4卷）』光明書局。同上）⇒「覆林伯生書」
- 汪精衛（1930）「個人引退之電報」（汪精衛『汪精衛集（第4卷）』光明書局。同上）⇒「個人引退之電報」
- 汪精衛（1930）「国民政府特別党部成立日演說詞」（汪精衛『汪精衛集（第3卷）』光明書局。同上）⇒「国民政府特別党部成立日演說詞」
- 汪精衛（1930）「我們要建設怎樣的國家」（汪精衛『汪精衛集（第3卷）』光明書局。同上）⇒「我們要建設怎樣的國家」
- 汪精衛（1930）「我們怎樣實行三民主義」（汪精衛『汪精衛集（第3卷）』光明書局。同上）⇒「我們怎樣實行三民主義」
- 汪精衛（1930）「武漢分共之經過」（汪精衛『汪精衛集（第3卷）』光明書局。同上）⇒「武漢分共之經過」
- 汪精衛（1934）「自述」（『東方雜誌』第31卷第1号、1934年1月）⇒「自述」
- 汪精衛（1937）「国民大会之三大基礎」（林伯生編『汪精衛先生最近言論集 上下編（從民国二十一年到現在）』中華日報館）⇒「国民大会之三大基礎」
- 汪精衛（1937）「論民主政治」（同上）⇒「論民主政治」
- 汪精衛（1937）「一面抵抗一面交涉」（同上）⇒「一面抵抗一面交涉」

サミュエル・ベケットと北村想に於ける詩劇

清水 義和

1. まえおき

サミュエル・ベケットは『プルースト』(Proust, 1931) 論の中で、『失われた時を求めて』(*À la recherche du temps perdu*, 1913-1927) を論じるにあたり、中心主題のひとつである「心の間歇」(« les intermittences du coeur » chez Proust) を省略して、ペシミズムの観点から論じている。¹⁾これに対して、カズオ・イシグロは「心の間歇」にインスピレーションを受けて、5歳の頃の微かな記憶を辿り日本の面影を小説『浮世の画家』(*An Artist of the Floating World*, 1986) に書いたと、ノーベル賞受賞の演説で述べている。²⁾

ベケットが、『失われた時を求めて』から「心の間歇」を省いた理由のひとつは、プルーストの最も重要な主題はショーペンハウエルの厭世観にある事を嗅ぎつけたからである。実際、S.E. ゴンタースキーによれば、ベケットはショーペンハウエルのペシミズムに深い影響を受けた。³⁾いっぽう、イシグロは日系イギリス人としてマイノリティーであるがゆえに、アイデンティティクライシスに直面して懊悩した。だが、「心の間歇」を読み、そこから靈感を受けて『浮世の画家』を書くきっかけを掴んだと述べた。

イシグロばかりでなく、クロード・レヴィ=ストロースも現代人が失った心の糧を追求した結果、現代社会がペシスティックな状況に覆われている謎を嗅ぎ分け、『神話論理』(*Les mythologiques*, 1964-71) (『生のもとと火にかけたもの』) (1969) で「心の間歇」が引き起した靈感に導かれ、やがて、舌が覚えていた太古の味覚の記憶に遡り、文明社会が失った未開人の食文化を再発見した。⁴⁾

ベケットは「マドレーヌに触れた舌の記憶」(p. 21)⁵⁾よりも、むしろプルーストが第一次世

界大戦で被った戦禍を描いた『見出された時』(*Le Temps Retrouvé*, 1927) に漲る汚泥にまみれた悪徳に共感した。毒々しい虚飾に塗れた貴族サン・ルーは、最前線で砲弾を浴び、首と胴体が真っ二つに裂けて戦死する。⁶⁾堀真理子氏は『改定を重ねる『ゴドーを待ちながら』演出家としてのベケット』の中で、「ベケットが『ゴドーを待ちながら』で表した世界は、大戦下、ナチスの弾圧にあった友人のポール・レオンやアルフレッド・ペロンが、ナチスの秘密警察が強制逮捕に来るのを待ちながら、その切羽詰まった苦悩と死を描いている」と述べている。⁷⁾

1994年、ロンドン大学演劇学部、デヴィッド・ブラッドビー教授のセミナーでは、ベケットの『ゴドーを待ちながら』(*Waiting for godot*, 1952 英語) や『幸せな日々』(*Oh les beaux jours*, 仏語 1961) の上演があり、詩人ベケットの演劇に触れることが出来た。帰国後、名古屋の栄にある芸文小劇場で、ピーター・ブルック演出、ナターシャ・パリー出演の『幸せな日々』(仏語) を観劇した。

その後、ベケットの『ゴドーを待ちながら』に影響を受けた劇作家の新解釈がでた。なかでも、日本では北村想が『寿歌』(1979) の上演で『ゴドーを待ちながら』に対する解釈を更新し続け、その後4部作『寿歌西へ』(1985) となって結実した。北村は『寿歌』で、コミカルな旅芸人一座にシリアスな求道精神が絡んだトラジコメディを書いた。これに対して、別役実は、寡黙なベケットに対して、饒舌な不条理劇を上演している。なかでも『バス停のある風景』や『或る昼下がり』では、ベケットの『ゴドーを待ちながら』のうち、「ゴドー」を「バス」にして、「バスを待ちながら」に変え、平和な日常生活における、不条理なブラックコメディに仕立て直した。別役は、北村想の『寿歌西へ』の続編に限りない「西へ」のリフレインに共感したと劇評に書いている。2018年5月に名古屋、栄の芸文小劇場で『寿歌』の再演が行われた。この公演はベケットの『ゴドーを待ちながら』の荒廃したペシミスティックな世界と共通した演出であった。

ベケットの『ゴドーを待ちながら』を凌駕すると評された、いとうせいこう作、ケラーノ・サンドロビッチ演出の『ゴドーは待たれながら』が東京芸術劇場で2013年4月に上演された。ゴドーを待つのではなく、「ゴドーは待たれる」という逆さまの解釈によって上演した。

ベケットは『ゴドーを待ちながら』や『幸せな日々』のような比較的長い芝居を描いたあと、次第に短くなる作品へと変貌を遂げた。それにしがたって短い劇を解釈するのが一層複雑で困難になった。ベケットの『ゴドーを待ちながら』は代表作のひとつであるが、むしろ、問題作は後期の作品にあり、その台詞がますます短く、難解になっていくので、劇の解釈を巡って未だにさまざまな問題を引き起こしている。

不条理劇として現代劇を概観すると、ベケットの『ゴドーを待ちながら』と北村想の『寿歌』を比較した時に、永い歳月にわたる上演史には幾多の変遷が見られる。まず、ベケットの

場合、『ゴドーを待ちながら』は大戦下での不条理な状況を現した劇として上演された。しかし、不条理 (absurdité) には absurd (馬鹿馬鹿しい) の意味があり、レジスタンス運動を密告する背信行為による挫折や、どうにもならない時代の閉塞感を、ファルス紛いに『ゴドーを待ちながら』を演出する公演が現れた。その後、ベケットの台詞にはレジスタンスを政治の側面からだけではなく、アントナン・アルトーの『演劇とその分身』(*Le Théâtre et son double*, 1932) に見られる分身 (=ダブル) や、論理ではなく詩によってしか表せない解釈を取り入れて、ドラマを表現する演出が加わった。ベケットの後期の作品になると、『わたしじゃない』(*Not I*, 1972) では、暗い舞台に女優の口元だけにスポットライトが当たり、ほとんど意味不明なお喋りが延々と続く。この短い劇にはプロットがなく、抽象的で、舞台転換もなく、女優が発する声の響きを耳にすると抒情の溢れた詩情に触れることが出来る。堀真理子氏はこれをベケットの「音楽性」(pp. 164-165) の魅力と指摘している。ベケットはジェームズ・ジョイスのダダイズムやマルセル・デュシャンのシュルレアリスムに影響を受け、詩的な言葉を過剰に表現した。

いっぽう、北村想の『寿歌』(1979) には、手品師のヤスオがその名もイエス・キリストを思わせるように登場する。『寿歌』は不条理劇であるけれども、ゲサクの軽口が真骨頂で、改作『寿歌西へ』(1985) ではゲサクの狂言回しが益々過剰となり、ドラマ自体が西へと駆立てられ、訳もなく西へ西へと向かう理不尽なエネルギーを高めている。その後、一転して、『処女水』(2001) では物語の断面を切り取り、前後の脈絡もない、インターラード (幕間狂言) を作った。また、その後『偶然の旅行者』(2016) では舞台が広大な宇宙に拡散し、人を待つことも人が到着することも、意味が希薄になり、ペシミズムが濃厚になっている。

本稿では、ベケットの『ゴドーを待ちながら』や『幸せな日々』に見られる比較的長い台詞があり、また劇的なメッセージ性のある作品から、後期のプロットがなくなった『わたしじゃない』へと、ベケットの劇が変質していった経緯を解説する。そして、北村想が、『寿歌』から『寿歌西へ』に見られるメッセージ性のある作品から、近作の『処女水』や『偶然の旅行者』に顕著になった、いわば、設計図の断面図だけを鋭利な刃物で切り取って提示する劇を読み解く。

ベケットはショウペンハウエルの厭世観が自作のドラマに濃厚であり、『プルースト』論で、『失われた時を求めて』のペシミズムを取り上げて論じた。そのうえで、「心の間歇」は自明の理だから省いたと述べ、『ゴドーを待ちながら』でも、厭世的な作品として劇化している。いっぽうで、ベケットには『ジョイス』論があり、詩的で、一見意味のないように見えるダダイズムが濃厚であり、アルチュール・ランボーの『イルミネーション』(*Les Illuminations*, *La Vogue*, 1886.5-1886.6) に描かれた言葉による洪水を思わせる瓦解した荒地が見られる⁸⁾。また、

北村のドラマ『寿歌』を含む作品は厭世的であるが、果たして、ベケットのような厭世観や詩的で狂的なダダイズムがあるかどうか、それとも北村の芝居にはベケットと違った独自のアイディアが見られるのかどうかを検証する。

2. サミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』

『ゴドーを待ちながら』は二幕劇で、舞台中央に木が一本立っており、田舎の一本道がのびているだけの裸舞台である。第一幕はウラディミールとエストラゴンの浮浪者が、ゴドーを待ち続けている。2人はゴドーに会ったことはなく、たわいもないゲームをしたり、滑稽で実りのない会話を交わしたりする。そこに、ポッツォと従者のラッキーがくる。この二人はウラディミールとエストラゴンの分身(=ダブル)である。ラッキーは首にロープを付けられ、「市場に売りに行く途中だ」⁹⁾とポッツォは言う。ラッキーはポッツォの命令で踊るが、「考える！」(p. 42)と指示されると、突然、不条理で哲学的な演説をする(pp. 42-45)。彼らが去った後、使者の少年がやってきて、「今日は来ないが、明日は来る」(p. 50)とゴドーからの伝言を告げて終わる。

第二幕は、第一幕の反復で、ウラディミールとエストラゴンが相変わらずゴドーを待ち続けている。第一幕と同様、ウラディミールとエストラゴンの分身として、再びポッツォとラッキーがやって来る。だが、今度はポッツォが盲目になっており(p. 84)、ラッキーは沈黙している。(He's dumb p. 89) 彼らの間に何か事件が起きたことを暗示している。その後、2人が去ると、また、使者の少年がやってくる。(Enter Boy right p. 91) この場面は、堀真理子氏は『改定を重ねる『ゴドーを待ちながら』演出家としてのベケット』(2017)の中で、ウラディミールとエストラゴンはナチス秘密警察の襲撃を待ち受けながら重苦しい時代の閉塞感に耐えられず、自殺を図るのであるが失敗するという(p. 100)。そして何も起こらず幕となる。舞台全体には厭世観が漂い、救いはないように思える。

ロンドン大学で1994年『ゴドーを待ちながら』を上演に参加して帰国したあと、新国劇出身の緒方拳(Bunkamura, 2000、2002、2003年)が極度に衰弱した軀に鞭打ちウラディミールを演じるのを観た。

VLADIMIR: [*Hurt, coldly.*] May one inquire where His Highness spent the night?

ESTRAGON: In a ditch.

VLADIMIR: [*Admiringly.*] A ditch! Where?

ESTRAGON: [*Without gesture.*] Over there.

VLADIMIR: And they didn't beat me.

ESTRAGON: Beat me? Certainly, they beat me. (p. 9)

エストラゴン役を演じた緒方拳は、見かけはひょうきんであるが、次の瞬間、忽ち豹変して、鬼気迫る苦悩を表現した。『ゴドーを待ちながら』では末期の病人に救いはないのか、という諦観や厭世観が漂っていた。緒方拳のエストラゴンと串田和美のウラディミールの台詞の遣り取りは、『奥の細道』(1689)で芭蕉と曾良が交わす会話を彷彿とさせた。芭蕉が旅に出た理由のひとつは、死が遠いところにあり、その死を求めて旅にでかけたという。

堀真理子氏は『ゴドーを待ちながら』のウラディミールとエストラゴンの遣り取りは、アウシュヴィッツの遣り切れない閉塞状況を表していると論じている (p. 204)。哲学者のジャン＝ポール・サルトルが、アンガージュマン (engagement) (=社会参加) して、ナチスに捕まり死と直面した経験を描いた小説『壁』(Le Mur, 1937)と比較して、『ゴドーを待ちながら』は当時ののっぴきならない政治状況よりも、むしろベケットが詩人として、厭世観漂う中でナチス秘密警察に襲われ死刑執行された友人に対する哀悼を表していると指摘する。

俳人の馬場駿吉氏は、堀氏の論文を例に挙げながら、ベケットは厭世的な戦時状況を芝居に描き、陰鬱な事象を只管事細かにリアルに記すことを重視していると述べる。¹⁰⁾ いっぽう、ロンドン大学のブラッドビー教授は、「ベケットはリアリストであるよりも、むしろ詩人であったことに力点を注ぐべきだ」¹¹⁾と語った。堀氏はロンドン大学ロイヤルホロウエイ校の大学院でブラッドビー教授のもとで講義を受講し、ベケットの『ゴドーを待ちながら』を論じ、言葉にはならない苦悩を詩的に解釈する指導を受けた。堀氏は、ベケットが、『ゴドーを待ちながら』を再演するごとに益々ペシミスティックに演出したと述べている (p. 217)。けれども、ベケットにはレジスタンスの詩人としてばかりでなく、サーカスやパレーやヴォードヴィルにも嗜好があり (p. 15)¹²⁾、更に世界中の国々の上演を精査したうえで、オールラウンドに論じている。

3. 『幸せな日々』

『幸せな日々』(Oh les beaux jours, 1963 仏)の第一幕は抜けるような青空の下で、女性のウィニーが、小塚のような盛土の中で、腰まで地中に埋まり1人である。彼女は目覚まし時計の音で目を覚まし、歯を磨き、お祈りを唱えて、などなど、そのような状況の下で「日常的な茶飯事」を繰り返す。この小塚の向こう側に、彼女の夫、ウィリーが現れるが殆ど声を出さず、また振り返りもせず、ただ只管新聞を読んでいる。いっぽう、ウィニーは間断なくお喋りをす

る。その様子は、彼女が狂気から逃れるためであるかのように見える。

第二幕は、第一幕の複製で、変った事と言えば、ウィニーは到頭小塚の中で喉元まで地中に埋まっている。第一幕で、「日常生活」を表していた細々とした数々の日用品に手が出せなくなり、使うことも出来ない。それでも、ウィニーはお喋りを続けている。やがて、小塚の向こう側から、このような状況とは不似合いに、正装をしたウィリーが登場する。ウィニーは彼に自分の名前を呼んでもらおうと、呟き続けるという馬鹿馬鹿しい対話が続く。

ロンドン大学ロイヤル・ホロエイ校のブラッドビー教授のセミナーで、ベケットの『しあわせな日々』の公演があり、パリ大学大学院マスターコース所属のステファニーがウィニーを演じた。

WINNIE: Begin, Winnie. [Pause] Begin your day, Winnie. [Pause. She turns to bag, rummages in it without moving it from its place, brings out toothbrush, rummages again, brings out flat tube of toothpaste, turns back front, unscrews cap of tube, lays cap on ground, squeezes with difficulty small blob of paste on brush, holds tube in one hand and brushes teeth with other.]¹³⁾ (HAPPY DAYS, 1961)

ステファニーの属するグループはフランス語で『幸せな日々』を演じた。ステファニーはウィニー役を演じたが、役者としての所作が殆んどなく、まるで詩を朗読しているようであった。けれども、ブラッドビー教授は「ステファニーのフランス語の朗読は、詩的で、ベケットの考えをはっきりとドラマに表している」と評価した。ブラッドビー教授はベケットの狂気のような不条理を、アントナン・アルトーが『演劇とその分身』に描いたドッペルゲンガーを思わせるような分身による狂熱的な詩の発露に見ている。¹⁴⁾ランボアの『イリュミナシオン』は、アルトーの出現により狂気が怒涛のように渦まき、まさに、パラドキシカルな詩的感覚を呼び起こしている。つまり、ベケットは不条理な世界を詩的言語で充たす。殊に、台詞の一語一語はダダイズムでシュルレアリスムに満ち溢れているけれども、詩歌を声に出して、朗読することによって、無味乾燥な空間は、言葉のリズムにより、次第に、濃密で抒情的な空間に溢れながら、厚みを加え、劇空間全体をいっぱい埋め尽くし、遂には、全空間を充満してしまうのだ。

ピーター・ブルック・カンパニーが、1997年に愛知芸術文化センター小ホールで『幸せな日々』を公演した。舞台では小塚のようなオボジェをすっぽりとかぶったヒロインのウィニー役をナターシャ・パリー＝ブルック夫人が、エレガントに日用品を手にしながらか一方的に喋り続けた。¹⁵⁾ブラッドビー教授は「ベケットの劇はサンボリズムであり、詩が重要だから、イブ

センのようなリアリズム劇ではないので、細々した小道具を使って詳細に演技するのは重要ではない」と主張した。また、ブラッドビー教授は自著『ベケット：ゴドーを待ちながら』(Beckett: *Waiting for Godot*, 2001)の中で、ベケットの劇はアントナン・アルトー著『演劇とその分身』の分身が引き金となってパラドックス(=矛盾)を引き起こす詩的な状況と共通している、と指摘している(p. 209)。つまり、精神が分裂したように混乱し、狂気じみた矛盾が詩的な状況を産み出すと評した。同じ狂気を、ブラッドビー教授はハロルド・ピンターの『バースデー・パーティ』(PINTER'S *THE BIRTHDAY PARTY*, 1957)にも認め、登場人物がロジカルでリアルに演ずれば、忽ち、矛盾した雰囲気は霧散し、従って诗情も消えると述べた(p. 210)。『幸せの日々』の舞台に積み上がられた小塚は人生の汚泥を象徴している。ランボーの『イリュミナシオン』に歌われた「洪水の後」のように、どんなに詩的で上品な人生でも、翌日には汚泥に塗れた生活に一変し、醜く覆われると論じる、いわばショウペンハウエルのペシミズムが象徴的に表されている。堀氏は、S. E. ゴンタースキーの「上演の未来」を引用し、この小塚はナチスの殺戮を象徴的に表しているという。そして、『幸せな日々』は、パラドキシカルにベケットの厭世観を表していると論じた(pp. 35-36)。

4. 『わたしじゃない』

1994年6月ロンドン郊外の小劇場リージョナルシアターでベケット作『わたしじゃない』(*Not I*, 1972)の上演があった。暗い舞台では女優の口元だけに照明があたっており、全体が黒い覆いで隠された女優のモノローグが延々と続いた。

MOUTH:.... Out... into this world ... this world... tiny little thing... before its time... in a godfor-...what?.. girl?.. yes... tiny little girl... into this...out into this... before her time ... godforsaken hole called ... called... no matter... parents unknown... unheard of ...he having vanished... thin air... (p. 376) “*Not I*”

台本に書かれた言葉以上に、女優が発する肉声が観客に強く訴えかけた。それは、女性の根源的な情念を吐露しているようで、女性自身の生命力が魂の塊となって訴えかけてくるすさまじさがあった。口の周りを覆う闇は、あたかも周りのホロコーストの陰鬱な闇を真っ暗な布で包んで圧殺してしまうようで、今にも何もかも飲み込んで、無に帰してしまう凄まじい漆黒のペシミズムを表していた。

S. E. ゴンタースキーは『わたしじゃない』の暗闇に居る「聴き手」役に注目し、テキスト・

クリティークを通して、「話し手」役と「聴き手」役の関係を明確にし、『わたしじゃない』の劇を完成度の高い劇にする為のプロセスで寄与したと述べている (p. 133)。また『わたしじゃない』にはテレビドラマ版があるが、テレビ画面に口元だけを大写しにしたバージョンであり、狭いテレビのモニターに「聴き手」役なしで、放映された。因みに、別役実は「聴き手」役は重要性があまりないと述べている。いっぽう、「語り手」役をクローズ・アップするテクニックは、マンレイがキキをモデルにして撮った写真、「アングルのヴァイオリン」(1924) からインスピレーションを得たといわれる。

堀氏の演劇論『ベケットの巡礼』(2007)によると、ベケットは俳句を英訳しているが、『ゴドーを待ちながら』のヴラジーミルとエストラゴンの台詞の応酬は、芭蕉と曲斎の連句を想起させるという。堀氏は連句のうち、発句が独立して残り、俳句となったと論じ、その省略の仕方がベケットと芭蕉との言葉使いに似ており、互いに短くなる傾向が顕著になり解読するうえで重要な鍵となると論じている。¹⁶⁾ベケットの作品を全体として見ると、後期になるに従ってドラマの台詞が次第に短くなる。しかも、その短い詩形には滑稽さが宿っている。ベケットも芭蕉も新しい言葉を見つけるのに相当時間を費やした。堀氏は、ベケットとハロルド・ピンターとの関係について、「間」を通して詳細に論じている。ピンターは『昔の日々』(*Old Times*, 1970)で「起こらなかったことも起こったことのひとつ」とアナに語らせている。アナが舞台上で、映画のスクリーンに映った光媒体と化した画家のロバート・ニュートンに向かって話しかける場面では、メカニカルで空虚な虚無的空間が産み出す「間」を構築してみた。¹⁷⁾

ベケットはセルゲイ・エイゼンシュテインの映画に興味があり、映画のモンタージュは歌舞伎や俳句から影響を受け、その足跡を研究している。演劇と違って、映画は異空間を自在に飛び回り、モンタージュはその仕組みを斬新に示す。つまりモンタージュは現実にはありえないワンカットを別のカットでアット・ランダムに繋いでしまう。しかも、現実以上にモンタージュは映像効果を発揮する。そのモンタージュを、ベケットは、自作の演劇に取り入れて、リアルな世界を混沌としてペシムスティックな異界に変えてしまい、パラドキシカルで詩的な空間に変身させた。

5. 北村想の『寿歌』

『寿歌』の舞台では、核戦争の末期と思しき舞台奥から、人影もない荒野を旅芸人のゲサクとキョウコが荷車を引いて現れる。

KYOKO: Look, it flashed again. This time, over there. GEASAKU-DON. Do you think it's another missile?¹⁸⁾

そこへいきなり出現するのがヤスオで、不思議な魔術を使い、食べ物を倍にする超能力を持っている。こうしてゲサクとキョウコの当てもない旅にヤスオが加わり、3人は荒野を目的もなく旅を続ける。

『寿歌』の荒廃した世界は、ベケットが『プルースト』論で論じるペシミスティックで泥濘によって荒れた第一次世界大戦下の世界と似ている。ステージは中東の戦闘地帯さながらにミサイルが飛び交い、核戦争で空気は放射能で汚染されている。しかも、皮肉なことに舞台は平和な日本国内にある劇場内で上演されている。ベケットが述べているように、今日の平和な出来事も、明日になれば、核戦争で一瞬のうちに塵芥に瓦解するというペシミスティックな世界観がある。そのような状況でさえも、ゲサクとキョウコは、地を這いつくばる虫けらのように角をつつき合い交尾さえする。ショウペンハウエルが『意思と表象としての世界』(*Die Welt als Wille und Vorstellung*, 1927)の中で論じているように「生きんとする盲目的な意欲の世界から表象の世界に入り込む」(um aus der Welt des blinden Wollens in die der Vorstellung einzutreten)¹⁹⁾のである。その虚無感は、『ゴドーを待ちながら』にも、そして、北村の『寿歌』にも当てはまる。『ゴドーを待ちながら』には神らしき存在は登場しないが、『寿歌』にはキリストの名前に似た精霊のようなヤスオが登場する。しかも、ゲサクとキョウコは太古に滅びたモヘンジョダロを目指すのであり、『聖書』にある約束の地、カナンへ向かうのではない。

北村想が描く作品には、『寿歌』以外の芝居でも、多くの登場人物が、心の病で苦しんでいる。この心の病が、舞台にもう一つの異空間を作りだし、一種のメタシアター風な外観を帯びている。北村が書いた『私の青空』(1984)の異空間は明るいが何処かしら心のネジが狂っている。また『PICK POCKET』(1989)の作家先生は、テキヤの連中と付き合い、破滅的な人生を送りながら、コミカルでしかも明るさを失わない。心に病を抱えている登場人物は、『寿歌』の核戦争でミサイルが飛び交う前線でさえ、蜻蛉のようにふわふわと漂い続けている。それでありながら、まるで苦役のようにゲサクとキョウコは、大八車を引っ張って旅を続けている。この大八車は、ベルトルト・ブレヒトの『肝っ玉母さん』(*Mutter Courage und ihre Kinder*, 1939)で母が引く車のように、人生という苦役を象徴している。果たして、ゲサクとキョウコは、何時になったら出口を見出すことが出来るのか。

北村想のように、心の病を抱えている作家に、同じような心の病を抱えたプルーストがいた。『失われた時を求めて』では、主人公のマルセルが憂鬱なパリの孤独が耐えられず、サナトリウムで自殺を図ろうとする。だが、或る日、菩提樹のお茶の葉に浸したマドレーヌが舌に

触れたとたん、「心の間歇」を感じて心がビリビリと震える。いっぽう、反対に、ベケットの『ゴドーを待ちながら』では、ウラディミールとエストラゴンは自殺を試みるが失敗し、芝居はペシミスティックな状況下で未解決のまま終わる。『ゴドーを待ちながら』と同様に、『寿歌』の結末も果たしてこれから先どうなるのか。劇はトラジコメディのまま、オープンエンディングで終わる。おそらく、『寿歌』の場合、北村想は心の病に犯されて、プルーストの言う「心の間歇」を見いだすことはできない。言い換えれば、永年投与し続けた薬の副作用によって、思考が中断してしまい、心の闇の奥を深く見つめられない思考停止の状態を表している。

近年、北村は『処女水』（2001）の劇中に、ちょうど、澁澤龍彦が『妖精たちの森』（1980）で45億年前から魚石の中に閉じ込められ還流しない「処女水」が不思議な感覚を引き起すのと同じ様な、水槽の水を描いている。²⁰⁾つまり、還流せず魚石の内部に留まっている「処女水」が、それにもかかわらず、その内部で分子分裂を引き起そうとしている予感がある。プルーストは「心の間歇」の中で、死んでいるものにも生命が宿るというケルトの伝説を引用している。他方、ベケットはアイリッシュなので、死んでいるものの中に存在する「心の間歇」を自明の理として知っていた。片や、北村は『処女水』のなかで幽かにではあるが死んだ女性の躰の中にさえも命を育む元素が宿っている筈だと予感するのだが、未解決のまま劇は終わる。

6. 『偶然の旅行者』

北村想が、自作『グッバイ』の書き下ろしで、2013年度、第17回鶴屋南北戯曲賞を受賞して3年後の12月、『偶然の旅行者』を発表して上演した。北村から、稽古中、同作品の成立について様々な構想を聞いた。なかでも、「作・北村想&演出・鹿目由紀、初顔合わせによる女性二人芝居『偶然の旅行者— The Accidental Tourist —』名古屋で上演」では以下のように着想を纏めている。

“旅”をテーマに書かれた舞台は、銀河鉄道の宇宙にあるような風情の廃駅の待合室である。なぜかそこで暮らしている女と、廃線になった汽車でそこを訪れた女とが、謎の女ふたりの会話を交わす劇として展開する。北村想は「夜に J-POP を聴いていて思いついたんですが、歌詞をモチーフにしてセリフをつないでいくと面白いなと。書いてから気づいたのが、そういうことって寺山修司さんがやりそうなことだなと」と述べた。²¹⁾

駅で待っている女‘おと’と、駅に着いたばかりの女‘晦’との関係は、芝居が始まると忽

ち役割を交換して、駅舎にいる女‘おと’は旅に出ようとしているのであり、いっぽう、‘晦’の方は駅に着いた途端に、待つことになる女である。

Oto finishes the preparations for trip and, is standing.

Tsugomori : Will you go?

Oto: I wish to see the blue sky, soon.

Tsugomori: You won't come back, will you?

Oto: Therefore, Tsugomori, you will have to be taking care of a house until someone will be returning.

Tsugomori: Will someone come, won't he?

Oto: Someone will come. By accidental, suddenly, he will come, as you.

Tsugomori: Will I have to wait for him?

Oto: Waiting for someone is a trip, too.²²⁾

ベケットは『ゴドーを待ちながら』の中で、ゴドーの到着をウラディミールとエストラゴンが待っていると描いている。ところが、逆さまに、いとうせいこう作、ケラーノ・サンドロピッチ演出の『ゴドーは待たれながら』では、ベケットのゴドーを待つウラディミールやエストラゴンの役割がひっくりかえり、ゴドー演じる大倉孝二が「誰かが俺を待っている」と、ひたすらその独り言を延々と2時間繰り返す。つまり、ゴドー自身が舞台に現れ、待たれる男に作り変えられたのである。この場合、ゴドーはウラディミールとエストラゴンが見る反射する鏡像のような存在となっている。

北村は『偶然の旅行者』で、ゴドーを待つウラディミールやエストラゴンに相当するような女の‘晦’と、また、ゴドーが待たれる女としての‘おと’とが、鏡の反射のように、互いに鏡の前で立ち向かう二人のような女性として描いた。つまり、鏡に映った女の虚像は、待つ女であると同時に待たれる女にもなる。シェイクスピアの『十二夜』(*Twelfth Night, or What You Will*, 1601-1602)のラストシーンで、大自然という鏡を前に、セザーリオ(=ヴァイオラ)とセバスチャンの双子の姉弟が向かい合う。ルイス・キャロルの『鏡の中のアリス』(*Through the Looking-Glass, and What Alice Found There*, 1871)では、鏡に映った反対文字がある。現代では、ハロルド・ピンターの『ダムウェーター』(*Dumb Waiter*, 1957)で、殺し屋が、鏡に写る虚像に向かって、むなしい戦いを展開する。阿部公房の『幽霊はここにいる』(1959)では二人の深川啓介が虚空を境にして互いに会話を続ける。

ベケットの作品では、ウラディミールとエストラゴンがひたすらゴドーを待つ。いっぽう、

北村は、『寿歌』から『寿歌西へ』4部作を描き、その中でゲサクとキョウコは、只管、西へ西へと進んで行く。だが、いっこうに西へ進んではいけない。その結果、北村は、ゲサクとキョウコは、何かを待ち続けるのではなく、これは、合わせ鏡の深淵が見せる反射鏡のように、底無し沼に落ちてしまい、ひたすら、ゲサクとキョウコは待ち、待たれる関係になることになることに気がつく。そしてついに、合わせ鏡の底なしの深淵に落ちてしまい、ボトムレスの奥底で想いを馳せる人物たちを描いて見せる芝居を作る事を思いついたのである。

『偶然の旅行者』の旅人‘晦’と待ち人‘おと’は、広い宇宙を旅するのであるが、『スターウォーズ』(Star Wars, 1971)のように戦士が宇宙を旅するようにしてワープし、一瞬のうちに宇宙の彼方のステーションに到着する。そこには旅人の‘晦’と待ち人の‘おと’がいる。この二人はいわば鏡に映った虚像である。

この虚像は、ちょうどブルーストが、アンリ・ベルクソンの時間の概念を心理描写に応用して、生身の女性さえロボットのような無機質な対象(=光ファイバーを使って映すスクリーン)に変えてしまった、いわば血の通わない機械人間と似ているスクリーンに虚像を描いたのである。ジル・ドゥルーズは『アンチ・オイディプス』(Anti-Oedipus, 1972)の中で、ブルーストが描く登場人物を機械ロボットとして、スクリーン(=分身のこと)として推定している。ピンターはブルーストの『失われた時を求めて』の映画スクリプトを書いた体験があり、これを応用して、映画台本『失われた時を求めて』に書いたのであり、その影響を自身のドラマ『昔の日々』の中で、生身のアナが映像のロバート・ニュートンに話しける場面に使っているのである。

片や、北村は小説やドラマの中で、物理学を応用して底なしの深淵な宇宙空間を計測している。おそらく、北村はその底のない鏡の深淵を、カール・グスタフ・ユングやジークムント・フロイトやジャック・ラカンの夢分析に置き換えようとはしない。というのは、先ず、夢は眠らなければ見ることはできないからである。ところが、北村は心の病で永年不眠症を患い、マクベスのように「もはや眠りが無い」²³⁾と苦しんだ挙句、遂に芝居の中に、眠れない夜の夢さえも舞台の上で計測してしまうのである。

北村は、ベケット作『ゴドーを待ちながら』のように、只管、ゴドーを待っているゲサクとキョウコを『寿歌』4部作に書き、西へ西へと移動し続けた。けれども、その後で、北村はベケットとは異なった演劇空間を造り出した。つまり、北村は合わせ鏡のようにして、無限の底なしの空間を造り、狭い舞台を無限の宇宙空間に広げた。そのからくりは、ピンターが『ダムウェイター』に出てくる殺し屋が鏡に写った虚像を相手に虚しく戦うように、今度は、北村が、その虚像を、小さな一断面に切り取って、広大な宇宙空間の一部として表し、それを舞台にはめ込んで表したのである。その結果、『偶然の旅行者』では、舞台に置かれた椅子ひとつ

できえ、ひとつの銀河系宇宙空間に表して見せることが可能になり、このようにして、巨大な宇宙空間に浮かぶ小さな廃駅を、舞台上に構築してみせたのである。

ベケットの劇は具に見ると後期になるに従い、ますます短くなるが、反対に、北村は、劇を無限に広がった宇宙空間に広げ、そこから一断片を切り取って舞台に飾ってみせた。こうして、北村の劇には、無限の空間を切り取った断片を使い、舞台に飾る芝居が登場した。また、近年の『処女水』では、今度は、無限宇宙からその極小空間の断面を切り取って、舞台の水槽に浮かべ、死体が、まるで宇宙という海に漂う無生物のように、劇の中に姿を表し始めるのである。

微かに、ときおり水の音が聞こえる²⁴⁾ (『処女水』)

北村は『処女水』の中で、まるで無機質な液体の中に漂う死んだ女性の躰に化学反応が現れるのをじっと観察しているかのようである。いっぽう、間歇泉は、静かな池の水面に、突然吹き出して、生命の泉を噴き上げる。この間歇泉は、「失われた」無機質な水面に、突如、一挙に生命を噴き上げる。

濫澤龍彦は『妖精たちの森』で、ロジェ・カイヨワの『石』(Pierres)²⁵⁾を引用しながら、「魚石」に閉じ込められた「処女水」(46頁)が、45億年前から、魚石の中から外に飛び出す瞬間を今か今かと待ち続けているという。北村は『処女水』で、死んで物に過ぎなくなった女性の躰からさえも、言い換えれば、その躰は元々生命を産出す臓器を持っているのだから、地球にしかない水が、やがて生命を産出するのであり、「死んだ無機質の物体」から生命が誕生するというケルトの伝説が、北村の『処女水』と微かであるが繋がり、そこから表れようとしていると考えられる。

7. 結語

ベケットの『ゴドーを待ちながら』のように、北村の『寿歌』は、舵を失った難破船の様に行く当てもなく彷徨い続けている。ジョン・バニヤンの『天路歷程』(The Pilgrim's Progress, 1678)と比べると、『ゴドーを待ちながら』にも『寿歌』にも屈強で不屈な信仰心は微塵もなく心が病んでいる。ミサイルや原子爆弾のなかった時代には、ジュリアス・シーザーの『ガリア戦記』(Commentarii de Bello Gallico, BC 58-BC51)に綴られたルビコン川や、オルレアン乙女の信仰の力も有効に働いた。しかし、未曾有の大戦後では、羅針盤を失い、虚無感に打ち砕かれ、もはや約束の地もなく、破滅へと向かって漂っていく以外に仕方がないように見える。

ベケットが『わたしじゃない』の中では、女性の原始的で根源的な生の力に立ち向かっていったのに比べると、北村はドラマ『処女水』の中で、水槽に浮ぶ若い女の死体を描き、自然科学者のような眼差しで、デカダンに満ちた頹廢を、何時までも忍耐強く観察し続けている。

ベケットは、『プルースト』論で「心の間歇」を度外視してしまい、専らプルーストの虚無感だけを浮き彫りにして、頹廢した第一次世界大戦下の欧州を描いた。一方、プルーストは『コンブレイ』の中で、死んだ菩提樹のお茶の葉にも、生命が眠ったまま生きていることを発見し、自殺をあきらめる。そして、アイルランドの伝承で、死んだ物のなかにも生命が眠っている説話を手掛かりに、『失われた時を求めて』を描き始めるのである。

北村は、吉本隆明の『マチウ書試論』（1969）を読み感銘を受け、イエス・キリストに関心を深める。その一方で、アインシュタインの素粒子論を探求し、宇宙に関心を懐き続けた。

そうした背景の下で、北村はベケットの『ゴドーを待ちながら』に関心を懐きつつも、ベケットの『プルースト』論や『ジョイス』論には関心を持たなかった。何故なら、ベケットはプルーストやジョイスに関心があったが、北村は、ベケットの『ゴドーを待ちながら』に関心があったのだが、プルーストやジョイスにはあまり関心を持たなかったからだ。そこに、ベケットが描いた『ゴドーを待ちながら』と、北村が『ゴドーを待ちながら』に対して懐いた解釈の違いがあった。そうした状況の下で、先ず、北村は『寿歌』を描いた。それにもかかわらず、近年になって、北村は『偶然の旅行者』を描き、その中で、二人の女性、‘晦’と‘おと’が、お互いに鏡に映る虚像のように向かい合い、死んだ浄瑠璃の人形にも生命が宿るように、パラドキシカルにはあるが、「心の間歇」に触れようとして接近し始める。²⁶⁾

ベケットは『プルースト』論で「心の間歇」を自明の理として省いてしまい、『失われた時を求めて』を支配するショウペンハウエルのペシミスティックな世界を専らパラドキシカルに描いた。他方、北村は『寿歌』で虚無なる荒地を描き、次いで『北村想の宇宙 空想と科学』（1987）や『不思議想時記』（1983）で固有のアイデアを紡ぎ出し、こうして『処女水』や『偶然の旅行者』の中に描かれた闇に光明を見出そうと続けた。北村は『寿歌』以来、『処女水』を通じて、新しい命が水槽から噴き出すのをひたすら待ち続けている。ベケットは『ゴドーを待ちながら』で、未来に向かってペシミスティックなままでいる。だがベケットも北村も、パラドキシカルな意味で、時代閉塞の闇の中を突き進み、永くて暗いトンネルの中を歩み続けていることに変わりはない。ただし、ベケットは、ジョイスの弟子であり、ダダイズムの詩を知っており、マルセル・デュシャンとチェスをしたシュルレアリスムの詩人であったので、アントナン・アルトーが『演劇とその分身』に描いた狂熱的で矛盾した、焦点の合わない分身（＝ドゥーヴル）が生み出す詩的な世界にも関心があった。

ベケットは、『ゴドーを待ちながら』で、ウラディミールとエストラゴンの二人をポッツォ

とラッキーの分身として描いている。しかも、第二幕は第一幕の反復である。また、『幸せな日々』でも、第一幕と第二幕は、互いに、合わせ鏡のように、互いに同じ場面を反復している。ウィリーとウィニーもまた、第一幕と第二幕で同じ状況に居て、同じ話題を持ち出し、反復し合っている。

いっぽう、北村は『偶然の旅行者』で旅人‘晦’と待ち人‘おと’とが出会い、彼女らが鏡を覗き込むように反射し合い、話す話題も反復しているように描いた。

ベケットは、ランボーが『イリュミナシオン』に描いた洪水の後のように、大戦中の荒廃した流刑地ホロコーストを知っていた。

北村にはホロコーストの体験はないが、心が病んで監獄のような地獄は、『寿歌』の舞台が示す北村の心象風景であり、内なるホロコーストである。この心に巢食う内なるホロコーストは、ベケットが体験した現実のホロコーストと隣り合っている。いわば、北村の内なるホロコーストもベケットの現実のホロコーストも、背中合わせで、一枚の鏡を境にして互いに反射し合い、地獄の季節の詩人であることを証言している。

注

- 1) *The Collected Works of Samuel Beckett* (Grove Press Inc., 1957) p. 25.
- 2) Kazuo Ishiguro, *The Nobel Lecture, 7 December, 2017 My Twentieth Century Evening—and Other Small Breakthroughs* (faber & faber, 2015) pp. 15–16.
- 3) S. E. Gontarski, *The Intent of Undoing in Samuel Beckett's Dramatic Texts* (Indiana U P 1985) pp. 35–36. 以後、同書からの引用は頁数のみ記す。
- 4) Levi-Strauss, Claude, *La Potiere jalouse* (nrf Gallimard, 2008) p. 226. “... chez Sophocle, le serviteur qui détient la clé de l'énigme et dont, tout au long de la pièce, on connaît l'existence mais qu'on ne se décide qu'in extremis à convoquer.”
- 5) Proust, Marcel, *A La Recherche Du Temps Perdu*, I (nrf Gallimard, 1954) p. 45. “Mais à l'instant même où la gorge mêlée des miettes du gâteau toucha mon palais, je tressaillis, attentif à ce qui se passait d'extraordinaire en moi.”
- 6) Proust, Marcel, *A La Recherche Du Temps Perdu*, XIV *Le Temps Retrouve* ★ (nrf Gallimard, 1927) p. 195.
- 7) 堀真理子「改訂を重ねる『ゴドーを待ちながら』〔演出家としてのベケット〕」(藤原書店、2017) 204頁。以後、同書からの引用は頁数のみ記す。
- 8) Rimbaud, Arthur, *Les Illuminations* (La Vogue, 1886.5–1886.6), (*Oeuvres complètes*, Gallimard, 1972) p. 121.

Après le déluge

Aussitôt après que l'idée du Déluge se fut rassise,

Un lièvre s'arrêta dans les sainfoins et les clochettes mouvantes,

et dit sa prière à l'arc-en-ciel, à travers la toile de l'araignée.

Oh! les pierres précieuses qui se cachaient,

les fleurs qui regardaient déjà.

- 9) Beckett, Samuel, *Waiting for Godot* (Faber and Faber, 1979) p. 32. 以後、同書からの引用は頁数のみ記す。
- 10) 清水義和『行動する多面体馬場駿吉の輪郭をたどって』(文化書房博文社、2017) 102-104頁。
- 11) Esslin Martin, *The Theatre of the absurd*, (Penguin Books, 1970) p. 47.
- 12) *Samuel Beckett The Complete Dramatic Works* (Faber and Faber, 1990) p. 11. 以後、同書からの引用は頁数のみ記す。
- 13) David Bradby, Beckett: *Waiting for Godott* (Cambridge U. P., 2001) pp. 209, 210-211.
- 14) Pinter, Harold, *Complete Works: Four* (Grove Press, 1981) pp. 27-28. “ANNA There are some things one remembers even though they may never have happened. There are things I remember which may never have happened but as I recall them so they take place”
- 15) Brook, Peter, *Threads of Time A Memoir* (Methuen Drama, 1998) p. 220.
- 16) 堀真理子『ベケットの巡礼』(三省堂、2007) p. 106.
- 17) Kitamura, So, *Ode to Joy* Translated by Riho Mitachi (Jiritsu-Shobo, 1989) p. 1.
- 18) Schopenhauer, Arthur, *Die Welt Als Wille Und Vorstellung*, Erster Band (Hans Heinrich Tillgner-Verlag, 1924) p. 204.
- 19) 澁澤龍彦『妖精たちの森』(講談社、1980) 46頁。
- 20) 「作・北村想&演出・鹿目由紀、初顔合わせによる女性二人芝居『偶然の旅行者— The Accidental Tourist 一』名古屋で上演」この劇を執筆中に、“旅”をテーマにした理由について、北村は、「家の中に閉じこもっていると屈託してしまうから外に出たいってということで、旅モノを書いたんですよ。思いついたら早いので、1週間で書いて渡しましたね。(いつもより執筆に)時間が掛かったのは、どの歌を使おうかと探していたから。もちろんそのまま使ってるわけじゃなくて、テキトーに変えたり混ぜたりしてますし、ほんのひと言だけ引用しているものもあります。「落語はイリュージョンだ」って、立川談志の家元が言ったけど、やっぱり演劇もイリュージョンですから、あり得ない話をさもありそうな風に私の場合は書く、すると役者はそれを演じるわけです。シチュエーションは何がいいかなってということで、旅だから列車にするか駅にするかだけど、単純に駅じゃ面白くないから廃駅にしよう。廃駅なのに吹雪の中を車が走っている」と語っている。(https://spice.eplus.jp/articles/93637 2017.9.7)
- 21) Kitamura, So, *The Accidental Tourist* Translated by Yoshikazu Shimizu (Script, 2015.10.10) pp. 18-19.
- 23) *The Complete Works of William Shakespeare*, (Spring Books, 1972) p. 928. “Macbeth shall sleep no more!”
- 24) 北村想『処女水』(プロジェクト・ナビ発行、2001) p. 1.
- 25) Caillois, Roger, *Pierres*, (Poesie/Gallimard, 1970) p. 62.
- 26) 荒川修作、小林康夫、『幽霊の真理《対話集》』(水声社、2015) 238頁。荒川修作はアンリ・ベルグソンの「純粹持続」について関心を懐いた。「持続」が身体とかかわるからだという。「荒川 ベルクソンなんかがうまく言っているように、〈持続〉それ自身が場を作ったり、けしたりしていくわけですからね。それからみると、死という問題は、〈私〉がある場所から遠のくとか、消えるとか…それを見届けるためのいちばん良い道具が、この身体なんです。」

参考文献

- Beckett Samuel, *Proust* (Arche, 1960)
- Beckett Samuel, *Proust* (MINUIT, 1990)
- Beckett, Samuel, *En attendant Godot* (Les Editions de Minuit, 1952)

- Beckett, Samuel, *Waiting for Godot* (Faber and Faber, 1965)
- Beckett, Samuel, *Waiting for Godot* (Grove Press, 1954)
- Bradby, David, *Beckett: Waiting for Godot* (Cambridge U. P., 2001)
- File on Beckett* Compiled by Virginia Cooke (A Methuen Paperback, 1985)
- Francis, Doherty, *Samuel Beckett* (Hutchinson University Library, 1971)
- Gontarski, S. E., *The Intent of Undoing in Samuel Beckett's Dramatic Texts* (Indiana U P 1985)
- Kitamura, So, *Hogi-uta Ode to Joy* Translated by Riho Mitachi (Jiritsu-Shobo, 1989)
- Kitamura, So *Accidental Tourisut* Translated by Yoshikazu Shimizu (script, 2015)
- Matsuo, Bashô, *On Love and Barley* Translated from the Japanese with an introduction by Lucien (Stryk University of Hawaii Press, 1985)
- Samuel Beckett The Complete Dramatic Works* (Faber and Faber, 1990)
- The Monkey's straw raincoat and other poetry of the Basho school* Introduced and translated by Earl Miner and Hiroko Odagiri (Princeton University Press, 1981)
- Three Novels Samuel by Beckett Molloy Malone Dies The Unnamable* Translated by Patrick Bowles (Grove Press, Inc. 1965)
- Worth, Katharine, *Samuel Beckett's Theatre Life Journeys* (Oxford.U.P.,1999)
- Zurbrugg, Nicholas, *Beckett and Proust* (Colin Smythe Barnes and Noble Books, 1988)
- 北村想、『オウジ』(北宋社、1983)
- 北村想、『北村想大全 刺激』(而立書房、1983)
- 北村想、『北村想の宇宙 空想と科学』(白水社、1987)
- 北村想、『北村想の劇襲』(而立書房、1982)
- 北村想、『現代日本戯曲体系11 1978～80』(三一書房、1997)
- 北村想、『ザ・シェルター、在間ジロ、悪魔のいるクリスマス』(白水社、1984)
- 北村想、『続・北村想の劇襲』(而立書房、1982)
- 北村想、『20世紀の戯曲3 現代戯曲の変貌』(社会評論社、2005)
- 北村想、『Pick pocket』(白水社、1989)
- 北村想、『Pick pocket/2 雨の縁側』(北宋社、1992)
- 北村想、『不思議想時記』(北宋社、1983)
- 北村想、『寿歌全四曲』(白水社、2012)
- 北村想、『寿歌西へ・Fairy tale』(白水社、1985)
- 北村想、『私の青空 Hello! こちらウオーキンポスト』(而立書房、1984)
- 『サミュエル・ベケットのヴァイジョンと運動』近藤耕人編(未知谷、2005)
- 『サミュエル・ベケット—これからの批評』岡室美奈子編(水声社、2012)
- 『ベケットを見る八つの方法—批評のボーダレス』岡室美奈子編(水声社、2013)
- ベケット・サミュエル、『ジョイス論ブルースト論』高橋康也他訳(白水社、2000)
- 堀真理子、『改訂を重ねる『ゴドーを待ちながら』演出家としてのベケット』(藤原書店、2017)
- 堀真理子、『ベケット巡礼』(三省堂、2007)

フィリップ・ホエーランの詩

田 中 泰 賢

フィリップ・ホエーラン (Philip Glenn Whalen, 1923-2002) 氏はアメリカの詩人であり、同時に鈴木俊隆老師の流れを受けた曹洞禪の僧侶であった。僧名は禅心龍風 (Zenshin Ryufu) である。1966年に京都に来て1967年11月にアメリカに帰っている。そして1969年の3月末に京都に再度来て、1971年の6月にアメリカに帰っている。彼は次のような詩を書いている。

ケネス・レクスロスに敬意を表して

野生はどんなに偉大であるかと私は思いめぐらしていた
当時緑の大地があった、アレクサンドリアの城壁の外に
(あなたのおかげで『ギリシャ詩華集』を読んでいます)
上流のスカジット・バレーのように野生の国
アテネやローマの城壁に至るまで
なんと不思議なことか、これらの古い町が相変わらず活気づき
そして市民は全くアメリカとは違ったスタイルで生活しているのは
(銭湯に入るために私は紫野に歩いていかなければならない)
もしアメリカが20～30回焼き払われても
住むのに適した町になるだろうか？

1969年6月27日 (拙訳)¹⁾

ホエーランはケネス・レクスロスに捧げる詩を書いている。ホエーランがレクスロスに大き

な感化を受けたのは1950年代であった。児玉実英氏によると、「レクスロスは1955年サンフランシスコで歴史的な詩の朗読会の企画をした。レクスロスは詩の朗読会の司会を務めている。そこでフィリップ・ホエーランも詩の朗読をしている。朗読をしたのは他にアレン・ギンズバーグ、ゲイリー・スナイダー達がいた。」²⁾「詩の朗読会の後、レクスロスはホエーラン、ギンズバーグ、(ジャック)ケルアック、スナイダーを夕食に招待している」³⁾

児玉はまた次のように述べている。「レクスロスは、アメリカでは大変な大物詩人なのである。彼はモダニズムの世代と戦後のビート世代とを結ぶ偉大なかけ橋の存在だった。ビートの育ての親で、ビートたちに普遍性と国際性を与えていった人である」⁴⁾ビートの一人であったホエーランもまたレクスロスから多大の影響を受けている。「1967年、レクスロスはヨーロッパと中東各地を旅行した後、初めて日本を訪問して京都に滞在している。京都についてはスナイダー、シッド・コマン、ホエーラン達から伝え聞いていた。そして鞍馬、比叡山に登り、三十三間堂、六波羅蜜寺、大徳寺を参詣して、仏像や庭園に関心を示している。」⁵⁾

先ほどの「ケネス・レクスロスに敬意を表して」の詩の下から3行目で、ホエーランは「(銭湯に入るために私は紫野に歩いて行かなければならない)」と書いている。紫野^{むらさきの}は京都市にある地域で大徳寺、今宮神社があり、西陣織で知られている。アメリカの詩人が日本の銭湯に行く様子を詩に表しているのは記録としても貴重な資料である。レクスロスは「京都市の紫野にスナイダー夫妻が住んでいたののでそこにしばらく滞在している。紫野は大徳寺の北にあたる。彼等は3畳の小さい部屋で寝泊りしている。」⁶⁾レクスロスが京都に来た時はホエーランも京都に住んでいた。だからレクスロス、スナイダー夫妻、及びホエーラン達が紫野の銭湯に行ったことがこの詩から伺われる。

中野栄三氏は著書『入浴・銭湯の歴史』で次のように述べている。

入浴風俗、ことに温浴思想の普及発達には、仏教上の寄与が大きかった。入浴の起源は、仏像を湯で洗い浄めたことに始まる。そこで寺院の本堂のかたわらには浴殿が設けられ、これを浴室と名づけ、その住職を湯維那^{ママ}といった。略。「温室教」は釈尊が施浴の功德について説いたもので、そのことによって成仏するといった。わが国の仏教でもこれを伝え、仏教徒もそのままこれを信じて、聖僧から衆僧に至るまでの供養とし、浄財を勧進して各寺院に浴室が設けられるようになった⁷⁾。

奈良の東大寺が大浴場を開いて、一般大衆が入浴する傾向を作っていた。また光明皇后の「千人風呂」の悲願から人々の間に入浴する習慣が出来ていった⁸⁾。公衆浴場(銭湯)は「全国的にはかなり減少しており、1975年には19,161あったものが、1995年にはすでに10,000を

割こみ、9,741、そして現在6,000台である。』⁹⁾銭湯は減ってきているが、依然として市民が会話する場所である。だから銭湯は体も心も健康にする場所である。

レクスロスの翻訳した『ギリシャ詩華集』(*the Greek Anthology*)を読んだことをホーランは感謝している。レクスロスが翻訳出版した正式な書名は*Poems from the Greek Anthology* (『ギリシャ詩華集からの詩』)であり、111篇の詩が収められている。1962年に出版されている。レクスロスは序文で次のように語っている。「15歳の時、“the Apple Orchard of Sappho”をギリシャ語から翻訳して、ひどく興奮して幾夜も眠れなかった。それからこの『詩華集』とギリシャの抒情詩人たちは私にとって必携になった。あちこちさ迷った時、風呂に入る時、就寝の時、孤独で絶望の時、色々な仕事をしている時、様々な所に行った時、常にこのギリシャ『詩華集』は指導書であり、ギリシャの抒情詩人たちは指導者であり、友であった。ギリシャと中国のおかげで、生命そのものに寄り添う詩人として、また人生哲学を形成できたのである。」¹⁰⁾

レクスロスの翻訳書『ギリシャ詩華集からの詩』に次のような詩がある。

私には二つの病がございます、
一つは恋患いで、もう一つは貧乏です。
貧乏は我慢できるのですが、恋の病は耐えられません。

詠み人知らず (拙訳)¹¹⁾

上の詩の作者は不詳である。このレクスロスの訳詩集には作者不詳 (詠み人知らず) の詩が11篇見られる。次の詩はサッフォの作である。

月が沈む、
そしてプレーイアデスも。
真夜中。時がたつ。
私は一人で眠る。

サッフォ (拙訳)¹²⁾

高津春繁・斉藤忍随氏はこの詩について「客観的と言ってよい位に冷静に激情そのものを叙している点や、素直な、自然に対する美しい心が、驚くほど単純な言葉によって歌い上げられている点にある」¹³⁾と評している。呉茂一氏によれば、「彼女はクレイスと呼ぶ娘を持ち、これ

を黄金の華のように愛していたことは—その歌の句を借りれば（われに愛^{いづく}しき娘あり、金色の花にしも たぐふべき 姿せる クレイス いとほしき）恐らく事実であろう」という¹⁴⁾。

サッフォー（サッポー）はよく知られているギリシャの詩人である。呉・中村光夫氏によれば、「紀元前7、6世紀頃に、ギリシアで盛んにおこなわれた抒情詩のいちばんの特徴は、それがまず素人の歌だ、ということです。これまで首座を占めていた叙事詩、英雄歌謡は、どこまでも玄人の歌、長年それを職業として習い覚えた、職業的な弾唱詩人が、うけついだものを歌い、作りかえて歌い、つけたして歌ってきたものでした。ところが、新しく広まってきた抒情詩は、格別にそうした訓練を受けていない素人、たいていは貴族とか地主とかの、やはりある程度の文化、教養を身につけた人々であるのを必要とはしましたが、ともかく素人が自分の感じたまま思ったままを、歌にうたい上げたものでした。ここにその魅力と新鮮さと、流行の根拠とがあったわけなのです。」¹⁵⁾さらに「数あるギリシアの抒情詩人中でも、我々の耳にもっとも親しいのは、すみれの冠^{らん}をいただき、手に螺鈿^{らでん}の堅琴をもつサッポーです。サッポーは前7世紀末（前610年頃、620年とも）にレズボス島に生れ、略、その名はギリシア最高の女流詩人として、哲学者のプラトーンに第10番目のミューズとまで讃められています。略。その歌の格調の高さ、情熱の純粹さ、力強い素直さには、技巧以上の美しい魂が燃えています。」¹⁶⁾

サッフォーの詩の中にプレ（ー）イアデスという名前が登場している。「プレ（ー）イアデス（Pleiades）はアトラスとプレーイオネーとの間に生まれた7人の娘をさす。7人の娘（プレーイアデス）の父、アトラスが天を支える罰を受けた時、彼女たちは星にされたともいう。7人の娘の一人、メロペーは人間シーシュポスの妻となったのを恥じ、ために彼女だけは光が鈍く、また7人の娘の一人、エレクトラー（トロイアの祖）は、トロイア陥落に際し、悲嘆のあまり、彗星になったという。」¹⁷⁾プレアデス星団はこのギリシャ神話に由来している。日本では古来、^{すばる}昴と呼ばれている。専門家諸氏の論評・説明はこの詩の理解を助けてくれる。

レクスロスはまだ『ギリシャ詩華集穀の詩』の中でプラトーンの詩も翻訳している。

いつもの西風で響く
この松という高い冠の
下にお座りなさい
ここの飛び散る流れの傍で
あなたの臉は
パーンの笛でうっとりするでしょう。

プラトーン (拙訳)¹⁸⁾

プラトーンと言えただれでもが哲学者と思う。しかし彼は「詩人でもあった。」¹⁹⁾「プラトーンは前427年、アテナイの貴族の家庭に生まれました。当時貴族政治はずでにすたれて、民主制が確立し、政治の中心は市民議会と市民法廷に移っていました。当時の若い市民たちは「自由民」として余暇を学芸に捧げるとともに、政治にも強い関心をもっていました。」²⁰⁾「パーンは牧人と家畜の神として、上半身は毛深い人間で、有髯、額に両角を備え、下半身は山羊で、足は蹄のある姿と想像されている。彼は身軽で山野を森とわず岩山とわず自由に馳せめぐり、繁みに身をかくしてニンフたちを待ち伏せし、彼女たちや美少年を追い、失敗した時には自慰行為を行った。」²¹⁾「アルカディアのニンフ、シューリンクスがパーンに追われ、まさに捕えられんとした時、ラードン河岸で葦に身を変じた。風にそよいで音を立てる葦から、パーンはシューリンクス笛を創り出した。」²²⁾「パーンはシューリンクス笛の音楽を好み、つねに笛を携え、杖をもち、頭には松の冠を戴いていた。」²³⁾「パンの名は「汎」の意味でありますから、パンの神は、萬有と自然の人格化の象徴だと思われるようになりました。」²⁴⁾「思想の宝庫たる神話は、やがて理性と信仰の中間に固有の生命をもって生きるものとなる。ギリシア人のいつさいの考察は、さらにまた、かれらの遠い後継者の一切の考察は、神話から始まっている。悲劇詩人は題材を、抒情詩人はイメージを神話に求めている。略。さらに哲学者も、推論がその力の限界に突き当たったとき、不可知なものを解き放つ方法として神話の助けを求めることがある。こうした神話の一般化、その力の解放こそ、ギリシア文化が人間思想にもたらした基本的な寄与、おそらくはなにものにもまして本質的な寄与の一つであった、と言っても過言ではないだろう。ギリシア神話のおかげで、「神聖犯すべからざるもの」に対する恐怖感は失われ、精神のあらゆる領域に亘る考察の道が拓かれ、詩は叡智となりえたのである。」²⁵⁾

先ほど取り上げたレクスロス訳のプラトーンの詩のなかに松という言葉がある。ホエーランの次の詩にも松という言葉がある。

共感

日光を浴びている数本の松の木

モーリス・ラヴェル全集 (拙訳)²⁶⁾

この「共感」という題名の詩は2行である。俳句や川柳のような短さである。因みにホエーランはまた「戦争」と題する詩を書いている。この詩も2行である²⁷⁾。どちらも2行の詩とい

うパターンである。さて「共感」と題する詩の中にラヴェルという音楽家が登場している。江藤正顕氏によれば「父親がスイス系の時計職人兼実業家であり、母親がバスク人であったことは、少なからずラヴェルの音楽に作用しているだろう。と同時に、20世紀の音楽の行方をも作用している」²⁸⁾という。江藤は更にこう論じている。

ラヴェルの「ピアノ協奏曲ト長調」の第三楽章は、先の伊福部昭が映画『ゴジラ』（1954年作、内容はビキニ環礁^{マダ}に付近に眠っていた古代生物が水爆実験の放射能により巨大化し、日本を襲うという怪獣もの）のテーマ曲に援用していることは言うまでもない。日本の作曲家の伊福部にとっても、ラヴェルの音楽はそれほど遠い存在ではなかった。ゴジラ音楽の間接的な産みの親はラヴェルであった、ということである。世界の音楽潮流に敏感に反応し、同時に民族の血も忘れないという点で、伊福部昭の音楽の現代性とアイヌ民族的要素とは洋の東西で呼応しあっている。フランスとバスク、ヤマトとアイヌという関係である²⁹⁾。

ラヴェルという音楽家に日本の作曲家、伊福部が呼応している。伊福部がラヴェルに共感している。ラヴェルの音楽が伊福部によりこだまになって響いている。第一次世界大戦に従軍経験のあるラヴェルの音楽は「ゴジラ」のテーマ曲にこだましているのではないか。第二次世界大戦を経験したホーランはラヴェルにこだまして「共感」という詩を書いたと思う。科学者であり僧侶である江角弘道師は2010年出版の著書で詩人金子みすゞ氏の詩「こだまでしょうか」を例えに「こだまする」ことについて述べている。

こだまは、こちらが言ったことを受け取って、そのまま返してくれる。だから「こだまする」とは、こちらの存在を丸ごと受け入れて返してくれる行為であり、返ってくる時は、半分の大きさになって戻ってくる。私たち同士、または私たちと自然の間は、互いにこだますることによって成立している。私たちが子どもの時、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんに、けがをして「痛い」といったら「痛いね」といってくれました。痛い時に「痛いね」といってくれたおかげで、私の痛さは半分になったのです。さらに、「痛いの、痛いの、飛んでいけ!」とこだましてくれ、こころに添ってくれたおかげで、私の痛さはいつの間にか消えて行ったのです。最近では、若い人たちが理由もなく「殺すのは誰でもよかった」と言って、理不尽に人を殺す事件が増えています。なぜそんな行為をしたかと問われると「父親が自分を受け入れてくれなかった」とか、「会社で、自分を受け入れてもらえなかった」など、だれも自分を理解してくれず、受け入れてもらえない孤独のただ中で犯行に及んでいるようです。昔のように「こだまする」大人が少なくなっているのでしょうか³⁰⁾。

江角は「こだま」の重要性をわかりやすく説いている。ノーベル文学賞を受賞したオクタビオ・パス氏は「詩人たちの口を通じて「もうひとつの声」が語り始める—強調しておくが、書くのではなく、「語る」のだ。それは悲劇の詩人の声と道化の声であり、孤独なメランコリーの声と祝祭の声、高笑いと溜息、恋人たちの抱擁の声と髑髏を前にしたハムレットの声、沈黙と喧騒の声、愚かな智慧と賢明な狂気、そして寝室の秘められた囁きと広場の群衆のざわめきである。この声に耳を傾けることは、時代そのものに耳を傾けることだ。それは過ぎ去るが、あとで透明なこだまとなって戻るのである。」³¹⁾と述べている。パスもまた「こだま」について述べている。洋の東西を問わない。2018年6月18日午前7時58分ごろ、大阪府北部で震度6弱の地震が発生した。登校途中の小学校4年生の女子生徒が小学校のブロック塀の倒壊によって亡くなった。中日新聞の社説はブロック塀倒壊について論じている。その一節を引用する。「3年前に防災専門家が警告したのに、市教育委員会と学校は結果として生かせなかった。直ちに撤去したり、改修したりしていれば、と思ひ返すのもくやしい。」³²⁾真摯に耳を傾け、こだまますということが如何に大切であるかということを感じさせる言葉である。

ホエーランの師匠的存在であったレクスロスは「1967年、インドに旅した時、偉大なるメキシコの詩人パスに会っている。パスは当時、メキシコのインド大使をしていた。二人は夕食をしながら二人の共通する中国及び日本についても会話している。レクスロス家族は豪華ホテルには泊らず、インドの貧困、死者を運ぶ手押し車の見える所に泊っている。」³³⁾レクスロスとパスがお互いに共感して、こだまになって響きあった様子を伺うことができる。パスが後に偉大な詩人になったのもレクスロスとの出会いが大きかったと思う。

ホエーランは「ダルマカヤ」という短い詩を書いている。

ダルマカヤ

本物は常に一つの模倣したもの
禅堂の裏側の新しい梅の花を思いやりなさい

1981年1月20日 (拙訳)³⁴⁾

上のホエーランの詩「ダルマカヤ」の一行目を「本物は常に一つの模倣したもの」と訳した。原文は“The Real thing is always an imitation”である。この中の“an imitation”(イミテーション)は「模倣したもの」である。王向華氏は模倣について次のように論じている。

創造性がオリジナリティであるという考えは、文化的に、そして歴史的につくられた特異な

概念である。この考えによると、オリジナルとしてつくられていないすべてのものは、否定的な価値を帯びた贗物になってしまう。このクリエイションとイミテーションという対立は、西洋と非西洋の対立に呼応した純粋物と不純物の対立が仮定されることによってはじめて安逸の場所を占めることが可能となる。そしてここから、西洋の自民族中心主義がもたらされたのだ³⁵⁾。

王は論文の中で「イミテーション」と「クリエイション」という対立を西洋と非西洋の対立に呼応させている。この論点に立てば、ホエーランの詩「本物は常に一つの模倣したもの」は私たちに問題提起をしていると読むこともできる。また一方、ホエーランは日本の曹洞宗の禅をアメリカで学び、アメリカで禅寺の僧侶として一生を捧げた詩人であった。アメリカ人としての彼は日本の禅を模倣したのであるが、模倣に止まらずアメリカ禅もまた本物であると確信していたのではないか。こうして読むと今度は逆に日本の自民族中心主義に注意しなければならないと覚える。

板倉聖宣氏は自然科学者の立場から模倣と創造について興味深いことを述べている。彼はこう述べている。「もともと科学における創造というものは、模倣を前提になりたつものである。創造は他人の研究成果の模倣の上になつて行なわれるというだけでなく、創造は他の人々が模倣するにたるような新しい知識の提供をめざすものだからである。だから、科学が発展するためには、新しいものを発見する人々以上に、そのオリジナリティーを認め、それを積極的に評価、模倣し、広めるような人々がたくさんいなければならない。そういう意味で、創造というのは社会的・集団的な営みなのである。」³⁶⁾この発言は傾聴するに値する言葉である。山田奨治編『模倣と創造のダイナミズム』（勉誠出版、2003）を拝読すると模倣の大切さは自然科学に止まらずあらゆる分野においてもあてはまることがわかる。板倉はさらに次のように述べている。

模倣するに値するものは、権威あるものだけではない。日本の教育は画一化しているので、いつも権威を一つしか認めたがらないが、幸い社会にはいろんな権威が争っている。そのどれを模倣するに値するものとして選びとるか、また、その模倣をいかに生かすか、それは自分自身で決めなければならない。それは独創的な仕事といえよう。そればかりではない。まだどこからもまったく権威として認められていない友人・知人のオリジナルな考えを高く評価し、それを模倣することは、さらに創造的なことといえるであろう。他人からは認められていないものの価値を高く認めること、それは独創とっていいのである³⁷⁾。

板倉は「ほんらい、模倣そのものは決して恥すべきことではないのである。ところが日本では、模倣があまりにもいやしめられ、創造ばかりがもてはやされるものだから、多くの人々は、模倣を創造と気どるようになる。そこで盗作が横行するというわけである」³⁸⁾と述べている。彼は模倣を軽視することは問題であると警告している。

上の詩の2行目「禅堂の裏側の新しい梅の花を思いやりなさい」の原文は“Consider new plum blossoms behind the zendō”となっている。原文にある“plum blossoms”を「梅の花」と訳したけれど、『ジーニアス英和大辞典（大修館、2001）では1番目の意味はセイヨウスモモ、プラムで、[俗用的に]ウメ《正しくはume, Japanese apricot》となっている。「セイヨウスモモ」と訳すことも可能であるが、ホーランは道元禅師の法を継ぐ僧侶であるから、『正法眼蔵』の「梅花」の巻を知っていたと思われる。その「梅花」の巻で道元は「自己の魔がやってきて、梅花は瞿曇の眼睛でないと思われるならば、思量りなさい、このほかに何法（どんな法）で梅花よりも（仏の）眼睛であるにちがいないものを挙げてきたならば、（仏の）眼睛と見ようか。その時もこの（雪裏の梅花の）ほかに眼睛を求めるならば、どんな時でも（仏と出逢いながら）対面不相識であるはずであり、相逢未拈出（互いに出逢っていないながら拈り出すことがない）であるはずであるからである。今日（という日）は私個人の今日ではなく、大家の（多くの人とともにある）今日である。直ちに梅花の眼睛を開明するはずであり、このほかさらに求めることはやめなさい」³⁹⁾と述べている。だからこの詩を「禅堂の裏側の新しい梅の花を思いやりなさい」と訳したのである。

牧野富太郎氏は「梅の英語としては天下晴れての Japanese Apricot を用うべきである。それとも梅の学名は Prunus Mume であるから、略、いっそ簡単に Mume とするかな。梅の花 Mume Blossoms あまり見苦しい字面じゃないね。」⁴⁰⁾と提案している。その理由を牧野は次のように述べている。「元来「プラム」とはなんだね。それは西洋種の李のことだよ。日本の李とはよく似たものだが、梅とは違う。学問上では両方とも同じ属だけれどもまったく別のものだ。なおむつかしく言えば「プラム」は Prunus domestica L. という学名のもので、梅は Prunus Mume Sieb. et Zucc. という学名のものだ。略。「プラム」は西洋李のことだから梅を「プラム」というのはちょうど“Dog”（犬）をさして猫だとすまし込んでいるのと同じことだ。」⁴¹⁾と説明している。ホーランの禅堂の裏側に咲いている梅の花はやはり“mume blossoms”或いは“ume blossoms”としたほうが適切であろうか。

牧野は「梅が上古にわが邦に渡ったときは、たぶん種類は一種か二種かきわめて少なかったことが想像せられる。略。それが今日ではわが日本で四百種内外の品種数に達しているところをもってみれば、その多数の変り品すなわち園芸の品種はわが那でできたものである。」⁴²⁾最初日本は中国から梅を取り入れた時はまだ模倣の段階であったが、月日がたつにつれて日本独自

の品種を改良していったのは創造であり、本物ということになる。吉田雅夫氏によると「梅干しは、日本独特の食品として重要であり、現在でも消費の中心になっている。しかし、近年では梅酒、飲料などの需要もふえている」⁴³⁾という。中国から梅を取り入れた時点では模倣的であったが、日本で「梅干し」という独自の物を創り出した。本物である。

上の詩の題名「ダルマカヤ」は日本語では「法身」と訳されている。横井雄峯氏は『日英禪語辞典』で「法身」を“The Law-body”と英訳している。さらに“The absolute nature of the Buddha-mind, which transcends personality and is identical with the Truth. It is considered to be the highest aspect of the threefold body of the Buddha”⁴⁴⁾(仏心の完全な姿であり、自我を越えている。真理と等しい。仏陀の三身(法身・報身・応身)の最高の相であると考えられている)と説明している。姉崎正治氏は法身仏について次のように説明している。

因果現象の法は変易の法にして諸行は無常なるも、而もその無常現象は各その基く所の永遠の根底ありて三世に亘れる法なり。此故に、此如きの法は又諸仏成道の因にして、一切の変易を超えたる法体真理なり、而して現在の仏陀その人はこの真理の一顕現に外ならず。現身仏は即ち法身仏なり。基督教の言語にていへば、神の言葉なるロゴスは即ち永遠の真理、この真理ロゴスの現はれが即ち世界万象にして、その神の実在真体を天父として吾等に示したる基督は即ち「肉となれるロゴス」なり。此に至れば仏の法は即ち妙法にして、妙法は即ち久遠の仏身、而して現身の仏はこの法身仏陀の具象権化なり。現身仏に対する信仰が進で法身仏の考察となるは、本来自爾の理然るべき者あるなり⁴⁵⁾。

そして姉崎は「仏教は具象的に一人の仏陀に於て、その法の活きたる事実を得、活きたる法、活きたる梵涅槃を信ずるを得、此故に又この現身仏陀の信仰に基きて、その中に、又三世諸仏に貫通し一切衆生に遍満せる法身仏を得たり」⁴⁶⁾と語っている。姉崎はパーリ語仏典と漢訳仏典を併記しながら説明をしている。仏教への真摯な態度を教えられた。

末木文美士氏は中国の禪を代表する語録の一つ『碧巖録』の研究でも有名である。末木は論文「『碧巖録』における法身説」で「『碧巖録』の著者である圓悟は法身のような実体の存在を認めないわけではないが、それを積極的に主張するというわけではなく、むしろそれをさらに乗り越えて進むことを要求している」⁴⁷⁾と述べている。末木の論文によって禪の立場からの法身説を知ることができる。

末木は別の著書で次のように語っている。

『碧巖録』によって集約される禪の核心は、このようにまさに言葉の問題です。前日も言い

ましたように、禅というのは「不立文字」で、言葉がなくなってしまうのではない。言葉というのは単なる手段ではない。徹頭徹尾、言葉で言い表せということを、どこまでも突きつめていく。そういう思想なのです。ただ、その言葉が日常の言葉ではない、あるいは、日常の言葉を破壊していく、そのような言葉なのです⁴⁸⁾。

末木は同書で道元の言語論についても述べている。

道元もまたあくまで言語にこだわり、言語で表現することを求めます。しかし、その言語の性格が、『碧巖録』などの公案の言語と全く異なっています。これが非常に面白いです。略。道元は、あくまで仏祖の言葉は「念慮の語句」、意味を持った言葉だということです。「語句の念慮を透脱する」というのは、言葉の意味を徹底することによって、それを超えていく。あくまで意味を持った言葉として理解して、しかも、それを完全に理解しきることを極限化するのです。だから、ナンセンスな言葉と考えるはいけない、ということです。もっとも、この「透脱する」というところがポイントで、決して日常的な意味言語のレベルに留まっていてよいというわけではありません。言葉の意味を徹底して考え抜くことによって、その底まで突き抜けることが要求されているのです。それはまたそれで、決して容易なことではありません⁴⁹⁾。

上の詩を書いたホーランの禅を理解するのに末木の道元の言語論は貴重な論説である。ホーランにとって詩はあくまで意味を持った言葉として理解されうる極限化された表現である。決してナンセンスな言語ではない。詩の題名である「ダルマカヤ」（法身）は仏祖の教えを模倣していくことによって本物の法身仏になっていくことを示している。

注

- 1) Philip Whalen, *The Collected Poems of Philip Whalen*. Edited by Michael Rothenberg (Wesleyan University Press, 2007), p. 650.
- 2) Sanehide Kodama, *American Poetry and Japanese Culture* (Archon Books, 1984), p. 132 及び p. 155 参照。
- 3) Linda Hamalian (W. W. Norton & Company, 1991), *A Life of Kenneth Rexroth*, p. 246.
- 4) 田中泰賢『Buddha 英語 文化 田中泰賢選集 2』（あるむ、2017）、8 頁。
- 5) Sanehide Kodama, *American Poetry and Japanese Culture*, p. 133.
- 6) Linda Hamalian, *A Life of Kenneth Rexroth*, p. 324.
- 7) 中野栄三『入浴・銭湯の歴史』（雄山閣、1984）、22-24 頁。中野栄三氏の説明のなかに「温室教（経）」という経典の名前が紹介されている。正式には「仏説温室洗浴衆僧経」という。このお経を昭和 9 年に日本

語に訳した清水谷恭順氏は「仏説温室洗浴衆僧経解題」で「本経の大意は、大医王者域が仏に向い、温室を設けて、仏及び衆僧を洗浴し、垢穢を消除し、衆生をして長夜清浄ならしめんことを願う。仏、これを嘉し、広くその福報を説き、併せてそれが洗浴の方法を教えたもうたものである」と述べている。(『国訳一切経 経集部14』大東出版社、1934(昭和9)):409-413頁。(原文は旧かなづかいで書かれているが、ここでは一部現代かなづかいに改めて引用した)。

- 8) 同上、24-27頁参照。樽井由紀氏は論文「仏教寺院の温泉、共同浴への影響について」(『佛教学 歴史学部論集』第7号、2017年:97-110)において、今まで見落とされていた仏教寺院による施浴(寺湯)の果たした役割を詳しく論じている。樽井氏は「近年まで存在した寺湯や、農村部の各種の講によって営まれた共同浴は、中世・近世を通じて密接に関連しており、温泉もその例外ではないことが明らかになった。これが有力寺社の多い京都や奈良に特徴的なことであるのか、それとももっと広がりを持つのか、さらに今後の調査と研究が必要である」(109頁)と結んでいる。氏の更なる研究が期待される。
- 9) 木藤紳一朗「公衆浴場をめぐる法的諸問題」『京都学園大学法文学部二十周年記念論文集 転換期の法と文化』(法律文化社、2008:154-180)、170頁。
- 10) Kenneth Rexroth, "Foreword." *Poems from the Greek Anthology*, Translated, with a Foreword, by Kenneth Rexroth with drawings by Geraldine Sakall (The University of Michigan Press, 1975).
- 11) 同上、p. 8.
- 12) 同上、p. 100.
- 13) 高津春繁・斉藤忍随『ギリシア・ローマ古典文学案内』(岩波書店、1966)、47頁。
- 14) 呉茂一訳『増補ギリシア抒情詩選』(岩波書店、1959)、28頁、42頁。(原文は旧かなづかいで書かれているが、ここでは一部現代かなづかいに改めて引用した)。ちなみに川野美智子氏はロレンス・ダレル作の詩劇『サッフォー』(大阪教育図書、2013)を訳している。川野は「訳者あとがき」で次のように述べている。「ピッタコスの子に育てられ、長く母と別れていた娘クレイス (Kleis) がついにサッフォーの許に戻ってきたとき、サッフォーは娘に言う。「沈黙に耳を傾けなさい、娘よ、あなたには聞こえる？」略。沈黙に含まれるすべて—それはサッフォーの耐えた苦しみも悲しみも、クレイスの感じた寂しさも孤独も、男たちの戦いも犠牲も、罪も赦しも、殺戮も恩讐も、すべてを含むのである。二人だけの沈黙の中に、クレイスの泣き声だけが忍び音を洩らすとき、サッフォーは静かに語る。泣きなさい、かわいいクレイス、あなたは私たち二人のために泣くのよ。もし充分に涙があれば、全世界のために泣きなさい。そして世界に泣くべき涙がもうないと思うずっと後にはあなた自身のために泣きなさい。」(274-275頁)
- 15) 呉茂一・中村光夫『ギリシア・ラテンの文学』(新潮社、1962)、62-63頁。
- 16) 同上、67頁。
- 17) 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』(岩波書店、1967)、220-221頁。
- 18) Kenneth Rexroth, *Poems from the Greek Anthology*, p. 96. 日本語に訳したテキスト(レクスロスの英訳)は次の通りである。“Sit down under the high crown / Of this pine, always sounding / In the steady West Wind, and / Here by the splashing current / Pan’s pipe will entrance your / Spellbound eyelids. Plato” それに対して W. R. Paton の英訳は次のようになっている。“Sit down by this high-foliaged vocal pine that / quivers in the constant western breeze, and beside / my plashing stream Pan’s pipe shall bring slumber to / thy charmed eyelids.” (*The Greek Anthology with an English translation by W. R. Paton In Five Volumes V* (Harvard University Press, 1979), p. 165.)
- 19) 呉茂一・中村光夫『ギリシア・ラテンの文学』、95頁。
- 20) 同上、94頁。

- 21) 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』、198頁。
- 22) 同上、134頁。
- 23) 同上、198頁。
- 24) プルフィンチ『ギリシア・ローマ神話上』野上弥生子訳（岩波書店、1966）、204頁。
- 25) ピエール・グリマル『ギリシア神話』高津春繁訳（白水社、1956）、12-13頁。
- 26) Philip Whalen, *The Collected Poems of Philip Whalen*, p. 494.
- 27) 田中泰賢「既成価値を問うアメリカの詩人たち—ホエーラン、スナイダー、ギンズバーグ」『愛知学院大学教養部紀要』第65巻第3号、(2018: 15-33)、26-27参照。
- 28) 江藤正顕「モーリス・ラヴェルと近代社会：二つのピアノ協奏曲をめぐる」『Comparatio』九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会、15巻、(2011: 89-100)、96頁。
- 29) 同上、98-99頁。
- 30) 江角弘道『いのちの発見～宗教と科学の間で～』（財団法人 空外記念館、2010）、51-52頁。
- 31) オクタビオ・パス「詩、神話、革命」野谷文昭訳、『中央公論』文芸特集、夏季号、(1991: 44-51)、51頁。
- 32) 「社説 ブロック塀倒壊 無責任が犠牲を生んだ」『中日新聞』2018年（平成30年）6月23日（土曜日）
- 33) Linda Hamalian, *A Life of Kenneth Rexroth*, p. 324.
- 34) Philip Whalen, *The Collected Poems of Philip Whalen*, p. 774.
- 35) 王向華「模倣の創造—ヤオハンの事例を中心に—」山田奨治編『模倣と創造のダイナミズム』（勉誠出版、2003: 155-180）、156頁。
- 36) 板倉聖宣『^{いたくらきよのぶ}増補版』模倣と創造—科学・教育における研究の作法—（仮説社、1992）、12頁。
- 37) 同上、72-73頁。
- 38) 同上、12頁。
- 39) 水野弥穂子訳註『正法眼蔵 5 原文対照現代語訳・道元禅師全集⑤』（春秋社、2009）、235頁。^{くどん・ゴータマ}瞿曇は お釈迦様が出家する前の本姓。お釈迦様をさす。
- 40) 牧野富太郎『牧野富太郎選集第二巻』（東京美術、1980）、121-122頁。
- 41) 同上、120-121頁。
- 42) 同上、114頁。
- 43) 『朝日百科 植物の世界 5 種子植物 双子葉類』全15巻（朝日新聞社、1997）、5-88頁。
- 44) 横井雄峯 (Yūhō Yokoi), *The Zen Buddhist Dictionary* (山喜房佛書林、1991)、227頁。昭和7年に「仏説法身経」を日本語に訳した田島德音氏は「仏説法身経解題」で「法身仏は報身と法身とを合している」(260頁)と述べている。(『国訳一切経 経集部15』大東出版社、1932(昭和7): 259-265頁)。また「百千頌大集経地藏菩薩請問法身讃」(日本語訳者: 矢吹慶輝氏、昭和11年)に「応に菩薩を礼すべからずとはこれを甚だ悪説と為す。菩薩に親しまずんばその法身を生ぜず」(264-265頁)と説いている。また同書に「天尊の妙法鈴は 普遍く聞くことを得しめ この振声に由るが故に 煩惱の塵を除落す」(270頁)と説いている。(『国訳一切経 大集部5』大東出版社、1936(昭和11): 259-271頁)。(原文は旧かなづかいで書かれているが、ここでは一部現代かなづかいに改めて引用した)。
- 45) 姉崎正治『現身仏と法身仏』(有朋館、1904)、251頁。
- 46) 同上、257頁。
- 47) 末木文美士「『碧巖録』における法身説」『東隆眞博士古稀記念論集 禅の真理と実践』(春秋社、2005:

459-473)、471頁。因みに『碧巖録』について末木は次のように説明している。「中国の宋の時代に、雪竇重顕(980-1052)という雲門宗の禅僧が、当時行なわれていた公案の中から重要なものを100選びだし—これを本則と呼びますが—、それに対して頌と言って、それぞれの公案に対する自分の受け止め方を詩の形にしたものを付けました。それを『雪竇頌古』とか『頌古百則』とか呼びます。それに圓悟克勤(1063-1135)という臨済宗の人が垂示と著語と評唱を付けました。垂示というのは、イントロダクションで、各則のはじめに、その則を読む心構えを述べたものです。著語というのは、本則と頌のほとんど一文ごとにコメントを付けたもので、なかなか読みにくい厄介なものです。評唱は、本則と頌に対する注釈や解説的なことがらを述べたもので、本書の中ではもっとも散文的な、わかりやすい箇所です。このように、本書は最終的には圓悟克勤という人の著作ということになるわけですが、きわめて重層的な成立過程と複雑な構造を持っており、これが本書の読み方を難しくしている一つの原因です。」末木文美士『「碧巖録」を読む』(岩波書店、1998)、5頁。

48) 末木文美士『「碧巖録」を読む』、103頁。

49) 同上、108-113頁。抜粋引用。

※拙稿の中で紹介した諸氏のお名前は、初回のみ姓名に敬称をつけ、次に使用する時は姓のみの略称としました。ママは原文のままという意味です。

アメリカからのメッセージ

——ロアルド・ホフマンとフィリップ・ホエーランの詩——

田 中 泰 賢

ロアルド・ホフマン氏 (Roald Hoffmann, 1937-) はアメリカの大学で教育・研究をしている科学者で、1981年度のノーベル化学賞を福井謙一氏 (1918-1998) とともに受賞している。彼はまた文学者でもある。2016年11月3日、彼の自伝的戯曲『これはあなたのもの』(*Something That Belongs to You*) が名古屋工業大学で上演された。翻訳者は川島慶子氏 (名古屋工業大学教授) である。この戯曲はホフマン氏が幼いころ第2次世界大戦中に強制収容所に入れられ、その後、知人の屋根裏に隠れ住んだ辛い経験から生まれた作品である¹⁾。フィリップ・ホエーラン氏 (Philip Whalen, 1923-2002) はアメリカの詩人で、禅僧でもあった。2人の間に直接の関係は無かったけれど、2人とも第2次世界大戦を経験して、戦争の詩を書いている。彼らは日本文化にも関心を持っていることが彼らの詩集から窺える。そういった観点から彼らの詩の一端を紹介した。

キーワード：文楽 (ホフマン)、戦争 (ホフマン及びホエーラン)

ホフマン氏は詩人でもある。氏は数冊の詩集を出版している。その1冊に『メタミクト状態』(*The Metamict State*) という題名の詩集がある。この詩集の題名がいかにも科学者らしい性質を醸し出している。メタミクト状態とは『ブリタニカ国際大百科事典』によると「ウラン、トリウムなどの放射性元素を多く含む鉱物が放射能によってその結晶格子が破壊されて、X線に対しても可視光線に対してもガラスのような非晶質とみなされる状態がある。この状態をメタミクト化作用という」とのことである。この科学的な題名の詩集に「日本から三つの詩」と題して、二番目に「文楽」という詩が書かれている。

文楽

3人の黒い頭巾をかぶった人形を操る人たち、
1体の繊細で多色な操り人形。
1人は左手を動かす
1人は着物を動かす、隠れた足があるように見せかけながら
1人は残り全部を動かす
傍^{ゆか}らの床で
浄瑠璃を語る太夫は死を受け入れ、復讐をたくらむ、
戦の物語に声を張り上げ、唸る。
三味線弾きの左側に座る。

3人の黒い頭巾をかぶった人たち、一体の操り人形。
3人の動き、操り人形の自由。
 バリ島の影絵芝居とも違う、指人形でもなく、あるいは
 マリオネットでもない。
(人形の)操作が上手になされることによって(人形遣いの)姿が消える。

私の夢の避難所という劇場で
親愛なる淑女、あなたもまた操り人形。
あなたの父のうねった皺の顔と
 彼の苦悩をあなたは支えている。
夫の性の悩みに動じない態度にあなたは力づけられ、
師匠の激励によってあなたの覆面がふさわしいものになってくる。
あなたを最真にする人たちにはあなたは本当に信じられる人。
彼らは美、優雅さ、洒落を理解し
つかの間の情熱を込めた瞬間
魅了されてしまう
黒衣を着た人形遣いたちには目にも留めず²⁾。

1連目の「戦」という言葉、2連目の「自由」という言葉、3連目の「避難所」という言葉はホフマン氏自身が第2次世界大戦の時、迫害から逃れるために屋根裏部屋で誰にも見つから

ないようにひっそりと暮らした幼少の時の思いが重ね合わさっているように思われる。そして「自由」をどれほど待ち望んでいたのかという気持ちがこの「文楽」の詩に込められている。

森谷裕美子氏は文楽について次のように述べておられる。

文楽とは、人形浄瑠璃のことである。義太夫節（浄瑠璃）に合わせて人形を操る芝居である。江戸時代、大阪（近世の表記では大坂）で生まれた芸能であり、現在でも大阪や東京を中心に公演が行われている。

文楽は、義太夫節を語る太夫、三味線弾き、人形を操る人形遣いで主に成り立っている。舞台上に登場するのは、太夫、三味線弾き、人形遣いである。

その他、観客は直接目にはしないが、陰で笛や太鼓などを演奏する囃子、人形の首^{かしら}や手足を作る人、人形の髪を結び上げる床山^{とこやま}と言われる人、人形の衣装を調達する人がいる。また舞台上で使う小道具や、舞台装置などの大道具、照明、音響等の担当者も必要である。これらの人々の協力のもと、一つの舞台が作り上げられる³⁾。

森谷裕美子氏はわかりやすく文楽について説明しているので、私たちも文楽の概略について理解することが出来る。

上の詩の最初の行は「3人の黒い頭巾をかぶり、人形を操る人たち」と表現されている。「文楽の人形は、頭・顔にあたるかしらと右手を操作する「主遣い」、左手を操作する「左遣い」、足を動かす「足遣い」の3人で1体の人形を操る⁴⁾という。上から6行目は「傍らの床で」と表現されている。「床とは太夫と三味線が義太夫節を演奏するところ。客席に向かって張り出した、小さな廻り舞台ようになっており、クルリと廻ることで演奏者が交替する⁵⁾という。1連目の最終行「三味線弾きの左側に座る」とあるように、客席から見ると太夫は三味線弾きの左側に座って浄瑠璃を語る。しかし演奏者側から見れば逆になる。

2連目の最終行は「(人形の)操作が上手になされることによって(人形遣いの)姿が消える」と表現されている。「人形遣いの修業は、どうしても12、3才頃からでないと、旨くない。まず劇場内外の習慣や舞台の寸法を呑み込んで、小道具の出し入れから、浄瑠璃の文句を覚えて、次に足を持って主遣いにつれて匍い廻るのだが、この小道具の出し入れ、後見の間が3年、足遣いが3年、左手が3年、合わせて一人前の人形遣いになるのがざっと10年ということになる。」⁶⁾文楽の人形を、あたかも人間であるかのように自由に操作できるようになるには長い期間の修業があって初めて一人前の人形遣いになることがわかる。

「人形遣いは黒い着付をきている。自分の顔さえ黒い頭巾で覆っているのが本当である。黒は無を意味して人形のみを活かすように出来ている。主遣いが高い下駄をはくのは人形を一定

の高さに差し上げているためと、足遣いの操作を自由にするためである。吉田玉五郎⁷⁾

「人形は眉が大きく上下させられるし、目は大きいし、^{ひやくにちかつら}百日鬘でも自由に大ゆすり出来るし手足は自由な形にきまれるのでさわやかな見得が出来る所以である⁸⁾」という。また浜村米蔵氏は「一体人間が自分自身で表現しないで、人形劇のような人形を操る演劇を造りだしたのには、凡そ二つの理由があると思う。一つはくどいようだが古代のカタシロとかヒトガタのような人形に寄せる信仰である。他の一つは簡単に動かしたり持ち運びができるからである⁹⁾」と語っている。上のホフマンの詩「文楽」の2連目の2行に「操り人形の自由」(the puppet's free)と表現されているのは人形によってより自由な動作や感情を表すことができることを仄めかしている。しかしそれだけでなくホフマン氏自身が幼いころ強制収容所という場所で不自由な時代を過ごしたと無縁ではない言葉がこの「自由」という響きではないだろうか。

昭和52年3月に「人間国宝」の指定を受けた初代玉男氏は、「文楽の人形は、物語を演じたり音楽に合わせて踊ったりするだけではない。人形遣い、太夫、三味線弾きが一緒になって劇的、美的経験を創造し、人間の感情の深い奥のほうを観客と一緒にうかがうものだ¹⁰⁾」と言う。人形遣いが黒衣を着ることによって人形を浮かび上がらせる。そして演じる側と観客が一体になって浄瑠璃の世界に入っていく。この詩行はそういう状況を意味していると思われる。

文楽から離れて、「浄瑠璃」という言葉の側面について紹介してみたい。それも筆者が住んでいる愛知県という限られた空間からの視点である。

高橋秀雄・蒲生郷昭氏は浄瑠璃について次のように述べている。「浄瑠璃の起源は明らかではないが、『平家物語』を語って演奏する「平曲」に続く新語り物音楽が、「浄瑠璃」という名で総称されている。おそらくは新しい時代にふさわしい語り物の音楽の曲目の中で、もっとも人気を呼んでもはやされたのが「十二段草子」とも呼ばれる『浄瑠璃姫物語』であったところから、浄瑠璃という名称が新語り物音楽の総称となったのであろう¹¹⁾」という。古典音曲の浄瑠璃は、本作の流行によってつけられた名前である。その内容は、「諸本によって内容は異なるが、もっとも古い形の山崎美成旧蔵写本によってみると、三河鳳来寺側で作られた薬師如来の申し子浄瑠璃姫の本地譚で、姫の恋の苦難と成仏(五輪碎^{ごりんくだき})が描かれ、薬師の利生を宣唱する御曹司蘇生(吹上)も重要な要素である。東海道筋に多く残る遊女と貴公子の悲恋という話の型の上のつた^{やはぎ}矢作の遊女浄瑠璃と御曹司の悲恋の伝説が、その下敷きになっていると考えられる」(『日本古典文学大辞典』〈信多純一〉)という¹²⁾。

浄瑠璃姫物語には三河の鳳来寺が重要な要素であることがわかる。日本の薬師如来信仰は観音菩薩信仰とともに広く全国に浸透している。山田知子氏は「鳳来寺と三河・尾張の薬師信仰」と題して論じている。三河・尾張とは現在の愛知県である。山田氏は「三河・尾張地方には薬師をまつっている寺院やお堂が多い。ことに鳳来寺をはじめとする山岳寺院や臨海地の寺

院には、古代に創建されたと伝えられるものが多くみられる。略。薬師が山の神霊や海の神霊、あるいは死霊の鎮まりいます霊地霊場にまつられたということは、すなわち薬師がこれらの霊の象徴であったからである。したがって薬師は山神や海の神のもつ祟り易い性格と同時に、まつられることによって大きな恩寵をもたらすという二面的性格を有するものであり、こうした薬師を対象として悔過修行が行われ衆病消除や天下安全が祈願されてきたのである¹³⁾と述べている。山田氏によると、愛知県は山側に位置する鳳来寺等のみならず海側の寺院にも薬師信仰が広がって今日にいたっている。薬師如来は慈悲深い仏であるけれどそれ以上に怠けやすい生活を励ましてくれる厳しい仏でもあった。

山田知子氏によると、『浄瑠璃姫物語』は、『浄瑠璃御前物語』ともいわれ、室町時代の末頃より座頭などによって語られている「語り物」の一つで、庶民の間で最も愛好されたところから語り物のことを「浄瑠璃」と称するようになったと伝えられている。その内容は、三河（愛知県）の国司兼高と矢作の長者（遊女）夫婦が、鳳来寺峯の薬師に百日間参籠して祈願し授かった美しい娘「浄瑠璃」と、金売吉次に伴われて東国に下る途中矢作に宿した「牛若丸」との恋物語で、のちに十二段に分けられて『十二段草子』と呼ばれるようになった。これが大衆化して絵巻形式の読本もつくられ、さらに近松門左衛門作、竹本義太夫の『十二段』に発展したとみられている。¹⁴⁾

浄瑠璃と薬師如来の関係であるが、「薬師如来の詳しい名号は、「みょうごう 東方とうほう浄瑠璃じょうるり浄土じょうど教主きょうしゅ薬師やくし如来」といい、東の方、じゅうごうがしゅ十恒河沙（ガンジス河の砂の数の十倍）の仏の国を過ぎた所に、浄瑠璃という世界があり、そこの教主である。略。薬師さまは修行中の菩薩の時、十二の願を立てている¹⁵⁾という。薬師如来は別名、浄瑠璃のことであることがわかる。『浄瑠璃姫物語』は『十二段草子』とも呼ばれるが、この十二という数字は浄瑠璃薬師如来の大願の十二と偶然同じとは言い切れないと思う。作者は薬師瑠璃光如来の十二の大願を知っていた可能性が高い。

『浄瑠璃十二段草子』に「なむやくし十二しん、ねかはくは、身つからに、なんしにても、をなこにても、こたねを一人、さつけ給へ¹⁶⁾とある。兼高夫妻が浄瑠璃薬師如来に男子であれ、女子であれ、子供を授けてくださるようお願いしている。上で述べられている「なむやくし十二しん」は南無薬師十二神将のことである。十二神将は薬師如来の眷属で、薬師如来の尊称を忘れない人々の護法神である。「なむやくし十二しん」とは浄瑠璃薬師如来と十二神将に帰依しますという意味になる。ちなみに飯塚幸謙老師は「薬師瑠璃光如来本願功德経」（大唐三蔵法師玄奘詔により訳し奉る）の十二の大願を簡潔にまとめておられるので引用させていただく。

「薬師瑠璃光如来本願功德経」(大唐三蔵法師玄奘詔により訳し奉る)

- 第一願 悟れる者の智徳を得させたい。
- 第二願 身体清浄、心情潔白にさせたい。
- 第三願 貧しさ故、欲しい欲しいと貪せぬ環境にさせたい。
- 第四願 偏見により、常に誤解する(邪道) ことのないようにさせたい。
- 第五願 遵法の心(法律のみならず、天地の理)を持たせたい。
- 第六願 物心身体貧困のため、人格不正常的のないよう、正したい。
- 第七願 病気になり、看護も、医療も、ベッドも、薬も欠けぬよう、治してやりたい。
- 第八願 煩惱に邪魔されず、まっすぐに修行が出来、男女の区別なく悟らせたい。
- 第九願 不正の仲間から立ち直らせたい。
- 第十願 受刑中の悪人も立ち直らせたい。
- 第十一願 身辺の逆境に遇って、むさぼりの悪に走ることをないようにさせたい。
- 第十二願 衣住に不足し、寒熱やむさぼりの悪に悩まされぬようにさせたい¹⁷⁾。

上の十二願全てが現代社会の課題であることがわかる。浄瑠璃が人々の娯楽であったろうし、今もそうである。しかし浄瑠璃が恋愛の問題を扱う物語であれ、戦争の問題を扱う物語であれ、或いは日常茶飯事の事件の問題を扱う物語等であれ、単に娯楽にとどまることなく上の十二願から見ても浄瑠璃の物語を人生の問題提起と受け止めていた人たちもいたのではないだろうか。

愛知県岡崎市の浄瑠璃姫の遺跡を拝登した。誓願寺(岡崎市矢作町馬場4)は名古屋鉄道(名鉄)の矢作橋駅で下車し、新国道を渡り、旧国道を右に折れると山門がある。山門の横に十王堂がある。境内に入ると右手に浄瑠璃姫のお墓と兼高長者のお墓等が安置されている。その前に設置されている掲示板には次のように記されている。

浄瑠璃姫の墓 中央宝篋印塔
兼高長者の墓 左端五輪塔
浄瑠璃姫縁起

浄瑠璃姫は年老いて子どものなかった矢作の里の長者兼高夫婦が日頃から信仰していた鳳来寺の薬師瑠璃光如来にお願いして授かったといわれる。そのため、浄瑠璃姫と名づけられ、たいそう美しく育った。1174年3月、牛若丸(源義経)は東北地方の藤原秀衡をたよって旅を続ける途中、矢作の里を訪れ、兼高長者の家に宿をとった。長者の家に11日ほど世話になっていたが、ある日ふと一室から静かに聞こえてきた美しい琴の音にひか

れ、持っていた笛で吹き合わせたことからいつしか二人の間に愛がめばえていた。しかし、義経は東北へ旅立たねばならず、形見として名笛「薄墨」^{うすずみ}を姫に授け、矢作の里を去った。姫は、笛を大切にしていたが、義経を想う心は日ごとに募るばかりで、ついに後を追いかけた。しかし、女の足ではとうてい追いつけず、添うに添われぬ恋に悲しみのあまり、管生川^{すごう}に身を投げて短い人生を終えた。時に、姫は17歳であったという。兼高長者はその遺体を当誓願寺に埋葬した。十王堂を建て、義経と浄瑠璃姫の木像を造り、「名笛・薄墨」と姫の鏡を安置し、冥福を祈った。浄瑠璃姫の墓や供養塔は岡崎公園の北口や成就院にもあり、人々にその悲しい恋をしをばせてくれる。

寄贈・文責 ポーイスカウト岡崎第五団

やはりこの掲示板にも夫婦が子どもを授かるように鳳来寺の薬師瑠璃光如来に願をかけていることが書かれている。東方浄瑠璃薬師如来の信仰が当時盛んであったことがうかがわれる。

名鉄の東岡崎駅を下車して乙川というきれいな河の近くのお寺、成就院を拝登した。お寺の中の墓地の一角に「浄瑠璃姫之墓」と書かれた黒石が石に嵌め込まれているお墓が安置されている。「浄瑠璃姫の墓」とある石版は、ここが姫の墓所ですという看板である。その後ろにある石塔の真ん中にある供養塔が姫のお墓として守られてきている。

中野政樹氏によると「釈迦が生涯を終えると、弟子たちはインドの風習の一つである火葬によって荼毘に附した。経説によると、荼毘のあと、舍利を八国に等分し、各国に塔をたてたという。このような仏舍利を釈迦の身舍利として尊崇するばかりでなく、また釈迦が在世中に所用した衣・鉢・杖なども舍利に準ずるとして尊崇した」¹⁸⁾という。また「仏塔は釈迦の遺骨などを納めた墳墓をいうが、その後、仏伝・説話に基づき、その故事にちなんだ場所に記念碑としても建てられた。」¹⁹⁾そして「死体遺棄の風習を持つわが国に、仏教が意味づけを与えることによって生まれたお墓は、故人の浄土における成仏を願って追善供養のために建立された。奈良時代に墓上に仏塔や層塔を建てることを行なわれ、平安時代に入ると多宝塔・板塔婆、鎌倉時代から五輪塔・宝篋印塔^{ほうきょういん}・板碑^{いたび}が建立されていく。」²⁰⁾お釈迦様の分骨、お釈迦様の故事にちなんだ物、場所にも塔が建てられたということが一般の人々のお墓にも及んでいる。従って供養塔は複数あってもおかしくない。種々の因縁でお墓や供養塔が複数まつられていることはその地域の人々の信仰心が篤いということを物語っている。九百年あまりたった今日、浄瑠璃が生きている。アメリカの大学で化学を教えておられるホフマン氏の詩「文楽」でそのことを教えられた。

次の詩もロアルド・ホフマンの作品「1943年6月」という詩の第1連である。

1943年6月

ほかの人たちは久しぶりに戻って来た
戦争が終わって、だからお父さん
あなたも死んではいないと思いたかった。
彼らが町の中であなたを連行した時、
多分あなたは抜け出て、走って逃げた。
彼らは誰かを撃った
ある日
あなたは帰って来たような気がする、
やせ衰えて、破れた服を着て、あなたが隠れた
沼地の話しをしてくれた。
ある日あなたは帰って来たような気がする、
ロシアから長い道のりを歩いて²¹⁾。

ここに取り上げたのは彼の詩集『記憶効果』(*Memory Effects*, 1999) からである。この詩は彼の詩集『触媒』(*Catalista*, 2002) にも取められている。彼はこの詩で戦争について書いている。第1連では語り手はお父さんの帰りを待ち望んでいる様子を描写している。しかし 結局お父さんは帰ってこないことが次の第2連ではっきりする。お母さんに何が起きたのか尋ねたのだ。第3連で語り手はお父さんの夢を見たことが綴られる。語り手は不思議な力が湧いてお父さんを助けようとした夢であった。最終連ではその夢もかなわなかったことが語られる。

“I closed the shutters”という表現がある。“shutters”は複数形になっている。雨戸を閉めた或いはシャッターを下ろすと解するが、まぶたを閉じたとも読める。お父さんが倒れるのを広場で人々に見させないように、お父さんがお母さんの名前を二度叫ぶのを人々に聞かせないように雨戸を閉め、まぶたを閉じた。浮かんでくる人々の顔から目をそむけた。

この「1943年6月」という詩は2つの詩集で一部分異なる。1999年に出版された詩集『記憶効果』では1連の上から6～7行目で“*They'd shot somebody else / One day*”²²⁾と表現されているが、2002年の詩集『触媒』(*Catalista*) では“*They'd shot another / in your place. One day*”²³⁾となっている。また『記憶効果』では1連の下から4行目で“*gaunt, in torn clothes, to tell stories*”²⁴⁾となっているが、『触媒』では“*gaunt, threadbare, to tell stories*”²⁵⁾となっている。

戦争の悲しさをホフマンは詩で謳っている。ホフマンが幼い時、彼の家族はナチスからの迫害から逃れるために屋根裏部屋でひっそりと暮らしていた。彼の詩集『孤立波』(*Soliton*,

2002) の中の詩「野原の光景」(Fields of Vision) で「屋根裏部屋から少年は／子供たちが遊ぶのをじっと見る」²⁶⁾と書かれている。じっと見るは原文では“watched”である。第2次世界大戦中、ナチスの迫害から身を守るために少年時代、屋根裏部屋で過ごしたホフマンは外で遊んでいる少年たちのように自分も思う存分遊びたい気持ちがここに表れている。彼の戯曲『これはあなたのもの』(Something That Belongs to You, 2015) でも「屋根裏部屋で、私は子供たちが遊ぶのをじっと見た」²⁷⁾と書かれている。子供心にどんなにか外で思いっきり遊びたかったのか。しかしそれが戦争によって断ち切られている。口惜しかったことであろう。

この『これはあなたのもの』で「屋根裏部屋ではあまり明るくなかったので、窓の近くで本を読んだ。昼間だけ」²⁸⁾とある。読書をするのに窓からの光だけが頼りとなった様子が描かれている。彼の詩集『割れ目と杖』(Gaps and Verges) の詩「伸縮する印」(Stretch Marks)²⁹⁾に“Dachau”という言葉がある。ダッハウ (Dachau) はナチスが南ドイツのミュンヘン近くに作ったユダヤ人のための強制収容所であった。1945年4月29日のダッハウ強制収容所解放後にアメリカ陸軍によって収容所職員たち及びドイツ人戦争捕虜たちが虐殺された。同詩集に「二人の父」(Two fathers) という詩がある。ホフマンの父は戦争のもと、「強制収容所から集団脱走を主導したかどで殺された。」³⁰⁾「彼の母親が再婚した相手もまた戦争で妻を亡くしていた。ホフマンが8歳の時であった。」³¹⁾

アメリカの詩人であったフィリップ・ホエーラン (Philip Whalen) も「ダイアン・ディ・ブリマに捧げる戦争の詩」と題する戦争についての詩を書いている。その中で次のような一節がある。

私が読みたかったのは R. H. ブライスによって翻訳された大切なことだけ、
一万八千ポンドのナパーム弾とヘリコプター、
私は何故戦争に負け続けるのか。戦争をうっかり信用しているのか³²⁾。

この詩が書かれた1966年はベトナム戦争が激化している。上の詩の2行目にあるように大量のナパーム弾によって無差別攻撃が行なわれ、多くのベトナムの市民が犠牲になっている。1963年6月にはベトナムの仏教僧、ティック・クアン・デュック師は植民地政策を押し進めるフランスとそれを後押しするアメリカを背後にした南ベトナム政府、ゴ・ジン・ジェム政権の仏教徒への抑圧に抗議して、焼身自殺をしている。松岡完氏は次のように述べている。

1963年5月8日。釈迦生誕の記念日に、ベトナム仏教の中心地である古都フエで、仏教徒が仏教旗を掲げ、宗教弾圧に抗議するデモを行った。政府軍の発砲で少なくとも9人が

死亡、14人が負傷する。略。仏教徒は国民のほぼ8～9割を占めていた。僧侶は民衆の利益の代弁者、ジェムにいわせれば反政府分子の先鋒だった。共産主義体制の北ベトナムは、国民の団結を優先する必要から宗教弾圧を自制するだけの賢明さ、ないし巧妙さを備えていた。しかしジェムは、国教扱いのカトリック教会には旗の掲揚を認めても、仏教寺院には許そうとしなかった。政府は発砲事件をベトコンの仕業だとうそぶいた。ティック・クアン・デュックら7人の僧侶があいついで抗議の焼身自殺を行い、世界に衝撃を与えた³³⁾。

2012年8月30日の *The Japan Times* に「サイゴンの僧侶焼身自殺報告者ブラウン氏亡くなる」(“Saigon burning monk reporter Brown dies”)³⁴⁾ という記事が掲載されている。当時 AP 通信記者であったマルコム・ブラウン氏 (Malcolm Browne, 1931-2012) は1963年6月にこの仏教僧、ティック・クアン・デュック師の焼身自殺の写真を世界に発信して世界の人々にベトナム戦争で何が行なわれているかという問題提起をしたのである。同紙はこの記事の中で「マルコム・ブラウン氏が1998年のインタビューで当時を思い起こし、この焼身自殺の直後、大きなデモが仏教僧だけにとどまることなく、サイゴンの多くの一般市民の支持を得るようになった³⁵⁾と伝えている。「1958年から1971年まで農業指導員などとして南ベトナムに住み、ベトナムの詩の英訳まで手掛けたあるアメリカ人は帰国直前にベトナムの知人に向かって、アメリカの友人に何か伝えたいことはないかと質問したところ、そのベトナム人はアメリカ人ご愛用の侮蔑的スラングの類を並べあげ、われわれは *slants* (東洋人) でも、*slopes* (東洋人) でも、*gooks* (東洋人) でも、*dinks* (東洋人) でもなく、「人間なのだ！」と言いつつ放ったという。」³⁶⁾ このエピソードは当時のベトナムの人たちが如何にアメリカ人を嫌っていたかを物語っているし、戦争によってお互いが強い不信感に陥るかを私たちは知ることが出来る。

アメリカ合衆国首都ワシントン D.C. にベトナム戦争戦没者慰霊碑が1982年に建立されている。「(これは) ベトナム帰還兵の組織の尽力によるものであった。略。壁面には、ベトナム戦争で命を落とした5万8千132人の男女の名前が、死亡した日時の順に刻み込まれ、その最初と最後には碑文が彫られている。」³⁷⁾ この戦没者慰霊碑からベトナム戦争によって多くのアメリカ人も尊い命を落としていることがわかる。「帰還兵たちは、しばしば夜、群衆の足が遠のいた時間帯になって、記念碑のまわりに現れるのである。ここは、帰還兵たちがかれらの亡くなった友人たちに話しかけることのできる場所、瞑想の場所、彼らのアイデンティティに特別な意味を与える場所である。二人の帰還兵は、この場所でピストル自殺をしている。」³⁸⁾

三百万人余りの亡くなったベトナムの人々、六万人近くの亡くなったアメリカ人、枯れ葉剤によって今なお苦しむベトナムの人々、戦争によって心身が傷つけられたアメリカの人々を見

ると戦争の悲惨さを痛感する。それをホエーランは上の短い詩で表現しようとしている。ホエーランは主語が複数形の「私たちは何故戦争に負け続けるのか」という文章にせず、「私は何故戦争に負け続けるのか」というように主語を「私」という単数形にしているのは注目するところである。単数形にすることによって私という存在が戦争という狂気に向けてしまうもどかしさ、苦しさ、無力感を表している。

今、引用したこの詩の一節の1行目に R. H. ブライスという名前がある。R. H. ブライス (1898-1964) の研究で有名な吉村侑久代氏によると、「ブライスは66歳の時、1964 (昭和39) 年10月28日、脳腫瘍で逝去。11月1日、学習院旧図書館で葬儀。鎌倉 東慶寺山内、鈴木大拙・夫人ベアトリス女史の近くに埋葬。法名、不来子古道照心居士³⁹⁾とある。吉村侑久代氏は同書で次のように述べておられる。

第四高等学校の英語教師として金沢にいたブライスは、1941年12月8日、開戦と同時に石川県警察に保護され、広坂 (現在の中警察署) の建物内に抑留される。3月、係官に付き添われて神戸に赴き、「交戦国民間人抑留所」となった神戸市北野町のイースタン・ロッジ・ホテルに収容された。富子夫人は1ヶ月前に生まれたばかりの長女・春海とともに神戸に移り、元町に家を借りた。抑留所の週一回の面会には、ブライスの好物の干瓢の海苔巻きずしを作り、必要な書物や文房具をせっせと運んだ。何年続くか判らぬ戦争である。この状況をよく堪え忍び、ブライスに著述を続けさせた富子夫人の内助の功は計りしれぬほど大きい。ブライスはこの抑留所で彼の代表的な著書である『俳句』4巻の原稿を書き上げている。さらにロバート・エトケンによると、*Senryu, Buddhist Sermons on Christian* もこの時期であったようだ⁴⁰⁾。

戦争によって収容所生活を余儀なくさせられてしまう。そして家族が離れ離れになって暮らしていく状態は精神的にも辛いものであったろう。それにも拘わらず俳句、川柳の執筆を続けていったという。「後にブライスを師と仰ぐようになるロバート・エトケンはグアム島から連行されて、日本での抑留生活を経験していた。神戸の収容所で、エトケンは出版されたばかりの『禅と英文学』に出会い、むさぼるように読んだという。」⁴¹⁾捕虜となってグアム島から日本の収容所で過ごしたロバート・エトケンは戦争中に北星堂から出版されたブライスの著書『禅と英文学』(1942年12月)を読み、その後本格的に禅を修行していった。「神戸の抑留所で、人々を虫けら同然に扱う監視人を見て、ブライスは「ここにいる監視人のような人間によるアメリカ領土の占領を君は想像できるかね」とエトケンに言ったという。」⁴²⁾ホフマンもブライスも収容所の生活を送っている。ホエーランは2行の短い「戦争」という詩も書いている⁴³⁾。こ

れはホエーラン自身が第2次世界大戦に兵隊として戦争に参加した記憶の上に、ベトナム戦争について書いた詩である。

上の詩の1行目「私が読みたかったのは R. H. ブライスによって翻訳された大切なことだけ」からホエーランもまた R. H. ブライスの著書を愛読していたことがわかる。「ブライスは、自分の「内なる運命」として、ワーズワースの持つアニミズムを自己の文学的アイデンティティとし、菜食主義に至り、俳句の道に入る。そして、大拙の禅書を通して禅に出会い、川柳に行きついた⁴⁴⁾と吉村氏は述べる。そして吉村氏が直接対談したブライスの長女である春海ブライス氏は「父 (R. H. ブライス) は川柳が本当に好きだった。川柳のことを健康を保つための栄養と言っていた⁴⁵⁾と語っている。この対談は R. H. ブライスのことを知る貴重な資料である。ホエーランは愛読した R. H. ブライスの著書からブライスの温かい人柄を学び、ベトナム戦争で苦しんだ様子を簡潔に表したのが上の詩である。

ホエーランはこの詩をダイアン・ディ・プリマ (Diane di Prima, 1934-) に捧げている。彼女はビート世代の詩人である。彼女は「アレン・ギンズバーグの詩集『吠える』を愛読し、アレン・ギンズバーグは彼女たちに新境地を開かせてくれた⁴⁶⁾と語っている。彼女の家族はイタリア系アメリカ人でニューヨーク市ブルックリンに住んでいて、彼女はそこで生まれた。「ダイアン・ディ・プリマの11歳の誕生日、1945年8月6日、家族は父が仕事から帰るのを待っていた。父は遅くまで仕事をしていた。父は手に新聞を握りしめて帰って来た。その新聞の見出しは大きくて、半頁より大きかった。父の顔は陰うつで、憂うつな様子であった。家に入っても帽子をかぶったままであった。部屋はシーンとなった。誕生ケーキが食卓の上にあったが、ろうそくは火が点されていなかった。父は新聞をコーヒー・テーブルに投げつけて「我々は負けた」と語った。突然大変な事態になった。「どうして私たちは負けたの」「何が起きたの」「戦争は終わったの」皆がいっせいに口を開いた。それは爆弾であった。私たちの誰もそれが何であるか知らなかった。それは広島。広島が何処にあるか私たちの誰も知らなかった。父は言った「私たちが今何をなそうとも、私たちは負けた⁴⁷⁾」。彼女は後にカリフォルニアに移住してアラン・マルローと結婚する。1962年11月30日、仏教寺院、ソーコージ (桑港寺) で鈴木俊隆老師の導師のもとで結婚式が行なわれた。鈴木俊隆老師は二人の結婚式の導師をする前に2人に会って、導師を務めることは2人に対して、2人が精神的に幸せであることの責任があることを語っている。数日後、鈴木俊隆老師は弟子のリチャード・ベイカーに導師を引き受ける旨を伝えている⁴⁸⁾。ホエーランはリチャード・ベイカー師の弟子になっている。

ホエーランは「接心 エピグラム」(The Sesshin Epigram) と題する2行の短い詩を書いている。

撮心 エピグラム

目が予言できない事を
手は予見する

1973年8月8-9日⁴⁹⁾

撮心せっしんは撮心とも書く。撮はおさめること、整うこと、安んじ、静謐の姿、かたちを持つことである。だから撮心とは心を散ぜしめざることという。禅寺では一定期間、他の行事をやめてひたすら坐禅修行することを撮心という。または撮心と表現する。ホエーランは原文も“Sesshin”と書いている。ホエーラン自身が禅僧であったので撮心の意味を理解していたけれど、一般の読者には意味が分りかねるであろう。にもかかわらず“Sesshin”と書くところに風刺的な態度が見える。エピグラムとは短い風刺詩、寸鉄語、警句といった意味がある。「目が予言できないことを」は原文では“what the eye / Cannot foretell”と表現しており、「手は予見する」は原文では“The hand foresees”と表現している。主語“the eye”（目）に対して動詞“foretell”（予言する）が使われ、主語“the hand”（手）に対して動詞“foresee”（予見する）が使われているのは面白く、ユーモアを感じる。

ホエーランはまた「エピグラム、自身を」(Epigram, upon Himself) と題する2行の短い詩を書いている。

エピグラム、自身を

人々は私の全ての短所を許してくれる
しかし私が太っていることをひどく嫌う⁵⁰⁾。

詩人のホエーランは太っているために嫌われた。『デブの帝国—いかにしてアメリカは肥満大国となったか』の著者、グレッグ・クライツァー氏も肥満のため「デブ」という暴言を受けた事を著書の中で語っている。氏は肥満を擁護する研究者の論や、それとは異なる研究者の論、様々な角度からの論を取り上げて、詳細に検討している。そしてクライツァー氏は次のように述べている。

5年ほど前、アメリカで最も急速な発展を遂げている町、テキサス州サンアントニオの学校は、厄介な問題に直面していた。健康に関する地元の非営利団体の新たな調査によっ

て、学校関係者が実のある改革をしないかぎり、この地区の50の小学校に在籍する児童のうち3千人が、じきに生活習慣による2型糖尿病になるとわかったのだ。主たる原因は太りすぎ「デブ」であるという⁵¹⁾。

クライッター氏は「この学校区が従来のアメリカの慢性的な病気に対する態度から脱して積極的に問題を解決しようとした」⁵²⁾と述べている。氏は太りすぎ「肥満」と貧困と運動不足を結びつけている。そしてそれは生活習慣病につながりやすいと語っている。ディードリ・パレット氏は「アメリカは世界でもっとも「肥満」が蔓延している国であり、他の国々もその後を追いはじめている」⁵³⁾と警鐘を鳴らしている。そして氏は「人間が看板に気づいて動物に餌をやらなくなれば、動物園の動物たちはマシュマロやポテトチップスのことを考えることはなくなり、喜んで草を食べるようになるだろう。私たち人間だってそうなのだ」⁵⁴⁾と結んでいる。現代の医学研究は肥満の諸原因、肥満と糖尿病の関係、肥満を防ぐ方法の研究等がますます進み、私たちに朗報をもたらすであろう。肥満が個人だけの責任とは言い切れないことになるかもしれない。詩人のホエーランは自らが太っていることを短い詩に書いて問題提起をしている。ホフマンもまた戦争の詩を書いて問題提起をしている。そういった意味で二人の書いた詩も又貴重な作品だと思う。

注

- 1) 田中泰賢『Buddha 英語 文化 田中泰賢選集 全5巻』(あるむ、2017)、第2巻、「序文」、9頁。
- 2) Roald Hoffmann, *The Metamict State*, Cover illustration by A.R. Ammons (University of Central Florida Press, 1987), p. 22. 田中泰賢訳。
- 3) 森谷裕美子氏から筆者あての書簡(2018年11月23日付け)。
- 4) 『文楽入門—鑑賞のしおり—』国立文楽劇場営業課編集(独立行政法人日本芸術文化振興会、2018)、6頁。
- 5) 同上、8頁。
- 6) 浜村米蔵・木下順二編『歌舞伎・能・文楽 その新しい見方』(平凡社、1954)、205頁。
- 7) 『文楽』編集解説:大西重孝・吉永季雄、写真:三村幸一、装釘:澤野井信夫(文楽座出版部、1956)、24頁。
- 8) 同上、30頁。
- 9) 浜村米蔵・木下順二編『歌舞伎・能・文楽 その新しい見方』、208頁。
- 10) バーバラ C. 足立『文楽の人びと』ジェイソン G. チョウイ訳(講談社インターナショナル、1978)、33頁。
- 11) 岸辺成雄・平野健次・増田正造・高橋秀雄・服部幸雄・蒲生郷昭監修『音と映像による日本古典芸能大系 総論編』解説書編集・制作、平凡社(日本ビクター、1992)、76頁。
- 12) 『釈迦・薬師信仰便覧』(斎々坊、2000)、189頁。

- 13) 山田知子「鳳来寺と三河・尾張の薬師信仰」『民衆宗教史叢書 第十二巻 薬師信仰』五来重編（雄山閣出版、1986）、117-118頁。
- 14) 同上、87-88頁。
- 15) 飯塚幸謙『信ずる心 薬師如来 病苦離脱へ』（集英社、1989）、18-19頁。
- 16) 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成 第七（全十六巻）』（角川書店、1987）、378頁。
- 17) 飯塚幸謙『薬師如来』、67頁。
- 18) 中野政樹「舍利とその容器」『新版仏教考古学講座 第三巻 塔・塔婆』監修 石田茂作（雄山閣、1976）、245頁。
- 19) 監修 古田紹欽／金岡秀友／鎌田茂雄／藤井正雄『佛教大事典』（小学館、1988）、864頁。
- 20) 同上、786頁。
- 21) Roald Hoffmann, *Memory Effects* (Calhoun Press, 1999), p. 12. 田中泰賢訳。
- 22) *Memory Effects*, p. 12.
- 23) Roald Hoffmann, *Catalista* (Huerga & Fierro editors, 2002), p. 50.
- 24) *Memory Effects*, p. 12.
- 25) *Catalista*, p. 50.
- 26) Roald Hoffmann, *Soliton* (Truman State University Press, 2002), p. 79.
- 27) Roald Hoffmann, *Something That Belongs To You* (Dos Madres Press, 2015), p. 12. & p. 55.
- 28) *Something That Belongs To You*, p. 16.
- 29) Roald Hoffmann, *Gaps and Verges* (University of Central Florida Press, 1990), pp. 31-32.
- 30) *Gaps and Verges*, p. 22.
- 31) 同上引用文中。
- 32) Philip Whalen, *The Collected Poems of Philip Whalen* (Wesleyan University Press, 2007), p. 500. 田中泰賢訳。
- 33) 松岡完^{まつおかひろし}『ベトナム戦争 誤算と誤解の戦場』（中央公論社、2001）、171-172頁。
- 34) *The Japan Times*, Thursday, August 30, 2012. New York AP.
- 35) 同上引用文中。
- 36) 吉沢南「ベトナム戦争」『岩波講座日本通史 第20巻 現代1』編集委員 朝尾直弘 網野善彦 石井進 鹿野政直 早川庄八 安丸良夫（岩波書店、1995）、352頁。
- 37) マリタ・スターケン (Marita Sturken) 『アメリカという記憶 ベトナム戦争、エイズ、記念碑的表象』 (*Tangled Memories: The Vietnam War, the AIDS Epidemic, and the Politics of Remembering*) 訳者 岩崎稔・杉山茂・千田有紀・高橋明史・平山陽洋（未来社、2004）、88頁。
- 38) 同上、117頁。
- 39) 吉村侑久代『イギリス生まれの日本文学研究者 R. H. ブライス (Reginald Horace Blyth) 研究』（林檎屋文庫、2017）、182頁。
- 40) 同上、65頁。
- 41) 吉村侑久代『R. H. ブライスの生涯 禅と俳句を愛して』（同朋舎出版、1996）、103頁。
- 42) 吉村侑久代『イギリス生まれの日本文学研究者 R. H. ブライス (Reginald Horace Blyth) 研究』61頁。
- 43) 田中泰賢「既成価値を問うアメリカの詩人たち—ホエーラン、スナイダー、ギンズバーガー」『愛知学院大学教養部紀要』第65巻第3号（2018）：15-33参照。
- 44) 吉村侑久代『イギリス生まれの日本文学研究者 R. H. ブライス (Reginald Horace Blyth) 研究』118頁。

- 45) 同上、127頁。
- 46) Diane di Prima, *Memoirs of A beatnik* (Penguin Books, 1988), pp. 176–177.
- 47) Diane di Prima, *Recollections of My Life as a Woman* (Penguin Books, 2001), p. 50.
- 48) 同上、p. 320.
- 49) Philip Whalen, *The Collected Poems of Philip Whalen*, p. 695. 田中泰賢訳。
- 50) 同上、p. 704. 田中泰賢訳。
- 51) グレッグ・クライツァー (Greg Critser) 『デブの帝国 Fat Land いかにしてアメリカは肥満大国となったのか』 (*How Americans Became the Fattest People in the World*) 竹迫仁子^{たけさきひとこ}訳 (バジリコ、2003)、224–225頁。
- 52) 同上、225–226頁。
- 53) ディードリ・バレット (Deirdre Barrett) 『加速する肥満—なぜ太ってはダメなのか』 (*Waistland*) 小野木明恵訳 (NTT 出版、2010)、216頁。
- 54) 同上、250頁。

有安道人『弾僧侶妻帯論』と

有安老人『対客一話』について

——付録『対客一話』翻刻資料——

菅原研州

一、はじめに

本論は、明治時代当時に、僧侶の結婚を強く批判した有安道人こと西有穆山『弾僧侶妻帯論』と、新出資料である有安老人『対客一話』を比較検討することで、後者の著者を確定することを目的とした研究である。

二、有安道人『弾僧侶妻帯論』について

『弾僧侶妻帯論』については、かつての研究において「聖道門の出身者に違いないが、その出身・経歴は未だ探索し得ない⁽¹⁾」とある通り、著者不明とされていたが、その後において曹洞宗の明治期を代表する宗乗家であった西有穆山（一八二一〜一九一〇、

有安道人『弾僧侶妻帯論』と有安老人『対客一話』について

大本山總持寺独住第三世）であるとされようになった。⁽²⁾

改めて本書についての概要をまとめておきたい。

・構成 『弾僧侶妻帯論』『弾僧侶妻帯論二 説夢編（以下、「第二説夢編」と略記）』の二部構成

・執筆時期 前編の奥書に「明治十二年三月五日」とあるが、これは摺筆時期であろう。後編の「第二説夢編」については、前編部分末尾の記載から既に構想があり、前編とそれほど時を置かずに示されたものか

・刊行時期 不明だが、執筆時期とそれほど離れている印象はなく、先に挙げた日付をそのまま刊行時期とする見解もある

・出版社 前編末尾の欄外に「成文社刊行」とあるため、当時、東京府東京市京橋区内に所在した出版社から刊行されたものと思われる。ただし、奥付等は無く、著者等による自費出版である可能性が指摘される⁽⁴⁾

・聞書者 夏目義順による⁽⁵⁾

本書の著者が近年まで定められなかった理由として、特定の宗派について言及したのではなく、明治一〇年代の日本仏教界全般についての憂慮を示したものが挙げられよう。西有の史伝を紹介する文献でも、法嗣の岸澤惟安（一八六五〜一九五五）による『先師西有穆山和尚』では本書が紹介されておらず、後年のRichard Jaffeによる指摘を経て、『西有穆山禪師——没後百年を迎えて』でようやく記載されたが、『弾僧侶妻帯論』と名前を間違えて紹介されるほどであり、十分な検討などを経た推

定とはいえない印象であった。なお、最新の研究成果を含む『西有穆山という生き方』では書写本の存在も指摘されており、その結果、閲書した者についても、西有の側近であった夏目義順であると判明している。文面からは著者不明であるにも関わらず、西有が著者の名前に挙がった理由は、上記のような経緯がある。

本書には、「有安道人」という著者名（講演者名）が記されている。そして、西有には「有安老人」という呼称もあった。明治一六年（一八八三）に、現在の静岡県掛川市内に所在する曹洞宗長松院で西有が講義した『正法眼蔵開講備忘』は、「有安老人人口演」と書かれている⁽⁶⁾。他にも明治二六年に鴻盟社から刊行された『安心訣（一名帰依三宝訣）』も「有安老人人口演」とある。「有安道人」と「有安老人」という呼称のわずかな相違は特段問題にはならなかったといえよう。

先ほど指摘した通り、本書は特定の宗派に依拠して書かれてはいない。そのため、かつての研究で「聖道門の出身者」と推定された理由は、本書の論調が基本、僧侶の結婚を批判する内容であったということ、以下の数節が影響していると思われる。

僧侶ノ妻帯ハ法滅ノ相ニノ淫風ノ盛ナルハ亡國ノ兆ナリ故
ニ予對人屬之ヲ誠ム間々之ヲ信スルモノアリト雖モ守ルモノ
殆ト稀ナリタマ、歎息スルニ當テ或問テ曰ク天地陰陽アリ
人之二法リテ男女夫婦アリ是自然ノ理ナリ何ントシテカ佛是
れヲ戒ルヤ夫レ天理ニ背クモノハ廢リ天理ニ合フモノハ興ル
故ニ清僧宗ハ日ニ衰ヘテ妻帯宗ハ月ニ盛ナルニアラスヤ⁽⁷⁾

本書の特徴として、僧侶のあり方を持戒者としての「清僧宗」と、破戒者としての「妻帯宗」とに二分化して見つつ、前者を肯定していることが挙げられる。管見の限り、この区分は本書特有の言い回しであり、かつてであれば「聖道門・浄土門」などと記載されたことであろう。しかし、明治五年に、僧侶の結婚について政府が関与しないことを表明した「太政官布告」第一三三号（通称「肉食妻帯令」）の文言を承けた時代だからこそ、許された表現であったと思われる。そのため、執筆時期などについて、明治一二年という記載と矛盾しないことが理解出来る。

然ラハ則神佛ヲ敬信スルモノハ清僧ヲ愛スヘシ清僧ノ多キハ
神佛ノ喜フ所ナリ神佛喜フ時ハ守護モ亦深ルベシ故ニ道フヘ
シ清僧ノ多キハ護國人ノ多キ也近クハ徳川氏ノ世ヲ見テ知ル
ヘシ創業ノ始ハ僧侶ノ規則正ク中口漸ク弛ミ末ニ至テ大ニ亂
ル而ノ水戸公ノ廢佛論ヲ醸スニ至ル是レ清僧ノ盛衰ト徳川ノ
頽廢ト相隨逐スルカ如キニアラスヤ君若シ愛國ノ心アラハ清
僧宗ヲ翼助シテ持戒ノ者日ニ益々多キコトヲ祈ルヘシ破戒ノ
者ヲ愛スルコト勿レ⁽⁸⁾

更に、清僧宗の僧侶が多い方が良いとする理由について、国家護持に関わると指摘している。その身近な例として、徳川幕府の様子を指摘し、約二五〇年ほどの間で、当初は幕府も仏教界も良かったが、徐々に仏教界が廃れ、結果として廃仏論が出て来る。こととなり、維新に繋がったという見方をしていることが分かる。そのため、国家護持のためにも清僧宗の隆盛を求めているのであ

る。江戸中期以降、日本でも政教分離の観念が構築されるが、それとは逆行している。

著者が理想とする国家護持に関わるのは「戒」であり、従って何らかの持戒を行っている自覚を持った「聖道門」の僧侶という分類が適合することが分かる。なお、持戒に関しては、本書「第二説夢編」でも詳しく論じられている。

二一、「第二説夢編」について

「第二説夢編」については、『明治仏教思想資料集成』にも収録されていないため、解題を付しておきたい。

- ・著者 前編は「有安道人」とあるのみだが、後編は「有安道人著」とあって、独立した著作であることを窺わせる
- ・執筆時期 不明。一切の記述がない
- ・刊行時期 不明
- ・出版社 不明。一切の記述がない
- ・体裁 和書袋綴で表紙を含めて全七枚。前編とほぼ同じ分量となっている

右記の通り、後編の「第二説夢編」について、書誌情報は判然としない。ただし、刊本を見る限り、前後編で紙質や体裁などに大きな違いはない。よって、前編が執筆或いは刊行された明治一二年と時を置かずに後編も刊行されたものと思われる。体裁がほぼ同じであるから、おそらくは出版社なども同じであり、また、以下の記述から後編も自費出版であったものと思われる。

有安道人『彈僧侶妻帯論』と有安老人『対客一話』について

是レ思夢カ妄夢カ其名ヲ知ラスト雖モ清僧宗ヲ鞭策シ妻帯宗ヲ照顧セシメ政家ヲ誡ルノ意アリテ一人ノ夢ニ非ルカ如シ故ニ記シテ社友ニ示ス也⁽¹⁰⁾

敢えて「社友ニ示ス」とある通りで、自らの周囲にいた者達へ配布するために書かれたものであり、広く流布する目的ではなかったことを想起させるため、自費出版という扱いの妥当性が理解出来よう。

そして、前編部分の大半は、或る問者との問答体であり、何故「清僧宗」が社会にとって必要であるかを説き、末尾には再宣教が始まったキリスト教への対抗的意図を表明した文脈が目立つ。

一方で、「第二説夢編」は筆者による見解を連ねた内容となっており、仏教徒における戒学の参究を促すものとなっている。

後編冒頭では、著者が夢の中で見た、ある一大寺での宗派混淆なる碩徳会議における風景の描写から始まり、その中である議員が次のような発言を行った。

一議員ノ曰方今佛法ノ振ハサルハ戒法ノアル所以也如何トナレハ各宗ノ僧侶陰ニ肉妻ヲ犯シ陽ニ守ル者ハ中等以上ニノ眞實梵行清淨ノ者ハ雨夜ノ星ノ如シ其餘ハ蕩々トノ慙ヲ知ルニモ至ラス（中略）先ツ論ヨリ証據トスヘキ者ハ抑眞宗ニ非スヤ宗門繁昌ニノ英傑モ亦多シト主張セリ⁽¹¹⁾

要は、日本においては仏法が至極振るわずに、その原因として戒法を挙げているのである。その一議員は当時の仏教界の実態として、本当に戒法を守っている者は「雨夜ノ星」の如く少なく、

中等以上の者は表には戒法を守っているように振る舞っても、陰では肉を食べ結婚しているとし、それ以外の者は最早、結婚していることなど慙愧にも思わないとしているのである。また、戒法を守らなくても、宗派として繁昌する事例として、「真宗（浄土真宗）」を挙げたのであった。いうまでもなく、浄土真宗は開祖である親鸞（一一七三～一二六二）以来、結婚を忌避せず、また、中世の段階で既に寺院を血縁相続する方策を積極的に展開してきた宗派でもある。そして、これらの見解に対して、西有の立場も重ねて反論されたと思われるのが、以下の文脈である。

而ルニ鼠色ノ直綴ニ茶色ノ麻衣ヲ搭シタル一老僧アリ未タ何宗ノ碩学ナルヤヲ知ラス突然起立ノ曰吾宗ノ如キハ假令斷滅ニ及フモ肉妻ヲ縦ニスルノ宗徒トナル可ラス⁽¹²⁾

この主張から、仏祖の示訓たる持戒を行えない場合、宗派としての斷滅までも覚悟していた西有の見解が明らかである。そして、この一老僧は高声に自らの主張を続け、仏教における戒定慧三学の基本を述べたという。しかし、その内容は戒学一般に及ぶものの、やはり特定の宗派に依拠したものではなかった。ただし、以下の数節から、ある程度の絞り込みが可能となる。

・而ノ受授ノ式法アリテ用テ佛性ノ種子トナスモノハ釋徒也⁽¹³⁾
 ・又無戒ノ僧ノミナルトキハ誰レアツテカ戒師ヲ勤ムルヤ戒師ノ人ナケレハ戒壇^{原文ママ}アル可ラス戒師ナク戒壇ナクハ戒脉自ラ斷絶スヘシ戒脉果シテ斷スルトキハ佛法ノ惠命於是乎斷絶⁽¹⁴⁾セン

前者の内容から、受戒が仏性の種子となることを示すため、これは『梵網經』で説かれる仏性戒（菩薩戒）の思想を踏まえた発言であることが分かる。更に、後者については、戒師・戒壇・戒脈・仏法の慧命というキーワードから、受戒を行った際に、戒脈が繋がるかと考えていた宗派になることを意味している。そのため、天台宗・真言宗・浄土宗・曹洞宗・臨済宗などが該当すると推定される。しかし、時代的な関係から、特に日本の浄土宗を意識したものであった可能性が高い。同宗は教理的には浄土門系となるが、天台宗の円頓戒思想を受け継ぎ、戒学の研鑽に優れ、明治時代初期には廢仏毀釈に対抗して戒律復興運動を行った福田行誠（一八〇九～一八八八）が輩出されるに至る。福田の戒律重視の主張は従来評される史伝や著作全集からも明らかである。また、福田は明治元年の「諸宗同徳会盟」結成時から指導的立場となり、同会盟では王法と仏法の不分離・邪教の研窮毀斥・自宗の旧弊一洗などが議論されるなどし、戒律の護持が主張されている。本書における西有の主張は、福田や同会盟の影響も考慮すべきであろう。あるいは、先ほどの「一老僧」とは同会盟における福田がイメージされていたのかもしれない。そうなれば、本書が全体として通仏教的主張であることも理解出来る。

そして、「第二説夢編」は、耶蘇教もまた妻帯する（明治期になり、特に北米などを經由して伝来したプロテスタントを意識した発言だと思われる）ことで勢力を衰えさせていることを指摘し、清僧宗こそが真実の宗教であるとしながら、たとえ数は少な

くとも、その勢力を維持しつつ、国家護持を進めるべきとの立場を鮮明にするのである。

三、有安老人『対客一話』について

有安老人『対客一話』は、管見の限り従来の研究で指摘されたことがなく、また、これまでに編集された西有の著作目録にも挙げられていない。⁽¹⁵⁾ 本研究は筆者が二〇一八年中に入手した明治期写本を用いて行う。まずは同写本の書誌情報を整理したい。

一、冊数 一冊

一、料紙 楮紙

一、大きさ 縦27cm×横17cm

一、装丁 袋綴、紙縫りで上下二箇所を止める

一、題目 外題 対客一話 全

内題 対客一話

後題 有安老人対客一話 終

一、枚数 表紙 1丁

本文 6丁

奥書 1丁

一、行字数 毎葉13行 各行約23〜26字

一、書写年 明治廿八年三月初三日

一、書写者 清隱山安居之日 微笑庵謹写

一、所蔵者 現在・菅原研州

旧蔵者・微笑庵（詳細不明）

全体で四〇〇〇字に満たない文章量であり、その主張は基本的に先に挙げた『弾僧侶妻帯論』及び『第二説夢編』に共通したものと見える。また、『対客一話』の題の通りで、妻帯宗の立場に立つ或僧が意見し、それへ著者が清僧宗の立場として応答する問答体として編まれている。

内容から前後半の二部構成となっており、前半は永平道元がもし文明開化の世にいればどう振る舞ったかを仮想しつつ二問を問答しており、世間の価値観が大きく変化した時代に仏教者たる者への行動の指針を示したものとなっている。後半は妻帯宗としては浄土真宗の親鸞が英雄で、マルチンリヨースは豪傑であるという見解について、著者が反駁したものであり、具体的な対象を定めつつ強い批判を展開している。なお、マルチンリヨースとは、一五一七年以降にローマ・カトリック教会に対して批判を行い、プロテスタント教会設立のきっかけを作ったとされるドイツのマルティン・ルター（一四八三〜一五四六）のことである。

そして、『弾僧侶妻帯論』『第二説夢編』では、著者の宗派などが知られなかったが、『対客一話』は明確に理解出来るものとなっている。

高祖宗旨ヲ開クニ意無フノ其子孫ニ至テ自ラ開ルモノハ吾曹洞宗ニアラスヤ⁽¹⁶⁾

著者の見解が示される文脈で「吾曹洞宗」と述べており、他にも道元を指して「吾宗祖」などと呼称するため、曹洞宗内の僧侶が著者であったことが分かる。

『対客一話』前半第一問において語られる道元の伝記・事績への讃歎としては、鎌倉行化の後で北条時頼による建長寺建立に際しても一顧だにできなかった一事、文明首座擯斥の一事、そして紫衣・徽号を受けなかった一事などの宗派内の伝承を採り上げている。この際、道元の伝記として参照されたのは、著者は「行状記」という呼び方をしているものの、当時よく読まれた道元伝を考慮しつつ、内容からも面山瑞方編『訂補建誓記』（一七五四年刊）と推定される。更に、著者は日蓮宗の深草元政（一六二三～一六六八）が編んだ『扶桑』『隠逸伝』にも言及するが、明治一六年に村上勘兵衛により復刻された三冊本を参照したもののか。

『隠逸伝』には道元の伝記が載っているわけではないが、序文で元政が示した「隠逸」という生き方が道元の理想に叶うことを示すものである。『隠逸伝』復刻刊行の年次などから『対客一話』が示された時期を考えると、明治一六年以降であったものか。そして、これらの見解を元に著者は、当時、各宗派に現れた「道徳僧」なる者が、政府に取り入りたくて、こぞって東京で出仕していることを批判した。

また、前半第二問では、政府の見解に則り、僧侶も俗服を着け、蓄髪・肉食をしなければ、世間の人と交わりにくいのではないかという問いが発せられた。著者はまず、この見解を「惑ヘルノ甚シキモノ也」と批判し、更に「諸本山継目参内務省社寺局往来ハ法服ナルニアラスヤ¹⁷⁾」としつつ、後述するように通称「肉食妻帯令」では法用以外での俗服着用を認めるが、その政府で

あっても法服を嫌っていないとし、檀家信徒は尚更に法服を忌む道理が無いとした。そして、もし法服を忌むような檀家がいたとしても、不信心であるから初めから交際すべきではないとするのである。また、良き信者のあり方として真実の「三宝帰依」を行う人を挙げている。「三宝帰依」は仏教徒の基本ではあるが、もし本書の著者が西有であったとすれば、西有が檀家信徒の安心を説いた『安心訣』の別名が「帰依三宝訣」であり、同書執筆が明治二三年で、鴻盟社の刊行が明治二六年であったことから、『対客一話』が示された時期と同時代であるとも考えられる。

先に引いた一文に「内務省社寺局」の語が見えるが、同局は教部の混乱とその廃止を受けて内務省に移管され、伝統的仏教・神道各教団のみならず、いわゆる教派神道各教団についても管理監督を行った。同局の設置期間から、『対客一話』が明治一〇年一月から、三三年四月までの間に編まれたものであることが明確となる。

『対客一話』後半は問いこそ、妻帯宗を六〇〇年前に開いた浄土真宗の親鸞と、三〇〇年前に開いたプロテスタントのリヨウサを讀えつつ、当代の僧侶も妻帯してこれらの者に続くべきとの見解が呈されたのみであったが、それに対して著者からは三つの段落に及ぶ回答が示された。

まず第一としては、著者は洋学をしないためリヨウサの説く宗義や、時代などは知らないとしつつも、ローマ（カトリック教会）の様子を見ると、僧侶も権威に奢り、品行不正であって、

人々の信頼を受けているとは限らないところに、リヨースが身命を惜しまずに「異趣義」を主張した様子は、実に豪傑であったと賛意を示した。しかし、その結果、欧州を宗教戦争が席卷し、多くの死者を出したことについては批判し、リヨースが開いたものは修羅場であったとも喝破した。この点では、洋学をしないとしつつも、ルターの伝記や欧州の歴史について、よく学ばれていた印象を得る。

日本におけるルター研究について、先行研究が指摘するところでは、中村正直（サミュエル・スマイルズ『自助編（西国立志編）』の翻訳者）が明治七・九年（一八七四・七六）にそれぞれ「路場（音読みで「ろとう」となり、ルターを示す）」の伝記について若干の記述を行い、続いて明治二年（一八八八）には加藤寛が『まるてん・るーてる伝』を著すなどしたという。更に国立国会図書館の所蔵文献も調べると、明治二年には素軒逸史訳『ルーテル伝』が警醒社から刊行され、キリスト教系各種雑誌にもルター伝が採り上げられるようになる。つまり、明治二〇年代前半にはルターの事績は日本でも広く知られるようになっていたのである。これは『対客一話』の成立推定年代と一致することになる。ただし、ルターを「マルチンリヨース」という呼称で論じたものは未見である。そのため、著者は何らかの著作からではなくて、誰かから耳で聞いて、その呼び方を決した可能性があるが、詳細は不明である。

第二段落は親鸞についての評価が示された。親鸞の場合、師で

有安道人『弾僧侶妻帯論』と有安老人『対客一話』について

ある法然の教えとは「異赴義」を唱えて自ら妻帯し、庶民を相手に教線を拡大したことは当代の真宗の興隆を見れば明らかであり、英雄の評価に値することを認めつつも、仏法の大意から見れば、論破せざるを得ないとしている。まず大乘仏教を含めた天台系の教判五時説に準えて、仏一代の説示を見れば、『華嚴経』の開経である『梵網経』で菩薩戒を説き、入般涅槃に因む『遺教経』でも戒を説いたことから、三宝の内仏宝も僧宝も皆、「戒」を根本とし、無戒の仏宝・僧宝などはないとした。よって、無戒の真宗の存在は、仏法の衰滅を早めるとも非難した。そして、もし在家の男女が三宝を供養するとすれば、僧侶の持戒の有無を見定めるべきであるという。この時、著者が参照したのは永平道元『正法眼蔵』「発無上心」巻の一節で「佛言優婆塞優婆夷善男子善女人以妻子肉供養三寶以身自肉供養三寶諸比丘既受信施云何不修シカアレハシリヌ飲食衣服卧具醫藥僧房田林等ヲ三寶ニ供養スルハ自身オヨヒ妻子等ノ身肉皮骨髓ヲ供養シタマツルナリト」⁽¹⁹⁾である。「佛言（『正法眼蔵』本文では「釈迦牟尼仏言」とある）」として引用しているように見える一節だが、実際には典拠不明とされる⁽²⁰⁾。そこで、道元の解釈を含めて見てみると、引用された文章からは妻子や自身の肉を供養したように見えるが、道元はそれを「飲食・衣服」などと置き換えており、その結果、愛欲などが起きずに持戒がなされたと見える。「対客一話」で、この部分が引用された理由は、信施の現場においては在家者であっても、出家者の持戒を尊重する努力がなされるべきことを示すためである

う。

第三段落は、不清淨僧と清淨僧とが同列で供養を受けることの問題を指摘しており、主として論じられているのは、「信施の虚罪」についてである。これは、本来応供たる仏・阿羅漢ではない僧が信施（在家者の信心からの施財）を受けた場合、罪を得るという考えであった。日本では中世禅林で修行し、現在の名古屋市内に所在する長母寺（臨済宗東福寺派）で著述活動を行った無住道暁（一二二七～一三二二）が『沙石集』巻九において、『仏頂尊勝陀羅尼』の読誦が禅林で広まったのは、信施の虚罪を消す功德があったためだと論じるなどし、日本では、常に一定の問題意識が寄せられたことである。そこで、『対客一話』では、無戒である真宗の僧侶は、信施によって大いに罪を得ると主張し、もし、他宗派もそれに続くようなことがあれば、同じように罪を得ると主張する。外見上、真宗は勢力が強いように思えるけれども、今後はリョーサの修羅場や、親鸞の法害などのような悪影響を被ることを予言する。現代的な視点では、強圧的な言動に思えるけれども、当時としては著者の護法の念に基づいた訓導の言動というべきか。そして、段落の後半では日本では妻帯僧が増えた一方で、中国・チベット・タイ・スリランカなどでは、戒律を護持した清僧ばかりであるとし、ある時その国などから日本に清僧を派遣すればどうなるか、心配で夜も眠れずにこの書を著したとするのである。その際に、「遂に一篇ヲ綴ル因テ我宗諸兄弟二一²¹言ス妻帯同ノ憐儀ニ決スル勿レ」と檄を飛ばすなどして、宗

門を復古し、仏祖の大恩に報答するように求めたのであった。

以上、『対客一話』の概略を確認した。既に『弾僧侶妻帯論』にも、真宗批判・基督教批判は見えており、その意味では一貫した主張の中にあつたことが分かる。その過程で、親鸞やリョーサなどの名前を出して批判することは、『弾僧侶妻帯論』よりも、より批判の対象が明確になったことを意味している。これは著者が明治一二年よりも更に批判対象への学びを進めたことを意味し、それを可能にするほどの関連刊行物が世に出たことは既に確認した通りである。また、前半の問答には、特に曹洞宗に関する説示が見られるが、その内容からは、明らかに高祖道元への慕古の念を感じ取られ、『正法眼蔵』の適確な引用からしても、宗典に参じた碩徳の文章であることが容易に見て取れる。

よって、『対客一話』については、奥書の「有安老人」の記述も勘案して、西有穆山による著作と見て問題は無いように思う。そして、『隱逸伝』の明治期復刻時期と先に挙げた書誌情報（特に書写時期）、またルター伝の日本社会への浸透などを考慮し、明治二一～二八年の間に成立したと限定できよう。

後は、本書成立の時代に、曹洞宗自体の妻帯がどのような状況であつたのかということ、西有が僧侶の妻帯をどこまで批判していたのかを検討したい。

四、明治時代前期曹洞宗における 「肉食妻帯令」への対応について

既に関連する先行研究⁽²²⁾が見られるため、それらを受けつつ検討してみたい。改めて、明治五年（一八七二）四月二五日の「太政官布告」第一三三号において、「自今僧侶肉食妻帯蓄髮等可為勝手事 但法用ノ外ハ人民一般ノ服ヲ着用不苦候事」とした。通称「肉食妻帯令」の公布である。その結果、僧侶が肉食し結婚することが認められ、剃髪しなくてもよく、法務以外の用件においては私服を着用しても良いとしたのであった。前項で確認した『対客一話』前半第二問は、この後者の点を論じたものであったことが理解出来るよう。なお、関連する布告はこの後も続き、結果として出家者の立場を否定し、在家者と同じように戸籍に組み入れることを目指したとされている。

そこで当時の曹洞宗では、同年六月二日に両大本山貫首が全一二項目からなる「教導職須知畧」⁽²³⁾を宗派巡回教導職向けに示し、特に第一一項目で仏戒護持を示すことで、実質的に先の布告に対する対応を求めたことを意味する。続いて同月五日には、全国末派寺院向けに「肉食妻帯勝手ノ布告ニ付論達」を出して、布告の意味を取り違えないように示した。

自今、僧侶肉食妻帯蓄髮等可為勝手の後布告有之に付、事情不明之族、旨意取違驚愕致候ては不都合の儀に候。略して弁じて示すこと左の如し。

有安道人『彈僧侶妻帯論』と有安老人『対客一話』について

沙門の徒、久しく游惰に流れ、仏祖真実の道を了ざること能はず。陽に解脫の形を票し、陰に繫縛の念を抱く者、十之八九は皆是なり。

夫、宇内万国文明日新の秋に膺りて独吾が皇國のみ斯の流弊を坐視するに忍んや。然と雖、これが嚴規を立てて以て之を糺問せんと欲せば、天下の僧侶將に子遺なからんとす。於是一回寛大の典を降し咸く其好む処に循はしめ而後自然真偽趣を異にし涇渭判然たらば、仏祖の大道再び宇内に興隆せんこと必せり。是れ乃ち既往を咎めず、将来を諫め僧中に其人ありや否やを檢する所以の微意なり。仏子それ枢機を察せざるべけんや。

且夫仏戒は素と仏弟子の禁にして天下普率の律に非ず。然るに中世以降混じて王制の如く其犯戒の僧あれば、之を罰するに王律を以てす。且く鷲嶺の付囑に基くと雖、亦、甚しきことあり。今や明令一たび降り、仏律は沙門に委してへ委は勝手たるべきの義、自らは嚴整せしむ。是の時に当て、仏子たるもの速に回光返照して従前の不規を改め憤發激勵正法を護持し、国恩を報ぜずんば、更に何れの日をか待ん。是れ我等が龍天に誓て末派の僧侶に期望する所以なり。若又自ら顧て明に仏戒を持し、仏種を継ぐこと能わざるが如んば、各自の好む処に任せて早く裁制せよ。濫吹して法門を汚す間敷事。⁽²⁴⁾（以下略）

上記内容をまとめれば、布告で「可為勝手」とあった内容につ

いて、結局、江戸時代までは仏制の上に王制を置いて、その中で僧侶も処断される状況にあったが、その王制の縛りが無くなることを、「可為勝手」というのであって、好き勝手に肉食・妻帯・蓄髪などをして良いことになったわけではない、ということをし、全国の曹洞宗寺院・僧侶に向けて発したのであった。

しかし、この一文を虚心坦懐に読めば、当時の僧侶の様子が想像される。それは、この段階で問題のある僧侶がいたことを意味しよう。文中に「沙門の徒、久しく游惰に流れ」や、「速に回光返照して従前の不規を改め」という一節があるため、布告が出てから一ヶ月が過ぎるまでに、問題を起す僧侶が認識されていたことになるといえよう。一方で、当時の曹洞宗の指導者層は僧侶の持律による仏法興隆を願っていたことも分かる。「仏祖真実の道を了ずる」や、「仏祖の大道再び宇内に興隆せんこと必せり」という一節からは、曹洞宗僧侶に自律的な仏戒護持を願い、その上で仏祖真実の大道を明らかにさせようという思いがあったと理解出来るよう。曹洞宗以外でも、先に挙げた浄土宗の福田行誠は内務省に対し、諸宗派の管長などと合同で、布告の内容を正面から批判する建白や僧侶の弊風改善を願うに及んだ⁽²⁵⁾。

この後も曹洞宗務局は僧侶の結婚を認めず、それは寺院における男女の別を明らかにする形で行われた。最初の『曹洞宗宗制』は明治一八年四月に当時の曹洞宗管長・畔上樸仙（一八二五〜一九〇一、大本山總持寺独任第二世）から内務卿・松方正義に認可を求めたものである。内容は、曹洞宗務局による従来の布達を当

時の宗務局総監・滝谷琢宗（一八三六〜一八九七、後に大本山永平寺貫首第六三世）が全一一号として編集したのだが、「第三号 曹洞宗寺法條記」を見ると、以下のようにある。

第九條 寺院中に女人を寄宿せしむ可らず

行政上には僧侶の妻帯を妨げざること明治五年第百三十三号の公布あれども、右は宗規の範囲内に關係を及ぼざざること明治十一年二月内務省番外達に明なり。故に宗規は依然僧侶の妻帯を禁止す。政教已に区別あり。他の干渉を脱して独立の機運に傾向せし以上は、奮て宗規を恪守すべし。尼庵に男子を寄宿せしめざるも亦同じ⁽²⁶⁾。

明確に妻帯を禁止する内容で、従来の布達や国からの命令の機能・適用範囲を総括するものといえる。しかも、当時徐々に日本でも理解されてきた政教分離が自覚され、その上で自律的に宗規を護持するように説いたものである。なお、曹洞宗では大体どの時代も男性僧侶（比丘）が圧倒的に多く、女性僧侶（比丘尼）が少ないため、表題には「女人を寄宿せしむ可らず」とあるが、同條末尾に「尼庵に男子を寄宿せしめざる」という一文が付記されて、女性僧侶にも男性僧侶同様の持律を求めたことが分かる。

この後、妻帯の規制が『宗制』から見えなくなるのは、明治三九年（一九〇六）の改正によってであろうかと思われる。同年の『宗制』には、先の「寺院條規」に相当する「曹洞宗寺院規程」（全八六條）及び「曹洞宗僧侶懲戒法」が見えるが、ここに男女の問題についての項目は見えないため、結果としてこの頃までに

は、僧侶の妻帯は実質的に黙認されたことになるのだらう。その間、明治二三年に曹洞扶宗会が示した「曹洞宗改進方案」⁽²⁷⁾では、原坦山（一八一九〜一八九二）の見解を受けつつ展開されたと思われるが、僧侶のあり方を「清僧としての」・弁道師・（俗僧としての）・唱導師」に分けて、その地位や晋住可能寺院までも二分化する提案まで行われた。宗派内ではその後も僧侶の結婚に関する議論は続き、著名な問題提起として、栗山泰音（二八六〇〜一九三七、大本山總持寺独住第八世）による『僧侶家族論』（桜樹下堂・一九一七年「大正六」）では僧侶の結婚を認めつつ、夫婦という新しい姿で寺院を運営していくべきだと主張したのであった。

上記は、通称「肉食妻帯令」とそれに対する曹洞宗の行政機関による対応の、ごく一部を採り上げたのみであるが、この時代に西有は僧侶の弊風を歎き、戒律護持を訴えていたわけである。著作としては、『弾僧侶妻帯論』・「第二説夢編」そして『対客一話』を見たが、他にも『明教新誌』第一五〇号（明治八年八月一日）に宮城県僧侶への説示として、蓄髪・俗服・肉食・妻帯の全てを否定したことが知られている。⁽²⁸⁾

五、西有穆山と大内青巒

本論の結論に代えて、今一つ、僧侶の結婚に対する西有の見解を採り上げておきたい。それは、「與青巒居士書（青巒居士に与る書）」⁽²⁹⁾と呼ばれる書簡で、西有の語録の末尾に収録されている。

有安道人『彈僧侶妻帯論』と有安老人『対客一話』について

る。内容は、西有が自ら組織した敲唱会会長として大内青巒（一八四五〜一九一八）⁽³⁰⁾宛に送ったものであった。この書簡で西有は、青巒のことを明道協会の幹事と呼んでいる。明道協会とは元長州藩の奇兵隊士で旧帝国陸軍中將であった鳥尾小弥太（一八四八〜一九〇五）が、護国協会を改名して明治一七年一月に設立した、通仏教の組織である。同協会が刊行した『明道協会総則』や鳥尾自身が述べた『明道協会要領解説』には「護国大意をもって創設の義とする・仏法を宗として天下の善術を集める・安心立命は各自信じるところの宗義に任せる・四恩に報答することが実践の要旨である・各会員は身を捨てて正法に帰する」（筆者による要約）という「要領五則」が掲げられた。更に諸規則として「通則」「内則」「福田衆規則」の三つが制定されているが、人天の模範になるような尊宿を同協会の導師にすることや、戒定慧の三字研鑽に優れた人を求めるなどし、特に慈雲尊者飲光（一七一八〜一八〇五）の『十善法語』を方針にすることを明記した。そのために同協会では『十善法語』を明治一七年八月に発行して、敷衍を図るに至った。そこで、同協会の活動を評価した西有は、幹事たる青巒に対し、以下のような言葉を贈って激励したのであった。

志士誓約して明道協会を設立して、將に僧尼令を発して敲肉・畜妻を嚴禁せんと欲するべし。而して足下、自ずから其の幹事為り。果然として足下、幹する所の明道協会の主旨を貫徹し、將來の僧侶の噉肉・畜妻、地を掃いて蕩尽すれば、

亦た快ならざらんや。⁽³¹⁾

つまり、同協会が持戒を求める団体であると思ひ、その主旨の貫徹を願ったのであった。道心篤く持律堅固なる出世間の仏道者育成を願ったと評価される敲唱会⁽³²⁾の会長たる西有にとつて、同協会については同志を得たような気分であつたことが窺える。

青巒がこの西有の激励をどう受け止めたかは不明だが、青巒は福田行誠の薫陶を受けた人ともされるから、仏教界の革弊を願ったものだと思いたい。今後、青巒の戒思想については何らかの形で発表したいと思つている。

本論は、二〇一八年中に一度まとめたが、入稿する前の段階で、伊藤勝司編著『西有穆山という生き方』が二〇一九年一月に刊行されることを知つたため、同書の見解を待つてから書き改めたものである。当初は、『弾僧侶妻帯論』そのものが西有の著作であるか否かを思想的に定めようと思つていたが、伊藤氏の著作で明確に説明されていたため、新出資料である『対客一話』の解題を中心に、同著が西有の著作として判断可能かを検討するに留めた。

註記

- (1) 古田紹欽『弾僧侶妻帯論』解題(『明治仏教思想資料集成』第六巻)を参照した。
- (2) Richard Jaffe, 『Meiji Religious Policy, SotoZen, and the Clerical

Marriage Problem』(『Japanese Journal of Religious Studies』二五・一九九八年)では、明らかに有安道人を西有のペンネームとして指摘している(同誌五九頁脚註)。

- (3) 『弾僧侶妻帯論』の末尾に、「吾常ニ佛法ノ類廢ヲ憂ルニ依テ終ニ國家ヲ憂ルニ至リ慨然トシテ寢食ヲ忘テ獨リ空ク長歎息スルノミ或人默シテ退ク予モ亦眠ニ就ク奇ナル哉一夢ヲ感セリ説夢ヲ以テ後篇トナスヘシ因テ且ク筆ヲ闋ク」(六丁裏)とあつて、前編部分の問答が記録し終わつた段階で、既に後編の構想などがあつたことを示すため、それほど時を置かず書かれたものという推定を行つた。

- (4) 前出註記(1)の古田による解題の指摘を参照した。
- (5) 『西有穆山という生き方』二六三頁参照。

- (6) 参照した『正法眼蔵開講備忘』は、長野県山ノ内町興隆寺所蔵本(旧蔵者は大本山總持寺独住二世・畔上棟仙)であり、表紙と冒頭にそれぞれ「有安老人人口演」とある。

- (7) 『弾僧侶妻帯論』一丁表

- (8) 『弾僧侶妻帯論』五丁裏

- (9) 「聖道門」とは「浄土門」と対応する言葉として、主として浄土教系で用いられた。「聖道門」とはいわば、自らの能力や、持戒を含めた修行の功德を頼りに仏道の目的を達する僧侶のことである。「浄土門」は、それらを諦めて阿弥陀仏の本願に帰依するため、両者は明らかな相違が見られる。例えば、日本の浄土宗開祖である法然(一一三三〜一二二二)は『選択本願念仏集』冒頭で、中国浄土教の道綽(五六二〜六四五)が『安樂集』において、「聖道・浄土の二門を立てて、聖道を捨ててまさしく浄土に帰する」態度であつたことを承けて、自ら浄土門として判釈を進める旨明記している。類似した分類に「自力門・他力門」などがある。

- (10) 『第二説夢編』六丁裏

- (11) 『第二説夢編』二丁表〜裏
 (12) 『第二説夢編』二丁裏
 (13) 『第二説夢編』二丁表
 (14) 『第二説夢編』二丁表〜裏
 (15) 『西有穆山という生き方』二六三〜二六五頁参照。
 (16) 『対客一話』一丁表〜裏
 (17) 『対客一話』二丁表
 (18) 徳善義和「日本におけるルター研究」(日本基督教学会編『日本の神学』一九六七巻六号所収)を参照した。
 (19) 『対客一話』五丁裏、『全集』第二巻・一六五〜一六六頁
 (20) 『全集』第二巻・一六六頁頭註を参照すると、『法華経』に関連する文脈があると指摘されるものの、詳細は不明。
 (21) 『対客一話』六丁裏
 (22) 特に川口高風「政府による僧侶の世俗化」、『明治前期曹洞宗の研究』第五章第六節(二二六〜二五〇頁)を参照した。
 (23) 『明治五年曹洞宗両本山布達全書』三丁裏〜四丁表
 (24) 『明治五年曹洞宗両本山布達全書』四丁裏〜五丁表
 (25) 「建白並垂訓」及び「僧風釐整の建言」、『行誠上人全集』五〇八〜五一五頁
 (26) 『明治十八年曹洞宗務局普達全書』五二丁表〜裏
 (27) 『曹洞扶宗会雑誌』第二五号(明治三十三年一〇月発行)に掲載された全文を参照した。原坦山の見解については、川口「政府による僧侶の世俗化」を参照。
 (28) 川口「政府による僧侶の世俗化」を参照。
 (29) 『直心淨國禪師語録』巻十、第四冊一一八丁裏〜一一九丁表
 (30) 大内青巒に関する事績や先行研究は菅原研州「大内青巒居士の禅思想」(『東海仏教』第六一輯・二〇一六年)を参照されたい。

有安道人『弾僧侶妻帯論』と有安老人『対客一話』について

- (31) 『直心淨國禪師語録』巻十、第四冊一一九丁表、訓読は筆者。
 (32) 川口高風「敲唱会の結成」、『明治前期曹洞宗の研究』第七章第五節(三三八〜三四三頁)を参照した。

参考資料

- ・有安道人『弾僧侶妻帯論』(成文社・明治一二年)について、本論では『第二説夢編』も合冊された本学図書館情報センター所蔵・禅研究所配架本(請求番号J88.80145)ただし検索サービスでは『弾僧侶妻帯論』と表記しているため注意が必要)を参照した。字体から活字版として印刷されているが、頁数の数え方は和書袋綴版の方法に準じているため、本論でもそれに倣った。また、明治仏教思想資料集成編集委員会編『明治仏教思想資料集成』(同朋舎出版・一九八二年)の第六巻には、前編のみ翻刻収録され古田紹欽が解題している。解題では、後編の執筆を示唆していると指摘しつつ、その刊行については定かではないとしている。しかし、本学所蔵本は後編も完備しており、解題等は本文で示す通りである。また、本論後半で採り上げた筆者蔵『対客一話』は、更にその続編に位置付けられよう。
- ・『明治五年曹洞宗両本山布達全書』(曹洞宗両本山・一八七二年)及び『明治十八年曹洞宗務局普達全書』(曹洞宗務局・一八八五年)を参照した。引用に際してはカナをかなにし、適宜句読点を付すなど見易く改めた。
- ・明道協会編『明道協会総則』明道協会・一八八五年
- ・鳥尾小弥太述『明道協会要領解説』加藤万作・一八八五年
- ・福田行誠『行誠上人全集』仏教学会・一九〇五年
- ・西有穆山著・岸澤惟安編纂『直心淨國禪師語録』(全四冊・全一〇巻)

鴻盟社・一九二六年

・岸澤惟安『先師西有穆山和尚』道元禪師讚仰会刊行部・一九三八年

・川口高風『明治前期曹洞宗の研究』法藏館・二〇〇二年

・西有穆山禪師顕彰会編『西有穆山禪師——没後百年を迎えて』西有穆山
禪師顕彰会・二〇〇九年

・伊藤勝司編著・西有穆山禪師顕彰会協力『西有穆山という生き方』大法
輪閣・二〇一九年一月

・春秋社『道元禪師全集』全七巻、引用等を行う場合には『全集』第〇
巻・〇〇頁と略記した。

【翻刻資料】

『対客一話』

※凡例

- ・当資料は、筆者蔵『対客一話』全編を翻刻したものである。
- ・翻刻時の行数・字数などは原典に従った。丁数は数字と表裏の表記のみで略記した。
- ・字体は概ね原典に従ったが、類似の字体表記の場合もある。
- ・原典で指摘する書き損じの訂正は、場所を下段に移動して掲載した。
- ・翻刻時に留意された点や、出典を検討した引用文・語句については末尾に註記を付した。
- ・現代の人権重視の観点からは、一部差別的と思える文脈や用語も散見されるが、当時の資料の再現を企図し、そのまま翻刻した。取り扱いには注意されたい。

【表紙】

対客一話 全

【1オ】

対客一話

⁽¹⁾或僧云ク吾宗祖道元禪師ヲノ若シ此ノ開化文明ノ世ニ在ラシメハ

争テカ敢テ越ノ深山幽谷ニ隠レサセ玉フコトアランヤ必ス東京ニ在

テ事ヲ執リ百計千謀為宗門尽力スベシト是レ高祖ノ道德ヲハ
 夢ニタモ不知淺智俗情高祖ヲ贊スルカ如クニシテ高祖ヲ誘スルノ
 甚シキ無間獄ノ大罪人也」夫高祖ノ越山ニ隱居セラル時ヲ史
 乘ニ微ノ微細ニ觀察セヨ天台真言稍々衰ヘントス浄土日蓮真宗
 正ニ興ラント欲ス其時ニ當テ高祖宋ヨリ帰リ玉フ縉紳武將競
 テ帰依ス他宗他派ノ僧僧或ハ參シ或ハ改宗シテ弟子トナルナリ而
 今世ノ開化ノ動搖ト一宗開闢ノ時機ト何レカ重ク何レカ輕キヤ然ルニ
 其時枕ヲ居トセス已ニ開キシ與聖寺ヲモ顧ミス其心ノ皎潔タルコト
 如秋月高祖宗旨ヲ開クニ意無フノ其子孫ニ至テ自ラ開ルモノ

【1ウ】

ハ吾曹洞宗ニアラスヤ故ニ開宗ノ事ヲ朝廷ヘ願ハスシテ曰ク何ノ国土
 カ佛土ニアラサル何ノ帝王カ佛敎ヲ受ケサルト古人云昔日若シ永
 平道元禪師ヲノ西京ニ留ラシメハ五山十刹ハ必ス曹洞宗ナ
 ラント又謙倉北條氏建長寺ヲ創草シテ開祖ニ請スルヲモ受ケザ
 ルノミナラズ寄附地ノ証書ヲ持シ来リ所ノ女明首座ヲ罰スルコト
 七生更ニ彼レノ單坐牀下ノ土ヲ除去スルコト七尺彼レヲ誠ニ曰ク汝名
 利ノ念ハ識心田ニ入ルコト油ノ麵ニ入ルカ如ク萬劫ニモ除キカタシ
 ト若シ此時ニ於テ高祖鎌倉ニ留ラハ鎌倉ノ五山モ敢テ愾濟宗
 ニ讓ルベカラス且ツ參内セス紫衣徽号ヲ受ケザルコト汝法孫ト
 ノ此事アルコトヲ知ラスヤ深草ノ元政他宗ト雖モ高祖ノ道德
 ヲ知ルカ如シ僧ノ隱逸伝ヲ編スルニ及ンテ第一頭ニ老セリ開宗
 競争ノ時スラ京都ニ居ルヲ欲セス已ニ建立スル所興聖寺ヲ
 捨テ不顧忌名利如蝸蛇背救意紫衣徽号ヲ不受

有安道人『彈僧侶妻帶論』と有安老人『対客一話』について

【2オ】

如此脫塵清潔高唱不羈ノ高祖ニノ縱令今日ノ開明ニ処セ
 ルモ汝等想像ノ如ク豈ニ東京ニ留在スルノ所行アランヤ今日諸
 宗ノ道德僧ト称スルモノスラ官ニ奔走シ事務ニ區々トノ東京
 ニ留在スルコトヲ欲セサルニアラスヤ況ンヤ吾宗祖ニ於テヤ汝高
 祖行狀記ヲ拜閱スルモ眼ナシ道心ナシ空ク其門下ニ衣食シ
 法賊ト謂ツベシ⁽³⁾又或僧云ク俗服蓄髮肉食セサレハ開化文
 明ノ世人ト交際シカタシト是又惑ヘルノ甚シキモノ也開化文
 明ノ世人トハ誰ソ諸本山繼日參内内務省社寺局往来ハ法
 服ナルニアラスヤ法用ハ無論檀家信徒ニ於テ法服ヲ忌ム理アラ
 ンヤ何ノ交際ニ障ルヤ若シ方袍圓頂ヲ嫌フ人ニハ交際セサルモ亦
 適ナルベシ元僧侶ナルカユヘニ僧形持戒ヲ嫌フノ人ハ三寶帰依
 ノ人ニアラサルベシ交際スルモ何ノ益カアランヤ可知汝カ所謂交
 際ハ歹ク是姪房酒肆花街柳巷ノ交際ナルベシ自ラ己レノ

【2ウ】

不品行ヲ吐クニ似タリ汝僧侶トノ袈裟ノ功德ヲ知ラス一夜モ袈
 裟ヲ離ル、^(原マヤ) 衣宿ノ過アリト況ンヤ汝出家以來ノ衣食
 住ハ勿論ニ莖華一葉ノ紙ニ至ルマテ皆是レ佛戒佛袈裟円
 頂方袍ノ功德ニアラサルコトナシ然ラハ則チ佛形佛相ヲ保護ノ
 日夜寢食ニ換ハテモ住持三宝ヲ圖ルベキニ口ヲ文明ニ借レテ
 只肉體ヲ愛シ煩惱ヲ養ヒ無明ヲ長セシメ因果ヲ昧シ未來
 ヲ恐レス伏祖ノ恩ヲ捨空ク信施ヲ費シ惡風ヲ他ノ少年輩
 ニ流シテ自ラ誤ルノミナラス他ヲノ誤ラシム是レ宗門ノ外道々徳

ノ罪人ニノ斬首ヲ嘗ナラズ大論云説レ性則為説相、説レ相則為説性、譬如説火性即是熱相、説熱相即是火性、又云如下積子受持、禁戒是其性、剃髮割截染衣是其相、如火熱是其性、煙是其相、近為性遠為相、云是レ水、相。

ノ相ニ煙ナク俗ノ相ニ剃髮染衣ナキカ如シ又水性ニ熱ナク俗ノ

【3オ】

性ニ受持禁戒ナキカ如シ豈ニ俗相ヲ好ムモノニ僧ノ性アルベケンヤ、豈ニ僧ノ性アルモノニ俗相ヲ好ムヘケンヤ是故ニ内外性相言行ヲ以テ人ヲ鑑ルトキハ鏡ニ物を移スカ如シ内ニアルモノハ必ス外ニ

アラハル豈ニ隠スコトヲ得ンヤ是所謂莫見、乎隱、莫顯、乎微、故君子慎其獨也ト於茲乎應知一言一行ミナ是レ己レノ本心本性ヲアラハス豈ニ慎マザルベケンヤ彼等口実ニ云ク旧習頑愚ノ田

舎僧ハ表ニ方袍円頂ヲ標スルモ内ニハ肉食犯姪忌ム所トシ外相何ンゾ是トスルニ足ランヤト汝シカラバ表ニ俗相ヲ好ムモ内ニ禁戒

ヲ持ツヤ否ヤ不持スト必セリ汝俗相ヲ好ムモノハ元ト破戒ヲ縦マニセント欲スルヨリ起ルナルベシ決ノ内ニ戒ヲ持テ表ニ俗相ヲ標スルノ

ミニアラサルベシ然レハ一步許ノ汝ヲ以テ表ニ俗相ヲ標ノ内ニハ持戒不犯トスルモ内ニ戒ヲ犯シテ表ニ僧形ヲ守ルノ田舎僧ト五十歩

百歩ノ論也汝モ亦一は一非彼モ亦一は一非ノ汝綾カニ學オ

【3ウ】

アツテ文明ノ時機ヲ知ルノ面目ヲ粧ト雖モ佛恩ヲ知ラス佛衣

ノ功德ヲ知ラス僧形ハ穢離ノ標幟タルヲ知ラス信施ノ財ニ養育セラレ其功德ニ報ルノ僧形ナシ是レ外相ノ俗ナルヲ以テ自

然ニ信者ノ志ヲ失ヒ是レ三寶帰依ノ信心ヲ壞ル実ニ獅子

身中ノ畏ニ付佛法ノ外道天魔波旬ノ化僧なり汝言ハン

タトヒ我レ俗相ナルモ檀徒敢テコレヲキラハス四事供養ノ施物ヲ授シ来ルト是レ汝カ俗相ヲ愛スルニ非ス寺ノ慣習ト人情ニ止ルノミ或ハ

愚信ノ野人ナランカ真実三寶帰依ノ人ト謂ヒタカシ否ナ真

実三寶帰依ノ人ニ汝カ俗相ヲ見ザルノ人ナルベシ真実ノ信

者ニ僧侶ノ俗相ヲ見テ信心ヲ起シテ施物ヲ授スルノ人アラシヤ君子務其本ヲ忘ル汝何ゾ慚愧ヲ知ラザルヤ汝何ゾ

因果ヲ恐レザルヤ

或僧云親鸞ハ英雄ナリ六百年前ニ妻帯宗ヲ開キマルチ

【4オ】

ンリヨ一サハ豪傑ナリ三百年前ニ妻帯宗ヲ開ケリ故ニ我等公然

妻帯シテ恬トノ耻サルノミナラス吾等率先シテ吾清僧宗ヲノコトク妻帯宗ヲラシメ彼ノ親鸞マルチンニ習ヒ英雄豪傑ノ

名ヲ後世ニ傳ヘント欲スト其然リ又予元ヨリ数百年前ノ前

後ヲ觀ルノ眼ナシト雖ヒ聊カ茲ニ考ル所アリ汝少ク耳ヲ傾テ聞ケ夫レ「マルチンリヨ一サ」ハ定テ豪傑ナルベキカ我レ洋學セサルヲ以テ其宗義其時代ノ景況如何ヲ知ラス然レヒ羅馬ノ末法

王暴政奢侈窮リナク随テ僧侶モ亦權威ニ傲リ品行不正ヲ以テ人民尽ク之ヲ厭フ其ノ虚ニ乘ノ興趣義ヲ主張ノ身命

ヲ顧ミザルハ実ニ豪傑タルモソレカ為メ幾百万ノ戦血ヲ濺クニ至

ルハ我人天慈父ノ忍ビザル所ナリ是レ佛ノ正法ニアラサルノ所致ナリ尚今日ニ至テ軋止マサル所以也血子血孫相續スル

トキハ尽未来際睡毗止ムベカラズ然レバ則チ一宗ヲ開クハ一修

【4ウ】

羅場ヲ開クト可謂也

又親鸞ノ如キハ何ヲ以テ英雄ト云ハ、法然上人ハ上帝王ヨリ下

萬民ニ至ルマテ天下ノ瞻仰傾心水ノ低キニ就クカ如ク実ニ活如來

ト称スルニ至ル其時ニ於テ親鸞其弟子トナルタトヒ其門下ニ屢ス

ルモ二三ト下ラサルノ俊邁英質ヲ以テ断然異赴義ヲ唱ヘ異

行ヲ現シ且ツ諸宗ノ清僧帝王ノ帰依ヲ受ケ戒師トナリ

國師トナル名譽高昂威光赫灼其時ニ當テ身ヲ優婆

塞ニ下リ自ラ愚禿沙弥ト称シ天下ヲ漂遊シテ艱難辛

苦ヲ厭ハス愚夫愚婦ノ教導ニ夜々タルハ実ニ為シ難キノ所

行ト可謂也其操行ノ結果ニ依テ今日真宗ノ隆盛諸宗

ノ上ニゾルモノハ実ニ羨ムヘク実ニ贊ヘベシ六百年前ノ先

見感スルニ余リアリ実ニ英雄ト謂ハサルヲ得ス然レト一歩進

ンテ佛法ノ大体ヨリ之ヲ見ルトキハ論破セザルヲ得ス夫レ

【5オ】

佛一代ノ所説戒定慧三學ヲ以テ本トセサルハナシ梵網經ハ華

嚴ノ開經佛最初ニ戒ヲ説キ又入涅槃ニ至リ遺教經ニ云波羅

提木又ハ汝等カ大師ナリ展轉ノ行ノ如來法身常ニ在ノ不滅

⁽¹¹⁾ト法華ニ於常在靈鷲山ト云モ是之ヲ謂ヒ也又四分律

資⁽¹²⁾治⁽¹³⁾記ニ云佛一代教化ノ切ハ戒過⁽¹⁴⁾米⁽¹⁵⁾一佛法僧ノ三宝ハ四恩

ノ隨一ニノ一切衆生ノ歸処ナリ其三寶中ノ僧ナルモノ豈ニ無戒

ノ僧ヲ謂ハレヤ豈ニ僧ヲ謂ハシヤ豈ニ無戒ノ佛アラシヤ豈ニ

有安道人『彈僧侶妻帶論』と有安老人『対客一話』について

佛ニ先見無フノ漫リニ戒ヲ設ケ未世ノ僧侶ヲ累ハスト謂ハン

ヤ決シテ然ルベカラザルコトハ白中ニ太陽ヲ見ルヨリモ明カナ

リ阿難告佛耶輸羅ノ母家ヲ許シ玉フ佛ノ言ク女僧

ノ為ニ佛法ノ壽命五百年ヲ減スヘシト真宗ノ如キ妻帶

宗ノ開クルカ為ニ佛法ノ衰滅ヲ早カラシムルコトハ見易キ

道理也又在家善男女三宝ヲ供養スルニ於テハ僧侶ノ持戒

【5ウ】

破戒ヲ簡フベカラスト云ハ佛祖ノ誠ナリト雖供養ヲ受ル僧侶

ニ於ハ尽ク破戒ヲ誠ム⁽¹⁴⁾正法眼藏無上心卷云ク佛言優

婆塞優婆夷善男子善女人以妻子肉供養三寶以

身自肉供養三宝諸比丘既受信施云何不修シカア

レハシリヌ飲食衣服卧具醫藥僧房田林等ヲ三宝ニ供

養スルハ自身オヨヒ妻子等ノ身肉皮骨髓ヲ供養シタテマツ

ルナリト

不清淨僧清淨僧ト同列シテ供養ヲ受ルハ不淨僧其罪

アリト若シ我レニ戒徳ナクシハ何ニ依テカ信施ノ債ヲ償ハン

ヤ無戒ノ僧侶ニノ私、ノ供養ヲ受ルハ尽ク隨獄ノ因トナル

ベシ然レハ則チ真宗ノ信徒金銀米穀ヲ不惜供養恭

敬スルハ上天往生ノ因トナルモ真宗無戒ノ僧侶ハ尽ク隨

獄ノ因トナルモ亦知ルヘカラス況シヤ清僧ノ名ヲ標ノ破

【6オ】

戒無慚ノ者ハ豈ニ恐レサルヘケンヤ然ルニ今日清僧タル者

真宗ヲ羨ンテ宗規ヲ変シテ公然妻帶宗トナラント

欲スルモノハ実ニ宗門ノ魔魅也宗祖ノ怨敵也宗門ノ僧徒

槌鼓攻ルモ亦可也暗ニ親鸞「リヨ一サ」ノ英傑を倣フト魚

氏「リヨ一サ」ノ修羅場ト親鸞ノ法害アルコトヲ知ラス法中

ノ盲目道中ノ禽獸ト謂ツベシ又今日佛法ノ僧侶ヲノ

尽ク妻帯セシムルトキハ一層佛法ノ隆盛ヲ得ルモ亦知ル

ヘカラスト魚氏三寶中ノ一宝於乎滅スヘシ唯経論學

術アルノミ真宗隆盛ト云ヘケンヤ而血子血孫ノ以テ相

續スルニ至ラハ宗教ノ人我儘ニ増長ノ羅馬法王ノ位置

ヲ占ルモ亦計リ難シト雖戰爭殺戮ノ慘状ヲ来スモ亦

凶ルベシカラス是レ佛ノ正法ニアラサルカ故ニ吾深ク憂之

且吾日本一小國ノミ積徒尽ク妻帯タルモ支那西藏

【6ウ】

暹羅錫倫印度ノ如キハ尽ク小乘人戒律ヲ持ノ清

僧タリト言フニアラスヤ後世若シ米國オ氏ノ如キ大信

者アリ戒律ヲ主張シ強大國ノ帝王アリテ其道ヲ信

シ異國ノ清僧ヲ以テ今日耶蘇面師ヲ日本ニ派遣

セシムルカ如清僧ヲ保護シテ日本ニ派遣セシムルニ至ラハ

如何ナル景状ヲ顯出センヤ思ヒ茲ニ至テ一夜不堪眠

俄然トノ起キテ禿筆ヲ掃シ遂ニ一篇ヲ綴ル因テ我

宗諸兄弟ニ一言ス妻帯同ノ憐儀ニ決スルコト勿レ

將來ノ杞憂ヲ抱キ確乎不拔ノ志ヲ起シ如幼草⁽¹⁸⁾

露ノ身命ヲ以テ常住不変ノ法身ニ換却シテ

有安老人對客一話 終

【奥書】

戒無慚ノ者真寐⁽¹⁹⁾

謹白

明治廿八年 清隱山安居之日

三月初三日 微笑庵謹寫

翻刻註記

- (1) 前半第一問
- (2) この「二」は問いを終える箇所を示すために挿入されたと思われるが、文意からすれば、二行前の「尽力スベシト」までが第一問の問いに該当すると思われる。
- (3) 前半第二問
- (4) 『大智度論』卷三二「積初品中十八空義第四十八」からの取意、『大正藏』卷二五・二九三b
- (5) 『中庸』第二章、『大学・中庸』一四一頁
- (6) 後半第一問
- (7) 以下、後半第一問に対する第一の応答となる。
- (8) 以下、後半第一問に対する第二の応答となる。
- (9) 「ヘベシ」とあるが、おそらくは「フベシ」であろう。

- (10) 『遺教経』からの取意、『大正蔵』巻二二・一一一〇c
- (11) 『妙法蓮華経』「如来寿量品」、「大正蔵」巻九・四三c
- (12) 著作名から靈芝元照『四分律行事鈔資持記』(『大正蔵』巻四〇所収)を指すと思われるが、該当する文脈は不明。
- (13) ゴータマIIブツダの妻であったヤショードラー(漢訳仏典では「耶輸陀羅」と表記されることが多い)出家に因む話である。典拠としては複数考えられる。女性の出家により仏法(正法)の寿命が五百年短くなる説は、ゴータマの継母ゴータミー(マハーパジャパティ)の出家に因む話として記録(『中阿含林品瞿曇弥経』第十、『大正蔵』巻一・六〇七b)されることもある。律典の一部は、ゴータミーとヤショードラーの出家を同時期とするものもある。
- (14) 本文の註記(19)を参照のこと。
- (15) 以下、後半第一問に対する第三の応答となる。
- (16) 「墮獄」と書くはずだったと思うが、著者か書写者か、何れかの誤記である。
- (17) 「シ」は衍字か。
- (18) 「幼」と読めるが、「幻」の誤記であろう。
- (19) 6才に入る文章だが、誤記のために消されて巻末の奥書を書くための用紙になったものか。

参考資料

- ・『大正新修大蔵経』を参照した。引用などを行う場合には『大正蔵』と略記し、巻数・頁数・段数をもって表記した。
- ・金谷治訳『大学・中庸』岩波文庫・一九九八年

有安道人『彈僧侶妻帯論』と有安老人『対客一話』について

研究業績 (2018年1月～12月)

青山健太

〈学会発表〉

スポーツにおけるドーピング問題	スポーツ史学会第32回大会シンポジウム (愛知学院大学)	12月	シンポジウム司会
-----------------	---------------------------------	-----	----------

浅原正和

〈論文〉

Loss of Stemness, EMT, and supernumerary tooth formation in <i>Cebpb</i> ^{-/-} <i>Rumx2</i> ^{+/-} murine incisors. (共)	<i>Scientific Reports</i> 8	3月	5169 (オンライン)
--	-----------------------------	----	--------------

A helminthological record on free-ranging pikas and rodents collected from Tibetan plateau, China: preliminary results. (共)	<i>Annals of Clinical Cytology and Pathology</i> 4	6月	1106 (オンライン)
---	--	----	--------------

〈学会発表〉

カモノハシはなぜ歯を失った？ 化石から推測される三叉神経の発達と行動の進化	第9回 有明臨床解剖学シンポジウム (有明医療大学)	1月	招待講演
---------------------------------------	-------------------------------	----	------

海を渡ったエゾタヌキタイプ標本の行方：20世紀前半における米国動物園の動物収集意欲と動物園における記録の価値	生き物文化誌学会 第16回学術大会 (立正大学)	6月	口頭発表
--	-----------------------------	----	------

比較形態学を基軸に遺伝子改変マウスと分子進化の解析を用いた変異性と進化傾向の研究 (シンポジウム「比較形態学的手法による進化傾向の研究」)	日本進化学会第20回大会 (東京大学)	8月	口頭発表・企画シンポジウム開催
---	------------------------	----	-----------------

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

生物多様性から抽出された情報により多様性形成の遺伝的・発生的・適応的基盤をさぐる (共)	『哺乳類科学』 58	6月	119-120
--	------------	----	---------

「カモノハシ」(図鑑の監修)	小学館『こども大百科 もっと大図解』	11月	36-37
----------------	--------------------	-----	-------

カモノハシはなぜ歯を失った？ くちばしの感覚と歯のトレードオフ!?	いぎもにあ2018 (神戸サンポーホール)	12月	一般向け講演
-----------------------------------	--------------------------	-----	--------

糸井川修

〈学会発表〉

戦争に対する闘い—ベルタ・フォン・ズットナーの平和運動—	日本独文学会東海支部夏季研究発表会 (シンポジウム「現代への転換期における社会構造の変化と思想の変遷」) (名古屋大学)	7月	口頭発表
------------------------------	---	----	------

戦争のない時代に向けて—ベルタ・フォン・ズットナーの『武器を捨てよ!』と『人類の崇高な思想』—	日本オーストリア文学会秋季例会 (名古屋大学)	9月	講演
---	----------------------------	----	----

岩佐宣明

〈学会発表〉

マルクスの所有概念に関する一考察（単）	名古屋哲学研究会例会 (名古屋市立大学)	12月	口頭発表
---------------------	-------------------------	-----	------

海野勇三

〈学会発表〉

体育・スポーツ分野における国際教育協力の効果的な支援方略について—国際教育協力の方法論における“3S”再考—（単）	日本体育科教育学会第23回大会 (沖縄大学)	6月	口頭発表
---	---------------------------	----	------

スポーツ教育学の一分科としての国際スポーツ教育協力論の可能性（単）	日本スポーツ教育学会第38回大会 (広島大学)	10月	口頭発表
-----------------------------------	----------------------------	-----	------

途上国に対する国際教育支援の方法論の検討（共）	日本スポーツ教育学会第38回大会 (広島大学)	10月	口頭発表
-------------------------	----------------------------	-----	------

明文化されたカリキュラムと現実の育ちとの狭間—途上国のデータから推察する—（共）	日本スポーツ教育学会第38回大会 (広島大学)	10月	口頭発表
--	----------------------------	-----	------

大松久規

〈論文〉

『法界次第初門』に見られる禅観（単）	『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』 第19回	8月	175-179
--------------------	-----------------------------	----	---------

〈学会発表〉

『釈禪波羅蜜次第法門』所説の禅観—『法界次第初門』との比較—（単）	東海印度学仏教学会第64回学術大会	7月	口頭発表
-----------------------------------	-------------------	----	------

宝地房証真の禅観（単）	日本仏教学会2018年度学術大会（第88回大会）	9月	口頭発表 (台風により中止)
-------------	--------------------------	----	-------------------

智顛前期時代の講説について—『釈禪波羅蜜次第法門』を中心として—（単）	曹洞宗総合研究センター第20回学術大会	10月	口頭発表
-------------------------------------	---------------------	-----	------

川口勇作

〈論文〉

The relationship between complexity and fluency in L2 writing: An approach using network analysis（共）	<i>Language Education & Technology</i> , 55	6月	171-198
--	---	----	---------

〈学会発表〉

マウス操作のデータを用いた単語テストにおける解答行動の分析（共）	日本教育工学会第34回全国大会	9月	口頭発表
----------------------------------	-----------------	----	------

北村伊都子

〈論文〉

Men who were thin during early adulthood exhibited greater weight gain-associated visceral fat accumulation in a study of middle-aged Japanese men. (共) Obesity science & Practice, 18; 4(3) 5月 289-295

小柳竜太

〈学会発表〉

「ワールドラグビー試験的ルール」の検証— 2016年度及び2017年度の Six Nations におけるスクラムに着目して— (共) 日本体育学会第69回大会 (徳島大学) 8月 口頭発表

近藤 浩

〈論文〉

Our Mutual Friend における父子の和解 (単) 『英語英文学論叢片平』第53号 3月 19-31

境田雅章

〈論文〉

Jリーグのクラブ経営に関する一考察 『愛知学院大学教養部紀要』第65巻第3号 3月 1-13

柴田哲雄

〈著書〉

フクシマ・抵抗者たちの近現代史：平田良衛・岩本忠夫・半谷清寿・鈴木安蔵 (単) 彩流社 2月 全253頁

〈論文〉

胡耀邦伝のための覚書き (単) 『愛知学院大学教養部紀要』第66巻第1号 9月 17-52

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

(雑文) 7回目の3・11を迎えて：フクシマにおける「抵抗」の精神の発掘の意義について考える (単) HUFFPOST 3月

(雑文) 飯館村を掘り下げる：佐藤昌明『飯館を掘る：天明の飢饉と福島原発』(現代書館、2018年)について (単) HUFFPOST 5月

〈インタビュー〉強権目立つ習近平氏の原点 加藤直人・論説委員が聞く 中日新聞・東京新聞 8月

〈研究報告〉小高が生んだ偉大な警世家 半谷清寿 (単) 浮舟文化会館 研修室 (小高生涯学習センター) 9月

(雑文) 中国は今後もドイツと日本を反面教師にするのか (単) 産経新聞ウェブ版 11月

(雑文) 日露平和条約締結のタイミングを間違えるな (単) WEBRONZA 12月

城 貞晴

〈学会発表〉

Microscopic investigation of PVT-PDA crystal surface preferentially assembled many backbone-chain-ends (単) The 10th International Conference of Modification, Degradation and Stabilization of Polymers (東京) 9月

輸送気相法ジアセチレン結晶の固相重合最適方位の二重性が表面モルフォロジーに与える影響 (単) 日本物理学会2018年秋季大会 (京都) 9月

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈招待講演〉X線トポグラフィ法を用いた数種の有機結晶の形態・品質評価 (単) 山口東京理科大学工学部応用化学科第257回コロキウム (山口) 11月

菅原研州

〈論文〉

鈴木正三と大内青巒の排耶論について (単) 『愛知学院大学教養部紀要』第65巻第3号 3月 207-220

瞎道本光『禅戒口訣或問』の研究 (単) 『愛知学院大学禅研究所紀要』第46号 3月 39-58

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究 (二) 菅原研州・大橋崇弘・山端信祐 (共) 『愛知学院大学禅研究所紀要』第46号 3月 71-95

四大綱領と発願式～曹洞宗の教義と教化について (ハンドアウト) (単) 『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第19回 8月 3-6

道元禅師成仏論の教化的展開について (単) 『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』第19回 8月 43-48

近世後期洞門僧の教化意識について (単) 『日本仏教総合研究』第16号 9月 101-120

乙堂喚丑『正法眼蔵続絃講議』写本の研究 (単) 『印度学仏教学研究』第67巻第1号 12月 52-58

〈学会発表〉

乙堂喚丑『正法眼蔵続絃講議』写本の研究 日本印度学仏教学会第69回学術大会 (東洋大学) 9月 口頭発表

金子白夢牧師の思想形成について 日本宗教学会第77回学術大会 (大谷大学) 9月 口頭発表

『永平広録』と道元禅師成仏論 曹洞宗総合研究センター第20回学術大会 (曹洞宗檀信徒会館) 10月 口頭発表

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈講演〉禅・坐禅とは何か? 愛知県安城市生涯学習講座「三河創年塾」 2月

〈投稿〉面山瑞方禅師と永福庵 永福面山和尚鑽仰会『永福会報』平成30年度 3月

〈講演〉明治時代の日本仏教事情 愛知県知上市生涯学習講座 6月

〈連載〉いろいろな名前をおぼえよう 『てらスクール』曹洞宗宗務庁出版部 1-12月

〈連載〉石川素童禅師の「勸戒」 『跳龍』大本山總持寺出版部 1-3月

田中泰賢

〈論文〉

あるアメリカの詩人・作家たちのメッセージ
—ケルアック、スナイダー、ディキンソン—
(単) 『愛知学院大学教養部紀要』第65巻第2号 1月 1-16

既成価値を問うアメリカの詩人たち—ホエー
ラン、スナイダー、ギンズバーガー—(単) 『愛知学院大学教養部紀要』第65巻第3号 3月 15-33

ルース・オゼキ (Ruth Ozeki) の *A Tale for
the Time Being* (『あるときの物語』)(単) 『愛知学院大学教養部紀要』第66巻第1号 9月 1-15

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈翻訳〉ジョン・グールド・フレッチャー作
『日本の版画』抄訳(単) 『愛知学院大学語研紀要』第43巻第1号 1月 161-186

映画『梅の木の俳句』から学ぶ(単) 『英米文学手帖』第56号 関西英米文学研
究会 12月 83-85

塚本早織

〈著書〉

『偏見や差別はなぜ起こる? 心理メカニズ
ムの解明と現象の分析』 ちとせプレス 7月 115-131
北村英哉・唐沢穰 編著
第7章移民(共)

『責任と法意識の人間科学』 勁草書房 1月 36-63
唐沢穰・松村良之・奥田太郎(編著)
第2章「組織の責任」と素朴法意識(共)

“The Psychological and Cultural Foundations of
East Asian Cognition: Contradiction, Change, and
Holism” Oxford University Press 2月 第11章
335-351
Julie Spencer-Rodgers & Kaiping Peng (Eds.)
Chapter 11 — Entitativity Perceptions of
Individuals and Groups Across Cultures (共)

〈論文〉

Perceived Threat to National Values in Evaluating
Stereotyped Immigrants (共) *The Journal of Social Psychology*, 158(2) 4月 157-172

Psychometric Properties of Measures of Hedonic
and Eudaimonic Orientations in Japan: The
HEMA Scale (共) *Current Psychology* 8月 Online
[https://link.springer.com/article/10.1007%
2Fs12144-018-9954-z](https://link.springer.com/article/10.1007%2Fs12144-018-9954-z) First

〈学会発表〉

The Effects of Essentialist Beliefs on Pro-Social
Attitudes: A Prediction from Behavioral Ecology
(共) 日本社会心理学会第59回大会 8月 ポスター
(追手門学院大学) 発表

都築正喜

〈論文〉

言語聴覚士育成と医療音声学の構築 (I) (単)	日本英語音声学会機関誌『英語音声学』第22号	1月	183-195
Speech Therapist 育成と音声の基礎理論 (I) (単)	『愛知学院大学語研紀要』第43巻第1号	1月	27-70
日本英語音声学会中部支部の23年間を総括して (1) (単)	日本英語音声学会中部支部学術論文集「英語音声学研究」第7号	8月	123-130
日本英語音声学会中部支部の23年間を総括して (2) (単)	日本英語音声学会中部支部学術論文集「英語音声学研究」第7号	8月	131-140

〈学会発表〉

日本英語音声学会の23年間と「英語教育音声学」の樹立 (単)	日本英語音声学会第23回全国大会 (北見工業大学)	9月	口頭発表
--------------------------------	------------------------------	----	------

〈その他〉 (翻訳・資料・その他)

〈パネリスト〉英語音声研究に新たな視点を求めて	日本英語音声学会中部支部第28回研究会 (名古屋学院大学)	3月	口頭発表
〈パネリスト〉教育の現場に英語音声学をどのように活かすか：実践報告と課題	日本英語音声学会第23回全国大会 (北見工業大学)	9月	口頭発表

富田啓介

〈著書〉

『新修豊田市史 別編 自然』豊田市史編纂委員会編 (共)	豊田市	3月	
『なごや生物多様性ガイドブック』なごや生物多様性保全協議会編 (共)	名古屋市	10月	

〈論文〉

東海地方の湧水湿地の環境と保全：特集にあたって (単)	『湿地研究』第8巻	3月	59-62
湧水湿地の環境は東海地方においてどこまで理解されたか？ (単)	『湿地研究』第8巻	3月	63-79

〈学会発表〉

湿原の環境と土壌：特に泥炭湿原と鈹質土壌湿原の比較 (単)	ベドロロジー学会2018年度大会 (名城大学)	3月	口頭発表
消滅した湧水湿地の土壌から発芽した湿地植物 (単)	第10回日本湿地学会大会 (豊田市自然観察の森)	9月	口頭発表
湧水湿地を知り尽くす：東海地方1,600箇所 の踏査から見えるもの (単)	第10回日本湿地学会大会 (豊田市自然観察の森)	9月	口頭発表

〈その他〉 (翻訳・資料・その他)

〈講演〉海上の森の自然：海上の森ってどんなところ？	海上の森大学基礎講座 (あいち海上の森センター)	3月	
---------------------------	-----------------------------	----	--

〈講座〉 知多半島から里地・里山を考える	常滑市平成30年度市民講座 (とこなめ市民交流センター)	6月	
〈講演〉 野の花を見ながら知多半島の里山を 探検しよう	企画展「知多半島の里山—農家のくらし—」 記念講演会 (半田市立博物館)	7月	
〈講演〉 湧水湿地を利用する生きものたち： 自動撮影カメラ調査の結果から	豊田市湿地保全連絡会 (豊田市自然観察の森)	9月	
〈講座〉 筆者とめぐる豊田の湿地	豊田市史講座 (豊田市亀首湿地)	9月	
〈講座〉 東海地区の湿地の成り立ちと植生	東海シニア自然大学専修科講義 (豊田市自然観察の森)	10月	
〈講演〉 長久手市二ノ池湿地の地形・地下水 位・植生分布	長久手湿地保全の会勉強会 (長久手市民交流プラザ)	12月	

中村 綾

〈学会発表〉

天理大学蔵、沢田一齋稿本「売油郎独占花魁」 について—一齋の校訂と依拠テキストを めぐって— (単)	東海近世文学会12月例会 (第282回) (熱田神宮文化殿二階会議室)	12月	口頭発表
--	--	-----	------

西谷茉莉子

〈著書〉

Yeats and Audiences in the 1930s: Refrain in His Late Ballads, “The Ghost of Roger Casement” and “The Curse of Cromwell” 『比較文化の語らい』 (共)	英光社	9月	94-106
--	-----	----	--------

〈論文〉

イエイツと「聴衆」—“Three Songs to the Same Tune”の改作についての考察— (単)	『Albion』第64号	11月	16-28
--	--------------	-----	-------

〈その他〉 (翻訳・資料・その他)

〈翻訳〉 ジョン・モンタギュー作『毒された 土地』とその他の詩より (1) (共訳)	『愛知学院大学教養部紀要』第66巻第1号	9月	53-75
---	----------------------	----	-------

〈シンポジウム報告〉 スウィーニーとアイル ランド：ロバート・グレイヴスのエリオット 批判 (単)	『T. S. Eliot Review』No. 23	11月	43-55
---	----------------------------	-----	-------

野田大志

〈論文〉

日本語多義動詞の意味分析に関する覚書—メ タ言語の選定及び語義の区分—	『愛知学院大学教養部紀要』第65巻第3号	3月	73-91
--	----------------------	----	-------

表現学関連分野の研究動向：認知言語学	『表現研究』第107号	4月	57
--------------------	-------------	----	----

〈学会発表〉
 多義動詞の語義認定と構文的意味をめぐって (ワークショップ「多義動詞の分析—特徴の記述と分析方法の精緻化」における単独発表) 日本認知言語学会第19回全国大会 (静岡大学) 9月 口頭発表

〈その他〉(翻訳・資料・その他)
 〈辞書〉「合わせる」(単) 『基本動詞ハンドブック』(国立国語研究所) <http://verbhandbook.ninjal.ac.jp> 2月 Web版

藤田淳志

〈論文〉
 Changing Perception of LGBT People through Performances—Theater and Television in America and in Japan (単) Journal of Urban Culture Research, Volume 17 12月 54-71

〈学会発表〉
 Angels in America 再考—トランプ政権下のリバイバルプロダクションが示すもの— (単) 日本アメリカ文学会中部支部 6月 口頭発表

堀田敏幸

〈論文〉
 ベケット、幽霊屋敷の住人 (単) 『愛知学院大学語研紀要』第43巻第1号 1月 3-25

松井真一

〈学会発表〉
 計量分析のための各種社会調査の方法と特徴 関西ソシオロジー研究会 (立命館大学) 3月 口頭発表

文 嬉眞

〈論文〉
 日本の大学における第2外国語としての韓国語教育の位相と現況—愛知学院大学の必修科目を事例として— (共・査読あり) 『韓国語教育研究』第8号 9月 126-149

〈学会発表〉
 日本の大学における韓国語教育—韓国語中級クラス受講生のアンケート結果を基に— (共) 第9回日本韓国語教育学会学術大会 (金沢工業大学) 11月 口頭発表 (大会誌 103-115)

山口拓史

〈著書〉
 『ハンディ教育六法2018年版』(共) 北樹出版 4月 251-355

〈論文〉
 教職課程コアカリキュラムに関する一考察(1)—その作成経緯等を中心に— (単) 『愛知学院大学教養部紀要』第65巻第2号 1月 17-32

山口 均

〈学会発表〉

岡倉天心と T. S. エリオット 日本 T. S. エリオット協会第31回大会（首都大学東京） 11月 口頭発表

山名賢治

〈論文〉

Chemical synthesis of 4-azido- β -galactosamine derivatives for inhibitors of *N*-acetylgalactosamine 4-sulfate 6-O-sulfotransferase (共) Glycoconjugate Journal Volume 35, Issue 5 10月 477-491

吉村正宏

〈論文〉

Revisiting the Cu^{II}-Catalyzed Asymmetric Friedel-Crafts Reaction of Indole with Trifluoropyruvate (共) Organic Letters, American Chemical Society, 20(22) 10月 7149-7153

鷲嶽正道

〈論文〉

大学初年次向け「理系」教科書（英語）が扱う「物」（単） Proceedings of JASFL 2018 10月 47-60

『教養部紀要』第66巻総目次

第1号（通巻第194号）平成30年9月発行

論 文

田 中 泰 賢：ルース・オゼキ（Ruth Ozeki）の *A Tale for the Time Being*（『あるときの物語』）について
.....（1）

Hiro Yoshi TANAKA : *A Tale for the Time Being* by Ruth Ozeki

柴 田 哲 雄：胡耀邦伝のための覚書き（17）

Tetsuo SHIBATA : The Memorandum for the Biography of Hu Yaobang

翻 訳

西 谷 茉莉子・塩 谷 直 史：ジョン・モンタギュー作『毒された土地』とその他の詩より(1).....（53）

Mariko NISHITANI and Tadashi ENYA : *Poisoned Lands* and Other Poems by John Montague (1)

資 料

川 口 高 風：「明教新誌」・「日出国新聞」における仏骨奉迎の記事について（下）.....（172）

Kōhū KAWAGUCHI : On the Meikyoshinshi・Yamatoshinbun Journal Article Related
to Welcoming Buddha's Remains (2)

第2・3合併号（通巻第195号）平成31年3月発行

論 文

近 藤 浩：*Hard Times* における reasoning animals について（1）

Hiroshi KONDO : On Reasoning Animals in *Hard Times*

柴 田 哲 雄：汪兆銘伝のための覚書き（13）

Tetsuo SHIBATA : The Memorandum for the Biography of Wan Zhaoming

清 水 義 和：サミュエル・ベケットと北村想に於ける詩劇（65）

Yoshikazu SHIMIZU : On Poetic Drama by Samuel Beckett & So Kitamura

田 中 泰 賢：フィリップ・ホエーランの詩（83）

Hiro Yoshi TANAKA : Poems of Philip Whalen

田 中 泰 賢：アメリカからのメッセージ

——ロアルド・ホフマンとフィリップ・ホエーランの詩——（97）

Hiro Yoshi TANAKA : Messages from America—Poems by Roald Hoffmann and Philip Whalen

菅 原 研 州：有安道人『弾僧侶妻帯論』と有安老人『対客一話』について

——付録『対客一話』翻刻資料——（132）

Kenshū SUGAWARA : About Uandōnin's "Dansouryosaitairon" and Uanrōnin's "Taikakuichiwa"

執筆者紹介

近藤 浩 (本学准教授……………英語)
KONDO Hiroshi

柴田 哲雄 (本学准教授……………歴史学)
SHIBATA Tetsuo

清水 義和 (本学客員教授……………英語)
SHIMIZU Yoshikazu

田中 泰賢 (本学客員教授……………英語)
TANAKA Hiroyoshi

菅原 研州 (本学准教授……………宗教学)
SUGAWARA Kenshū

教 養 教 育 研 究 会 委 員

(会長) 河 野 敏 宏 (副会長) 有 馬 義 康

(会計) 野 田 大 志

※青 山 健 太 ※有 馬 義 康 池 田 健

岡 島 秀 隆 北 村 伊 都 子 ※柴 田 哲 雄

※都 築 正 喜 ※西 谷 茉 莉 子 ※野 田 大 志

※福 山 悟 ※文 嬉 眞 山 口 拓 史

※本号編集委員

編 集 後 記

『教養部紀要』第66巻第2・3合併号をお届けいたします。今年度は、第2号を発行するのに十分な投稿数を確保することができず、第3号と合併という運びになりました。しかし、結果として、論文6本という重厚な構成とますます充実した内容でもって、本号をお届けするに至りました。ご投稿いただきました先生方に、心よりお礼を申し上げます。

また、今年度は巻末の研究業績リストの作成にあたって回収方法を変更し、先生方各位に電子ファイルでご入稿、ご提出いただきました。こちらにつきましても、急なお知らせもにかかわらずご協力賜りましたこと、深く感謝いたします。

今後も教養部における多分野にわたる研究の発展と、本紀要のさらなる充実を祈念いたします。(西谷記)

愛知学院大学教養教育研究会会則

- 第 1 条 本会は愛知学院大学教養教育研究会と称する。
- 第 2 条 本会の事務所は愛知学院大学教養部に置く。
- 第 3 条 本会は大学設立の趣旨に則り、人文科学・社会科学・自然科学・語学・健康総合科学等の、教養教育に関する諸学の研究成果ならびに教育成果の発表を通じ、学問の水準を維持、向上せしめ教育及び社会一般に寄与することを目的とする。
- 第 4 条 本会の会員は次の通りとする。
- (1) 正 会 員 本大学の教養部専任教員とする。
 - (2) 準 会 員 本大学の在學生とする。
 - (3) 賛助会員 本大学の卒業生及び本会の趣旨に賛同し、会長の承認を得た者とする。
- 第 5 条 本会は第 3 条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 機関誌「愛知学院大学論叢教養部紀要」の刊行
 - (2) 研究会、講演会、討論会等の開催
 - (3) その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業
- 第 6 条 「愛知学院大学論叢教養部紀要」は原則として毎年 3 回発行し、会員に配布する。
- 第 7 条 本会は教養教育研究会委員会を置き、委員は次の者で構成する。
- (1) 会 長 1 名
 - (2) 副 会 長 1 名
 - (3) 委 員 12 名
 - (4) 会 計 1 名
- 2 会長は学長これを委嘱する。
 - 3 委員は正会員の互選により、人文科学・社会科学・自然科学・第 1 外国語・第 2 外国語および健康総合科学の各系列より 2 名あて選出する。委員の任期は 2 年とする。ただし、再任を妨げない。
 - 4 副会長及び会計は委員の互選により、会長がこれを委嘱する。
- 第 8 条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
- 2 副会長は会長を補佐し、会務を掌る。
 - 3 委員は委員会を構成し、本会の企画運営にあたる。
- 第 9 条 会長は委員会を招集し、その議長となる。
- 第 10 条 会長は本会の会務執行のため、必要あるときは実行委員会を委嘱することがある。
- 第 11 条 会員は毎年度始めにおいて会費を納入する。
- 2 新入会員は入会金を納付するものとする。
- 第 12 条 本会の運営費は、会員の納付する会費、愛知学院大学からの補助金または有志からの寄付金およびその他の収入をもってこれにあてる。
- 第 13 条 本会の会計は 4 月に始まり、翌年 3 月に終る。
- 第 14 条 本会の会則の改正は正会員の 3 分の 2 以上の賛成をもって成立する。
- 付 則

本会則は、昭和32年4月1日に制定し、即日施行する。

本会則は、昭和53年2月6日に改正し、即日施行する。

本会則は、昭和57年3月24日に改正し、同年4月1日より施行する。

本会則は、昭和58年6月17日に改正し、即日施行する。
本会則は、昭和63年4月1日に改正し、即日施行する。
本会則は、平成2年7月6日に改正し、同年4月1日より施行する。
本会則は、平成8年7月19日に改正し、即日施行する。
本会則は、平成11年12月17日に改正し、翌年4月1日より施行する。
本会則は、平成20年12月12日に改正し、翌年4月1日より施行する。
本会則の施行により愛知学院大学一般教育研究会会則を廃止する。
本会則は、平成27年4月1日に改正し、即日施行する。

愛知学院大学論叢「教養部紀要」投稿規程

1988年4月1日成立・実施

〔投稿資格〕

第 一 条 この会誌に投稿する資格をもつ者は、原則として教養教育研究会正会員とする。

〔転載の禁止〕

第 二 条 他の雑誌に掲載された論文・資料・翻訳・書評などは、これを採用しない。

〔原稿の形式〕

第 三 条 投稿に際しては、次の要領に従って本文、図および表を作成する。

(1) 原稿は、電子媒体による入稿とする。(プリントアウトを1部添付する)

(2) 原稿の量はおおむね16,000字以内とする。

(3) 本文の前に、別紙で、次の3項を次の順序で付する。

(i) 和文の題目および執筆者名。

(ii) 欧文の題目および執筆者名。

(iii) (イ) 論文・資料・翻訳・書評などの区別

(ロ) その論文・資料・翻訳・書評などが属する専門領域名。

ただし、ここにいる専門領域は、人文・社会・自然・外国語・健康総合科学の5部門に区別する。

(ハ) 教授・准教授・講師・助教・外国人教師など別

(4) 図・表・写真は、印刷するのに十分な画質のもの(原則としてモノクロ)を、本文の該当箇所に挿入する。

〔原稿の申込み〕

第 四 条 投稿希望者は、教養教育研究会委員会(以下、委員会と称す)の公示する期限までに、委員会の提示する申し込み用紙に氏名を記入する。

ただし、申し込み者が所定の数に達しないか、またはそれを越える場合には、委員会がこれを調整する。

〔提出期限〕

第 五 条 投稿は委員会の定める提出期限までにこれを行う。締切り日以後に提出された原稿は掲載されないことがある。

〔原稿組版の制限〕

第 六 条 図版・カラー写真などの掲載により一般の経費より多くかかる場合は、その必要性を各号の編集

責任者に申し出て委員会を開催して審議し、承認を得ることとする。なお、承認を得られず掲載を希望する場合、その費用を別途に個人負担とする。

〔原稿修正の制限〕

第七 条 投稿後の原稿の修正は、原則としてこれを行わないものとする。やむをえない場合は初校において修正し、その範囲は最小限度にとどめる。大幅な修正の結果、印刷費が追加されるときは追加費用を個人負担とすることがある。

〔校 正〕

第八 条 校正は原則として第3校までとし、本文については執筆者がこれに当たり、表紙・奥付その他については編集委員がこれに当たる。

〔抜き刷り〕

第九 条 抜き刷りは、論文・資料・翻訳・書評など各1篇につき50部までを無料とする。これを越える分については実費を執筆者の負担とする。50部以上を要する場合には、執筆者はその必要全部数を原稿の表紙に朱記する。

〔掲載論文等の複製権・公衆送信権〕

第十 条 この会誌に掲載された論文等の電子化および公開に関わる複製権および公衆送信権は、教養教育研究会に属するものとする。

ただし、掲載された論文などの執筆者が他の機関への転載もしくは複製権または公衆送信権の行使を申し出た場合は、正当な理由がない限り、教養教育研究会はこれを拒むことはできない。

付 則

- 一、本規定の改正には、教養教育研究会正会員の3分の2以上の賛成を要する。
- 二、本規定は、1988年4月1日に成立し、即日施行する。
- 三、本規定は、1996年7月19日に改正し、即日施行する。
- 四、本規定は、1999年12月17日に改正し、翌年4月1日より施行する。
- 五、本規定は、2003年11月21日に改正し、即日施行する。
- 六、本規定は、2005年4月22日に改正し、即日施行する。
- 七、本規定は、2007年11月16日に改正し、即日施行する。
- 八、本規程は、2018年9月21日に改正し、即日施行する。

申し合わせ（教養部会 2010. 7. 16）

- 第一条の「投稿する資格を持つ者」には、以下の非正会員を含む。
 - (1) 正会員との共同執筆による投稿
 - (2) 正会員が推薦する本学教養部の非常勤講師で、本務校をもたない人の投稿
 - (3) 元正会員で、本務校をもたない人の投稿
- 上記(1)(2)(3)に該当する投稿希望者がある場合は、担当編集委員が投稿の可否を決定し、投稿希望者に通知する。担当編集委員で判断できない場合には、教養教育研究会委員会を開いて投稿の可否を決定する。
- 投稿原稿の掲載に際しては、(1)の場合の原稿料は1篇分とし、(2)(3)の場合の原稿料は支払われない。また、(1)(2)(3)いずれの場合も抜き刷り50部までは無料とする。
- 投稿者は、第三条の〔原稿の形式〕を厳守し、第四条の〔原稿の申し込み〕の時に委員会の提示する「投稿票」用紙に必要な事項を記入のうえ添付して投稿する。
- 投稿された原稿について担当編集委員から検討の申し出があった場合は教養教育研究会委員会を開き、委員会名において訂正を依頼したり投稿を断ることがある。

●第六条「図版・カラー写真の掲載」については、紀要作成予算の範囲内と見なされる場合、その採否は紀要編集委員の決議にゆだねるものとする。ただし、予算の範囲を逸脱する、あるいは採否の決議が困難の場合は教養教育研究会委員会を開催して、決定することとする。

(注) 教養教育研究会が本会正会員の著書・論文等について書評を依頼する場合は、原稿料を支払うこととする。

平成31年3月19日 印刷
平成31年3月27日 発行

(非売品)

愛知学院大学論叢

編集責任者

教養部紀要第66巻

河野敏宏

第2・3合併号(通巻第195号)

発行者 愛知学院大学
教養教育研究会
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12

電話 〈0561〉(73) 1111 (代表)

印刷所 株式会社あるむ

電話 〈052〉(332) 0861

THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

Humanities & Sciences

Vol.66 No.2, 3
(Whole Number 195)

C O N T E N T S

Articles

Hiroshi KONDO : On Reasoning Animals in <i>Hard Times</i>	(1)
Tetsuo SHIBATA : The Memorandum for the Biography of Wan Zhaoming	(13)
Yoshikazu SHIMIZU : On Poetic Drama by Samuel Beckett & So Kitamura	(65)
Hiroyoshi TANAKA : Poems of Philip Whalen.....	(83)
Hiroyoshi TANAKA : Messages from America—Poems by Roald Hoffmann and Philip Whalen.....	(97)
Kenshū SUGAWARA : About Uandōnin’s “Dansouryosaitairon” and Uanrōnin’s “Taikakuichiwa”	(132)
Achievements (2018)	(133)
Vol. 66 The Total Contents.....	(143)

Published
by

Aichi Gakuin University
Nagoya, Japan
2019